

# 灰と幻想のグリムガル ～死霊術師の物語～

arc00

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

タイトル変更しました

目覚めた少女は何も覚えていなかった

義勇兵見習いになった彼女が選んだクラスはオルタナにはない死霊術師へネクロマンサーのギルド

これは死霊術師へネクロマンサーになった少女の物語

感想、ご意見お待ちしております

# 目次

ささやき、目覚め、出会い

1話	1話	9話	8話	7話	第6話	5話	4話	3話	2話	1話
103	91	81	71	66	57	47	37	28	14	1

24話	23話	22話	21話	20話	19話	18話	17話	16話	15話	14話	13話	12話
232	221	211	202	192	182	172	160	150	140	133	124	114

3 3 3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 2  
7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5  
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話

362 354 345 336 324 316 309 295 280 271 263 255 243

425 4 4 話 私ってどんなタイプ？ 414  
4 3 話 休日 414  
4 2 話 プロローグ 402  
る  
自分だけうまくいっても失敗する時もある  
そして・・・ 396  
4 1 話 撤退じゃなくて撤回  
4 0 話 奇襲攻撃 385  
3 9 話 377  
3 8 話 369

「ささやき、目覚め、出会い

1話 っくはどく？」

——目覚めよ——

——目覚めよ——

頭の中に声が響く・・・

その声は私を呼んでいるようなそんな感じがして私は目を覚ました。

周りは真つ暗だけど松明に照らされてここが屋根のある場所だとわかる。

「っ！」

体から感じる感触は硬い。石床に寝かされているみたいだ。首を動かして辺りを見渡すと奥の方に出口らしき灯りが見える。なぜ自分がここにいるのかがわからず動けないでいると

「もしかして、誰がいる・・・？」

声が聞こえてきた。するとすぐに「あ、うん」や「・・・います」という返事や。「何人いるんだ?」「どうなってんの?」といった声が聞こえてきた。どうやら私以外にもい

るようだ。

「・・・大丈夫です」

私も自分の存在を主張した。声の数はかなり多いし、年も近い気がする。こんな場所  
ぜんぜん知らない。記憶がないのだ。ここにくるまで何をしていたか。どうしてここ  
で寝ているのかが。思い出そうとしても途中でフツと消えてしまう。そんな状況に混  
乱していると

「じつとしてたつてしようがない」

低くてハスキーな声。男の人だ。小石を踏む音がした。立ち上がって移動するみた  
いだ。

「どっか、いくの?」

「明かりの方に行ってみる」

男の人の動く気配を感じてつい声をかけてしまった。男は出口らしき灯りの方にい  
くみたいだ。「あたしも行く」「・・・俺もいこっかな?」所々から男についていく声と  
立ち上がる気配。このままじや取り残されちゃう。急いで立ち上がり歩こうとしたが  
松明の灯りは足元まで届いていないのでおぼつかない。壁に手をつこうと思って松明  
の方に手をかざす。

「きゃっ」

「あ、ごめん」

男の人にいきなり手を掴まれた。驚いて手を引つ込めると男の人の声

「ごめん。こつちのほうに壁があるから・・・」

「あ、ありがとうございます」

どうやら彼は手を引つ張つて壁まで導くつもりだったみたいだ。だけど急に掴まれた時は本当にびつくりした。

改めて壁に壁に手をつけて歩く。みんな壁に手をつけて歩いてる。さっき手を掴まれた時、顔が見えたが見覚えがなかった。っていうか聞こえていた声全部聞き覚えがない。んっ？全然思い出せない。友達はおろか親の顔も思い出せない。まるで忘れてしまったみたいだ。いったいどうゆうこと？

「・・・考えないほうがいい、のかな」

手を掴んだ彼が呟く。

「何「何か、言いました？」」

何か聞こうとしたら私の後ろの女の人被せて聞いてきた

「いや、別に、なんでも・・・」

私も含めみんな不安なんだ・・・

出口と思わしき場所はやはり出口だった。銀髪の男。多分最初に立ち上がった人が

最初に出てみんなは彼に引つ張られるように。

空は薄暗い。周りを見渡すとここを頂上に緩やかな傾斜になっている。ここは山？それとも丘？。後ろを振り返ると塔が立っている。ここから出てきたのかあ。

「同年代……ですよね？」

メガネをかけた男の人が私達を見渡す。私も釣られて見渡す。男8人、女5人。全員で13人。やっぱりみんな知らない人だ。

「あの……ここってどこなんでしょうか」

先頭集団が街を見つけた。だが城ではないかという声も聞こえる

それ以前にここはどこだろう？目が覚める前の記憶が思い出せない。

「あの……ここってどこなんでしょうか」

気の弱そうな女の子がビクビクとした感じでみんなに聞いてきた。この声は塔の中で割り込んできた声の人だ。

「だ、誰か知りませんか？……ここがどこか……」

女の子はもう一度聞いたがみんな何も言わない。みんなもここに身に覚えがないってことかあ……もしかして！

「あの……ここにお互い知っている人いますか？」

私の声でみんな顔を見比べている。赤い髪をした背の低い男が「マジかよ……」と



眩いた。やつぱりみんな知らない人同士……ということとはみんな私と一緒に友達や親の顔を思い出せないんじゃない。

「ちやらららら〜ん」

沈黙を破つて急に甲高い声が聞こえた。みんな声の方を見る

「どうも〜元気ですか〜。ようこそグリムガルへ。案内人を務めるひよむーですよ〜」

ひよむーと名乗ったツインテールの女の子はきやぴきやぴした感じで私たちに近づいてきた。

「チツ、むかつくしやべり方だ」

丸刈りの男の人がいらいらした様子で地面を蹴る。

「こわいですね〜。おつかないですね〜。そんなに怒らないでくださいよ〜ね?〜ね?」

ひよむーは丸刈りの所まで近づいて謝罪?をする。

「だったら怒らせるんじゃないねえ」

「わつかりました〜。ひよむーこれから気をつけるであります」

わざとらしく敬礼をするひよむー。わざとやつてるんじゃないあれ?

「……わざとやつてるだろ、てめえ」

「あ、ばれちゃいましたあ。まあ冗談はにおいておいて……きやー殴らないでください〜い。」

私の気持ちとシンクロした丸刈りがひよむーを殴ろうとするが、するりとかわす。

「んつと。そろそろ話進めますね。仕事の話です」

ひよむーの言葉にピタリと手を止める丸刈り。いつの間にか周りか明るくなつてきている。夜じゃなくて早朝だったようだ。

「取りあえずついてきてくださーい。ついてこないと置いていきますよー」

ひよむーはツインテールと手を揺らしながら来た道を戻る。私達はそれについてゆく。誰も丘に残っていない。しばらく歩くと丘の下に向かう道があった。舗装されていないただ道を踏み固めただけの道だ。もちろん道から外れると何も手入れされていない草むら。しばらく歩いていると奇妙な物が見えた。

そこだけ短く刈り取られていて白い石が置いてある。その石には何かが彫つてある。あれつて……

「な、なあ。あれつて」

「ひよつとして……墓？」

聞こえてきた会話からそのことを確信してぞつとした。墓つてもしかして私達どこに連れて行かれるの？

「今のところは気にしな〜い、気にしない。みなさんにはまだ早いですよ。まだ早いといいですね〜」

私の心配を遮るようにひよむーが言った。まだ早い？どういふこと？ひよむーの言

葉を考えていると前の人とぶつかってしまった。

「すみません」

前の人。私の腕を掴んだ人は顔を上に向けたまま黙っていて返事がない。

「あの……」

「あ、いや、月が……」

言われて空を見上げ月を探す。あつた赤い月が見える。んっ赤い？

「ああ……」

「お月さん赤いやん。めっちゃきれい」

周りの人も月が赤いことに気づいた。少なくとも私が知っている月は別の色をしていた。月が赤いのはおかしい。

それから私達はひよむーについていき街の中に入った

「ここが城塞都市オルタナです」

オルタナに住んでいる人、町並みは自分の住んでいたところとは違うと断言できた。先頭を歩く人たちは「ここは外国ではないか」と言っているか赤い月を見てしまっている私達は心の中で否定した。

「気づいていなかったのか？あの女に言われて気づいたが俺は、名前程度しか覚えていない」

銀髪は私の方に視線を向けながら言った。さつきまで騒いでいた人達は自分達の記憶が全然ないことを思い出したのか黙ってしまった。

重い雰囲気になんて耐えられなくなったのか軽そうな男が

「そういえば、みんなの名前知らないね。歩きながら自己紹介しないで俺キツカワです」

と自己紹介を提案し勝手に始めた。みんなも重い雰囲気を取っ払うように自己紹介を始めた。私の腕を掴んだ男はハルヒロといい。私の言葉を遮った気の弱そうな子はシホル。銀髪はレンジ。他の人はおいおいということ。自己紹介をしたことで会話がちらほら聞こえ始めた。私も周りに習って近くの人に話しかけた

「あの、マナトさん……オルタナって聞いたことあります？」

「えっと、シオリさんだった？わからない。あの月を見る限り僕たちの知らない場所だと思っただけ……」

周りの人もこの場所に心当たりはあるのかと同じようなことを聞いている

「よーやく到着しました。ここが、かの有名なオルタナ辺境軍義勇兵団レッドムーン事務所です」

「オルタナ……軍……兵団……レッドムーン……」

ぶっそんな単語が並んでいるが建物は木造。名前の響きからもつとがっしりした感

じだと思うのだけど……。ひよむーはさつととドアを開けて「はやく、はやく」と手を振って私達も入るように急かす。

建物の中に入ると幾つかのテーブルと椅子、カウンターが設えてあり、さらに奥にも同様のテーブルと椅子が設えてありそこには私達を値踏みするような目を向ける人達があった。カウンターの奥には男が一人いた。ひよむーはその男に後を任せてさつさと出ていった。ひよむーが出ていくと男は

「ほら、そんなところにはいないでもつと前にいらつしやい子猫ちゃんたち。私はブリトニー。当オルタナ辺境軍義勇兵団レッドムーン事務所の所長兼ホストよ。所長と呼んでもいいけど、ブリちゃんでもオツケー。ただしその場合は、親愛の情をたっぷり込めて呼ぶのよ。いい？」

私がおカマだくと思っているとレンジが近づいていき

「質問に答えろ。ここがオルタナつて街はわかつた。だが、辺境軍だの義勇兵団だのつてのは何だ。なんで俺はここにいます。お前はそれを知っているのか」

「威勢がいいわねえ。ワタシ、嫌いじゃないわよ、あんたみたいなの。名前は何？」

所長は愉快そうに含み笑いをした。

「レンジだ。俺はお前みたいなおカマ野郎は好きじゃない」

レンジが言い終わるか終わらない位のタイミングで所長はナイフをレンジの喉元に

突きつけた。一瞬過ぎて私にはわからなかった。

「レンジ。いいこと教えてあげる。ワタシをオカマ呼ばわりして長生きできたやつは一人もいない」

所長は目を細めながら言った。

「殺れるものなら殺ってみろよ、オカマ所長」

レンジはなんとナイフの刃を素手で掴んだ。掴んだ手から血が流れ出している。

「ふふっ。忘れられないのをあげる」

一触即発な状態。今すぐにでも殺し合いが始まるかのよう。

「あ、あのーここに連れてきたのはそうゆうのをするためじゃなくて別に理由があるからですよね!」

みんなの注目が集まる。「うわ。あの女死んだ」とか聞こえる。嘘こんなことで私死んじやう？所長は私をじつと見て「ふん。まあいいわ」と言って椅子に座った。レンジも一歩下がった。そして所長から私達を連れてきた理由を説明し始めた。

城塞都市オルタナはモンスターや多民族との全線基地で私たちのような人たを義勇兵団にして戦力にしている。ちなみに義勇兵になると義勇兵見習い章、銀貨10枚が貰える。見習い章は身分証明になるみたいだけど持ってもあまり役に立たないらしい。正式な義勇兵になると色々の特典がつくらしいが・・・

「そうこうしている内に私以外の全員が義勇兵見習い章と銀貨を取った。所長は「どうする？」って顔で私を見ている無一文で何も知らない土地に放り出されるよりかある程度の身分やお金もくれるし受けとるしか選択肢はないようだ。て言うか拒否した人いたのかな？」って思いながら受け取った

「おめでどう」

所長はわざとらしい笑みで手を叩いた

「これからあんたたちは見習い義勇兵よ。しつかり頑張つて、さっさと義勇兵になつてちようだい。義勇兵になつたら困つたことや相談に乗つてあげないわよ」

レンジにウインクして

「レンジは見習いでも相談に乗つてあげる」

オカマであれ男同士ではちよつと気持ち悪かった。

「おい」

レンジの声と突然の鈍い音。振り向くとレンジがロンを殴り倒していた。

「い、つう。どうゆうつもりだ」

「俺を最初に見たとき思つただろう。こいつは自分より強いか弱いかつて。答えを教えよ。立て」

「・・・テメエ」

ロンはレンジに飛び掛る。しかし、ロンの攻撃はレンジに当たらない。レンジは容赦なくロンをボコボコにする。そしてレンジはロンの頭を掴んで頭突きをした。

「・・・石頭だな」

「つええな。お前」

「俺について来いロン」

「しばらくはついていってやるよ」

レンジは私達を見渡しマナト、アダチ、チビを誘う。しかし、マナトは断った。

「あとは・・・」

レンジは私に視線を向ける。私も？と思ったら「行くぞ」と言っただけでレッドムーン事務所から出て行くこうとする。そこにサツサが必死にすがりつき合計5人のパーテーを作って出て行ってしまった。

「俺ちゃんもチーム・レンジに入れてもらいたかったなあ。レンジ&ロンで多分ケンカ無敵っしょ。アダチは頭よさそうだしチビちゃんかわいいしサツサ美人だしウハウハだし。うああーいいいなあー。でもまあ言ってもしょうがないよねえ。俺ちゃん情報収集行つきます。グツバーイ」

キツカワは言いたいことを言っただけでさっさと出て行ってしまった。

「あんたたちもさっさと出て行きなさい。こちらは朝から起きて眠いのよ」



所長は欠伸をしながら私達はレッドムーン事務所から追い出された。私の手元には義勇兵見習い章と銀貨が入った袋。記憶もない。知らない土地。このグリムガルでの生活が始まった。

## 2話

所長の話の後、急にレンジがロンと喧嘩をして、ロンを含む5人でパーティーを組んでさっさと出て行ってしまった。特に何もなかった3人はともかくいきなり喧嘩をしたロンとパーティーを組もうとする気が私にはわからなかった。

キツカワはいつの間にかいなくなっていた。コミュニケーション能力が高いので彼は彼なりに上手くやって行くだろう。

今レッドムーンの前には私、マナト、ハルヒロ、ランタ、モグゾー、ユメ、シホルの計7人がいる。

「えっと、今ここにいる7人でパーティーを組まないか。何をするにしても人数が多い方がいい」

マナトが提案し、皆流れでパーティーを組んだ。

「まずは情報が必要だ。みんな手分けして情報を集めよう」

ひよむーに案内された道を戻りながらマナトが言った。

「情報いうてもどんなんがっているん？」

ユメが聞く。

マナトは頷きながら

「うん。何でもいい。例えば物の値段や一日この銀貨何枚で生活できるかもわからない。見たこと聞いたことをみんなと共有するんだ」

「だけど、こんな広い街適当に歩いてたら迷子になるぜ」

ランタの意見には同意だ。私もこんと所やみくもに歩くと迷子になる自信がある。

「確かに危険があるけど僕たちが最初にいた塔を目印にして集合場所にすれば大丈夫だ  
と思う」

なるほどだから塔に戻っていたのか。

しばらく歩くとそこそこ大きい十字路に出た。周りを見ると店や屋台が見え、住人や  
義勇兵らしき姿も見える。

「よし。この辺で別れて行動しよう。集合時間は夕方前で、それ以上は暗くなって何が  
起こるかわからないし、寝るところも確保しないとイケない。もし、ここにたどり着け  
そうになかったら塔に向かってくれ」

マナトから集合時間や緒注意を受けマナトとモグゾー、ハルヒロとランタで班を作り  
行ってしまった。

「んじや。私達も行こか」

ユメが3人で行こうとする。

んじ。一緒に行動したいけど3チームだと一方向調べられないしなあ

マナトは情報が欲しいと言っていたし、ここは4方向でいった方がいいかな。

「ユメ、シホルごめん。私1人で調べる」

「え？」

「1人で大丈夫？」

二人が心配してくる。

「1人だしそこまで遠くに行かないようにするし、もう日が出ているから大丈夫。それ  
に今は情報が必要だって話だし。何か変なのに絡まれたらすぐ逃げるよ」

「んじそこまで言うなら」

「無理しないでね」

私は二人と別れて情報収集を開始した。

全線基地と聞いていたけど街の様子はそんなことがないくらい活気に満ちていた。  
店や屋台も多いし、人も多く路地で子供が笑顔で遊んでいる。

「街の外に出るとまた違うのかな？」

私は適当に呟きながら歩いている。

「・・・それにしても・・・」

店や屋台からは食べ物おいしい匂いがしてくる。こっちは目が覚めてから今まで何も食べていない。どこからか鐘が鳴ってたし、お腹はもうお昼じゃないか？と言っている。

「このまま何も食べないで調べるのは無理」

とりあえずお腹の機嫌を直すために私は適当な屋台の前に立った。

私が立ち寄った屋台は鉄板と端の方にパンが置いてあり、店主と思わしきおじさんがコテで肉を炒めていた。

「おう、嬢ちゃんどうだい？1つ3カパー」

むっ、カパー、銅ってことよね？銀より多分価値が低いからいけるはず。

「今銀貨しか持つてないけどいいい？」

「シルバーね。いいぜ。」

私は銀貨1枚を渡し、おじさんから銅貨97枚をもらった。

なるほど銅貨100枚で銀貨1枚か・・・1食だいたい高く見積もって8カパーとして1日24カパー位かな？銀貨10枚って結構な大金かも。

銀貨が入った袋は受け取った銅貨を入れるとパンパンになってしまった。

銅貨がかさばる。銅貨用の袋がいるかも。

私がそんなことを考えている内におじさんはパンを手に取り、炒めていた肉を挟んではいよと渡してきた。

私は屋台の横に移動して手渡された肉サンド（命名：私）にかぶりついた。

ムグムグ、細かく切った肉だと思つたら内臓だこれ。私は大丈夫だけど人を選ぶ風味かも。

私が肉サンド改め内臓サンドを食べているとおじさんがニヤニヤ笑いながらこちらを見ていた。

「嬢ちゃん義勇兵見習いだろ？」

「えっ」

「珍しい服着てて、シルバーのこと銀貨って言うしな。それにそんな周りをきよろきよろしてたら誰だつてわかるぜ」

「はあ」

どうやら街の人から見ると私達が義勇兵見習いで、ここに来たばかりであることは一目瞭然らしい。

おじさんは私が内臓サンドを食べている間、色々と教えてくれた。

ここオルタナはアラバキア王国の1都市で流通している通貨はゴールド、シルバー、カパーの三種類。もちろんゴールドが1番価値がありカパーが1番下。各通貨は100枚で上の通貨に交換できる。

1日については早朝に鐘が鳴り7回鳴ると夜ということ。7回目の鐘がなる頃にはおじさんがやっているような屋台や道具を売っているような店は締めてしまいうらしい。

「気を付けろよ。何も知らないと平気で騙してくるやつがいるんだから」

別れ際、おじさんが忠告してくれるので礼を言ってお立ち去った。

おじさんいい人だったし、また今度機会があればよろう。

私はそう思いながら情報収集を再開した。

私は歩きながら露天や店を覗き商品を見て回った。

んゝ気分はまるで休日のウインドウショッピングの気分。ウインドウショッピング？窓買うつもりなのに何言ってるんだろ私。

この近辺は街に住んでいる人が多く利用するのか食料や衣服関係の店が多かった。

食料関係では塩が高く、衣服はただ単純に高かった。ただのシャツが8シルバー位した。

あまり離れすぎると迷うし、もうこの近辺で見えるものはないかな？っと思っていると

道が混雑してきた。

おそらく皆お昼を食べて家や店から出てきたのだろう。慣れない土地で人の波に逆らえる訳もなく私は流されていた。そして、

ドンツ

「おっ」

「きゃっ」

私はぶつかかった。ぶつかかった拍子に相手が持っていた紙袋が幾つか落ちた。

「すいません」

「チッ」

私が謝罪すると男は舌打ちで返した。

私はちよつとムツとして男の方を見た。男は体格が大きく金属プレートがあしらわれた服を身につけていた。身長は多分モグゾーより大きく、不機嫌そうな顔で私を見下ろしていた。

「何だよ」

「あ、いえ」



「まずい、怖い人だ。身なりを考えると義勇兵はいけど下手にでて許してくれるかな？  
「すいません」

私はもう一度謝罪して、落ちた紙袋を拾おうとした。

「てめ、物取りか」

男は紙袋を拾おうとした腕を掴んだ。

いえ、違いますあなたと同じ義勇兵なんです。見習いだけです。

どうしようかと混乱していると男の後ろから声が聞こえた。

「相手が謝っているんじゃない。そんなに邪険にせな」

私に助け船を出してくれた人はみすぼらしいおじいさんだった。

服がボロい、お金ないのかな？と失礼なことを考えていると

「フンツ」

男は腕を離してくれた。

「お嬢ちゃん、ワシの連れがすまないことしたね。もうお昼を食べたかね？お詫びに何かご馳走しよう」

どうやらおじいさんと男は連れのようなのだ。

お昼をご馳走と言っても内臓サンドを食べてそれほど時間も経ってないし。

「すいません。実は・・・」

ギロツ

男が睨んでた。えつまさか断るの？って顔だ多分。

「はい……是非に……」

意思の弱い私を許して。だって断ろうとするとすぐ睨んでくるんだもん。私とおじいさんと怖い男は近くの店に入って行った。

店に入り適当な椅子に座り各自料理を注文した。

私は量が少なそうなパンとスープのセットを頼むとおじいさんは遠慮することはな  
いと言われ、男からは睨まれた。

この人は私に何か恨みでもあるのだろうか。

注文をしてしばらくするとおじいさんが聞いてきた。

「お嬢ちゃん。義勇兵じゃろ？クラスはなんだい」

「クラス？」

おじいさんは私の言葉にうん？となった。

「ほらギルドに所属してイロハや初期スキルを教えてくださいとところじゃ」

「すいません、確かに義勇見習いですけど、クラスとかさういったこと全然知りませ  
ん……」

「最近はそういうことまで自分で調べないといかんのか・・・」

おじいさんは納得してくれたようだ。だけど昔は色々教えてくれたんだ。私はおじいさんに現状を伝えると私にクラスや色々なことを教えてくれた。因みにクラスとは職業のことでオルタナにあるギルドは7種類。

戦士

自分の肉体と武器で相手を倒す職業。色々な戦闘スキルを覚えられる。

暗黒騎士

暗黒神スカルヘルを信奉する。暗黒魔法や長柄武器を用いた暗黒闘法を覚えられる。ただし、一度入ったら他のギルドに入れないとのこと。

盗賊

盗賊達の共同体が元となったギルド。パーティーに1人しか入れない。盗みなどの盗賊行為、小物を使った奇襲や徒手空拳を覚えられる。

狩人

山などで狩猟していた者が元となったギルド。野外活動や罠を扱える狩猟術、弓や猟師が使う刀を覚えられる。

魔法使い

エレメンタルの力で魔法を行使する職業。火や氷といった4系統の魔法を覚えられ

る。

神官

光明神ルミアリスに帰依して癒しを行う。光魔法と杖などによる護身法を覚えらる。

聖騎士

神官と同様で光明神ルミアリスに帰依して癒しを行う。ただ神官より戦士寄り。神官のスキルに合わせて守護剣闘法を覚えられる。

オルタナから別の街に行けば上記7つ以外にギルドがあるらしい。そしてギルドに入るには8シルバーかかる。

なるほど、それを含めての10シルバーだったか。

その後、食事をしながら私はおじいさんⅡブノワさんの話を聞いた。

どうやらブノワさんはオルタナにあるギルド以外のギルドの人でオルタナにギルドを作ろうとし訪れたみたいだけどうまくいかなかったようだ。

因みに怖い男はロジェさんでブノワさんの護衛らしい。

「クラスについても自分で調べるようになってオルタナのみで活動しとる義勇兵はギルドが7つしかないと思つとるようじゃ。」

どうも失敗した理由は知名度不足のようだ。

「そうこう言っている内に3人とも食べ終わりそろそろ席を立とうとしたときブノワさんは言ってきた。」

「もしよかつたらワシのギルドに入らんか?」

「え、でもオルタナにギルドはないって話じゃないですか」

ブノワさんのギルドはオルタナにない、おそらくギルドのある街まで移動したらギルドに入るお金がなくなる。

「そうじゃ。だから街への往復の運賃はワシが出そう。」

「何でそうまでして」

「今回ギルドを設置できなかったのはオルタナでの知名度が圧倒的に低かったからじゃ。じゃあどうするか。知らればよいのじゃ」

「まさか、広告塔……」

ブノワさんが頷く。

「でも、私来たばかりで何も知りません。ブノワさんの思っている通りにいくとは限りません」

「それでも構わん。現場の人間は他所でパーティーを組んでいて送り込みづらいし、現場から離れた者では意味がない」

確かに言っていることはわかる。

「それにお嬢ちゃんのパティーは7人じゃ。1人多いぞ」

「へっ」

ブノワさんの話では神官のスキルの関係上最大6人が基本のようだ。もちろんそれ以上のパーティーはいるがスキルの関係上あまり好ましくない。6人以上のパティーの場合はクランを組むのが基本のようだ。

「お嬢ちゃんが来てくれたらアドバイザーとして前衛1人は準備しよう」

さらに譲歩してきた。どうやらブノワさんはかなり本気らしい。ロジエさんも呆れている。

「ワシらは明後日4回目の鐘が鳴る頃にここを立つ。できればそれまでに返事がほしい」

結局私は答えを出せなかった。

店から出たあと2人が宿泊している宿を教えてくださいました。

明日以降にここに来て答えを聞かせて欲しいとのことらしい。

2人との別れ際、私は大切なことを聞いていなかった。

「そういえばブノワさんのギルドのこと聞いていないです」

ブノワさんへっ?て顔をして

「ロジエ、ワシ、ギルドのこと言ってたよのお」

「全く言っていない」

おお、ロジエさんが喋った。

ずっと黙りだったからあまり意識がいかなかった。

「おお、それはすまなかった。」

ブノワさんは私の手を取り、笑顔で言った。

「ワシは死霊術師へネクロマンサーのギルドをやっているブノワというものじゃ。お嬢ちゃんワシのギルドで学ばないかえ？」

## 3話

ブノワさん達と別れたところで5回目の鐘が鳴った。

私は戻りながら先程の出来事のことを考えた。

「死霊術師〈ネクロマンサー〉かあ〜」

ネクロマンサーは魂を操る職業のことで、相手を呪い殺したり、死体を操って戦わせたりすることができる。そして神官や聖騎士にはできない死者を蘇生させることができるらしい。

死者蘇生の力のせいでそれが生業となり、現場から離れる者が多いらしい。

そりや、自分の家族や友達が死んだ時にいなかったら嫌だもんね。他のパーティーとかから近くに来てくれと頼まれるんでしょう。

自分の仲間に甦らしてくれる仲間がいたら抜けないでくれと強く引き留めると思っけど何でだろう？

それにしてもどうしよう。私はギルドに入るお金だけ準備すればいいだけで後は全部ブノワさんが用意してくれる。私が返事をすればオルタナにほぼ誰もいない珍しい職業に就くことができる。



それにパーティーの人数のこともある。見習いの間はいいかもしれないが、正式な団員になったら必ず問題が出てくる。そうした場合、果たして新人の私たちにベテランの人が入ってくれるのだろうか。答えはいないと思う。だって新人に任せて危険な仕事や稼ぎの少ない仕事はしたくないと思う。そう考えると死んでも蘇生できるという特典は入っていいと思える特典なのかもしれない。でも死霊術師かあ．．．みんなに言ってもいい顔をしてくれないかも。

私が悩んで歩いている内に集合場所に到着した。

ユメが私を見つけて手を振ってくれて他の皆が私のことに気づいた。

どうやら私が最後のようだ。

その後、みんなで安く泊まれるという宿に移動して夕食は近くの酒場で取った。

夕食を取りつつ各自持っている情報を報告し合った。

そしていつしかクラスの話題になった。

「パーティーには戦士、神官が必須なんだけど戦士になってくれる人は．．．」

私はモグゾーを見た。ロジエさんに及ばないがモグゾーも大きい部類に入るし、後衛というよりかは前衛向きだと思う。私だけじゃなく他の皆もそう思ってたらしく皆モグゾーを見ていた。モグゾーは皆の視線に耐えられなかったのか「それじゃあ．．．僕が．．．」と手を上げた。ごめんさいモグゾー

「それで神官だけどこれは僕がなるよ。治療だけでもなく前衛もできるようだし」

マナトが神官に手を上げた。

「ユメは狼犬っていうの飼いたいわあ」

ユメは狩人に

「戦士とか無理そうだし、魔法使いつて感じでもないし盗賊になるよ」

ハルヒロは盗賊

「じゃあ俺は暗黒騎士だな」

ランタは暗黒騎士に絶対名前前の響きで選んだな

「私、戦うのダメだし神官に」

シホルはマナトと同じ神官に優しそうだからいい治癒者になるよ多分。

「シオリはどうする？できれば魔法使いか前衛ができるクラスになってくれると嬉しいけど」

マナトが聞いてくる。

ブノワさんは明後日までって言ってたけどそんなわけにもいかないかあ・・・

翌朝、私はブノワさんが宿泊している宿の前にいた。

皆に実は他の街にあるギルドの人にスカウトされた。そのギルドで学ぶので暫くは一緒に行動できないことを伝えた。クラスは後衛職とだけ伝えた。

皆で話し合っていたのに勝手に決めていて、個人的には居心地がかなり悪かった。

翌朝、朝食をさつさと食べた後、適当なことを言っただけで皆と別れた。

「2人とも起きてるかなあ」

宿を覗くと1階部分は食堂になっており、2階部分が宿泊施設になっているようだ。

ブノワさんはいなかったが、ロジェさんが朝食を食べているのを見つけた。

ロジェさんは近づく私に気がつく目線で席につくよう促した。

「もう決めたのか」

朝食を食べ終えたロジェさんが聞いてきた。

「はい」

ロジェさんは何も言わずに座っていた。しばらくするとブノワさんが降りてくるのが見えた。ブノワさんが席の前まで来るとロジェさんが外に出ていった。

ブノワさんが朝食を食べ終えるのを待ち、ブノワさん達についていくことを言った。

その後、宿泊している部屋まで移動し、私の簡単な自己紹介の後ブノワさんは準備するものがあると言っただけで部屋から出ていった。

窓から見える景色や道を歩く人を見て時間を潰しているとブノワさんが紙袋と水差しを持って戻ってきた。

「本当は移動中にでもできたなら良いと思っていたのじゃが、思いも早くに良い返事をくれてワシも嬉しいよ」

ブノワさんが笑顔で私に話しかけ、荷物から色々な道具を取り出し、紙袋の中身を砕き始めた。

「さて、シオリよ。ワシらネクロマンサーは魂に干渉する魔法を操る。したがって魂が見えるようになるのがネクロマンサーになる第1歩じゃ」

砕いて粉末状にした物を秤でより分け

「しかし、普通は魂なんて見えん。」

別の紙袋から出した幾つかの粉末と混ぜ合わせ、私に渡してきた。

「だから最初は皆これを飲んで魂を見えるようにするんじゃ」

「どうやらこれを飲むと魂が見えるようになるらしい。でも、なんか苦そう

私は粉末と水を飲んだ。

飲んで少しすると目の奥が痛くなつていき頭がクラクラしてきた。気持ち悪くて吐

きそう。

「初めはみんなそうなる。そのこのベットで横になりなさい」

私が気持ち悪そうにしているとブノワさんがベットで横になるよう促した。言われるがままベットで横になり、気持ち悪さと戦っている内に私は寝てしまった。

目を覚ますと外はすっかり暗くなっていた。

部屋にはブノワさんがいて軽食を出してくれた。

お腹が減っていたが食欲がない状態の私は少し残した。

「苦しいと思うが、しばらくは飲み続けるのじゃ」

そう言う私にまたあの粉末と水を渡してきた。

無理やり水で流し込む、するとあの感じが甦り私はベットに戻った。

翌日、朝食の後また粉末を飲んで動けない私をロジエさんはおんぶしてくれた。どうやらギルドに移動するようだ。

おんぶされている時に街の人を見ると薄い湯気が出ているのが見えた。

多分、あれが魂なのだろう。

馬車での移動中もあの粉末を飲み続けた。

馬車に乗り合わせた乗客に心配され、大丈夫だと応対するのも億劫だった。だけど話

しかけてくれた人から湯気が見えるので粉末の効果が出ていると確信した。

馬車で揺られること数日、粉末のせいで実際何日経ったかわからないが目的の街に着した。

この頃には粉末を飲んでも風邪程度のダルさで過ごすことができるようになった。

### 都市セルティ

私がネクロマンサーを学ぶ街だ。

オルタナと比べるとセルティは大きさも活気もやや小さい。と言つても 街を散策するには一日じやとても足りない。

馬車から降りた私たちはブノワさんを先頭にギルドに向かって歩いた。

説明によるとギルドで訓練している最中は衣食住を無料で提供してくれる。

訓練時間は早朝の鐘から最後の鐘が鳴るまで（鐘の感覚、回数はオルタナと一緒にしよう）

歩きながらその他説明を受けている内にギルドに到着した。

ギルドに入るとレッドムーンと似たようなカウンターがあり、そこで簡単な情報の記入と加入料8シルバーを払った。

部屋に通され、体のサイズを測定され衣服を何着か手渡された。ここに来るまでの苦行でお腹回りが細くなっている気がする。

その後、寝泊まりする部屋に案内され、部屋のルールや集合場所についての説明を受けた。どうもここに入って3日は訓練はなくギルド内で待機しなくてはいけないようだ。因みに受け取った服はそのまま貰えるらしい。確かに2シルバー以下しか持っていない見習いに日々の衣服は買えない。衣食住が確保され、衣が貰えることを考えると8シルバーは結構安いかもしれない。

私は部屋に入ると早速受け取った服に着替えた。服は半袖短パンで動きやすそうだ。入った初日は訓練はなく、夕食までの時間私はギルド内を見て回った。

ギルド内は人が少なく何人か集まって座学を受けている班が2、3組見えた。

夕食の時間、量は少な目だった。当然だ。食器を乗せたお盆の横に例の粉末がある。私は少ない夕食と粉末を飲み部屋に戻った。

朝、朝食と粉末を飲んだ後、部屋で時間を潰しているとブノワさんがノックをして入ってきた。

「調子はどうじゃ」

「はい、問題ないです」

「本来ならギルドに入ってから薬を飲んで3日はまともな訓練はできんが、シオリはここに来る間に飲んでるから暇していると思ってるな」

「確かにもうあれを飲んでも初日のようになりません」

ブノワさんは笑顔で頷きながら

「ならば特別に今日から訓練を始めようかのう」

私のネクロマンサーとしての訓練が始まった。



## 4話

どのギルドでもそうらしいがギルドに入ると担当教官とワンツーマンで訓練するらしい。

因みに私の担当教官はブノワさんだ。

ブノワさんは担当教官の立場ではないが、今回の試みのために担当教官に名乗り上げたらしい。

私とブノワさん〓先生はギルドから出て街に出た。

そのまま歩き市場に到着した。

「さてシオリよ。薬を飲む前と飲んだ後で何か変わったことがあるか」

「はい。人から何か湯気のような物が上がっているのが見えるようになりました」

「うむ。その湯気は魂から出ているエネルギーじゃよ。ヤカンを想像してみなさい。ヤカンが体で水が魂。体を動かすために熱くなると湯気としてエネルギーが出ていく。

ああ、魂は水と言ったが全然違う物じゃからな」

なるほど私がオルタナの街や馬車で見ていた湯気は魂から出るエネルギーだったか。

「さて、魂からの湯気が見えるようになったら魂もすぐ見れるようになる。まず一人を

集中して見なさい。あそこで寝ている人にしよう」

先生は外に出されたテーブルで寝ているおじさんを指差した。

「体から出ている湯気に意識を傾けながら見るのじゃ」

私は寝ているおじさんから出ている湯気に意識を向けじつと見た。しばらくするとおじさんの体がブレた。私は目をこすりもう一度見るとまたおじさんがブレた。

「大丈夫じゃ。もつと集中して見なさい。」

ぶれたおじさんをさらに見ているとブレが収まってきておじさんが2重に見えるようになった。

「先生。最初はブレて見えていたのですが今は2重に見えています」

「今シオリが見えているのは肉体と魂、魂から出ているエネルギーで間違いないね」

「はい」

その後、先生に言われるがまま色々な人の魂を見た。

時間が経つ毎に頭痛がして6回目の鐘がなる頃にはかなり疲れてしまった。

「今日1日でコツは掴めたかのう」

「はい。何とか・・・」

最初と比べて魂が見える速度は早くなった気がする。

「今日の夕食は薬を出さないように伝えとこう。明日は薬の助けなしで魂が見えるよう

になるのが目標じゃ」

翌日起きるとかなり調子が良かった、かなり体が軽い。しかし、湯気は見えなくなつてしまった。

1 回目の鐘がなった後、私と先生は昨日と同じ場所にいた。

「時間はどんなにかかつてもいいから昨日のことを思い出しながら見るんじゃ」  
「はこ」

私は街の人を見る。しかし昨日みたいに魂は見えない。時間だけが経つ。

昼食後、引き続き街の人を見る。鐘が鳴り訓練が終了するまで残り2回と言うところで湯気のような揺らぎが見えた気がした。

「ツ!!」

私はさらに見る。湯気さえ見えれば昨日と同じ……

そして私は薬なしで魂を見ることができた。

「先生。見え……ました」

「……本当じゃな。では残りの時間は引き続き見てその感覚を叩き込むのじゃ」

私は時間いっぱいまで見続けた。

「良いかギルドで学べるのはやり方だけじゃ。自分の力にするには終わった後も訓練し続けるしかない。これは明日から教える魔法も同じじゃ」

帰り道先生は私に言った。

「魔法やスキルは使えば使うほど効率上がる。それは回数が増えたり効果が上がるということじゃ。効率が上がれば生き残りやすくなるわかるな」

「はい」

私は頷いた。今日のこの力は先生と比べるとかなり遅いのだろう。早くするには練習が必要とのこと

その日の夕食は昨日と比べて明らかに多く薬もなかった。

次の日、私は先生と昨日と同じ場所にいた。

魔法の訓練の準備に時間がかかるらしく午前中は薬なしでの魂の視認だ。

昼食後街の外に出たしばらく歩くとロジエさんがいるのが見えた。

近づくにつれ足元に何かが縛られて転がっている。

転がっているのは2種類、檻に入れられた鶏と緑色の肌をした半裸の子供だった。

人数は3人。子供は言葉が喋れないのか「ギャ、ギャ」と耳障りな声を上げていた。

「シオリよ。この緑色の肌をもつ者はワシら人類と敵対しているゴブリンというものじゃ。他にはコボルトやオークなどがあるがそれはまた今度教えてやろう」

先生はゴブリンについて教えてくれた

身長は大人になってもちよつと大きな子供くらい。知能はそこそこ高い。

集団行動を好むので単独でも近くに仲間がいる可能性があるとのこと。亜種としてホブコブリンがいる。

「さて、今から見せる魔法は3つじゃ。残りの日数で頑張つて覚えてもらおうぞい」

先生がそう言つてるとロジエさんはゴブリンを1匹離れたところに置いた。

「シオリよ。あのゴブリンの魂を見るのじゃ。見えたら教えるのじゃ」

私は数分かけてゴブリンの魂を見た。種族の違いはあるが見る分には全く問題はなかった。

「見えました」

「よし、今から見せる魔法はネクロマンサーの基本魔法で最強の魔法じゃ」

先生はそう言つて呪文を唱え人差し指をゴブリンのいる方向に突き出した。すると指先から黒い輪が飛び出しゴブリンに命中した。そして

ゴブリンの体から魂が飛び出した

飛び出した魂はまるで煙のように消え残っているのは動かなくなったゴブリンだけであつた。

え!?!うそ!?!まさか死んだ?

「シオリよ。今の魔法がゴブリンに命中してどうなつた?」

「体から……魂が出ていって……消えました」

「そうじゃ。この魔法は肉体と魂を切り離す魔法じゃ。この魔法を受け効果が出れば必ず死ぬ」

なにそれ強すぎる。必ず死ぬなんて

「そして次の魔法は……」

先生は死んだゴブリンに近づき手足の縄を切り、呪文を唱えゴブリンに触れた。

するとゴブリンが立ち上がった。しかし、死ぬ前はあるに騒がしかったのに今は一言も喋らない。

「ゴブリンの魂は見えるかえ」

私はゴブリンの魂を見ようとするがどんなに頑張っても見えない

私は頑張っているとロジエさんが剣を持ってゴブリンに近づきゴブリンの首を切った

頭部がなくなったゴブリンはその場に立っていた。おかしい普通は倒れるのに・・・  
そう思っているとゴブリンが歩き出した。

「これは死体を操る魔法じゃ。死んでいるのでどんなに傷ついても戦わせることができ  
る。」

首なしゴブリンはしばらく歩かされると自分の頭部を持ち隅の方で横になり動かなくな  
った

「最後の魔法は・・・」

その時、ゴブリンから悲鳴が聞こえた。声の方を見るとロジエさんがゴブリンの胸に  
剣を突き立てていた。

ゴブリンはしばらく身をよじり暴れていたが動かなくなった。

「あのゴブリンの魂を見るのじゃ」

「えっ？もう死んでいるんじゃない」

「いいから、見えたらどうなっているか教えるのじゃ」

私は先生に言われるがまま魂を見た。するとゴブリンからヒモの様なものが延びていることに気づいた。

「何かヒモの様なものが見えます」

「よし、そのまま見ているのじゃ」

先生は近づき呪文を唱えゴブリンに触れ目をつぶった。

しばらくするとゴブリンの周りに光が集まりヒモ動きだした。ヒモを見ているとゴブリンの魂が引つ付いており、そのままゴブリンの肉体に入った。

するとゴブリンが急に暴れだした。しばらくゴブリンが暴れているのを無言で見ているとロジエさんが剣を突き立て止めをさした

「今のは死んでしまった者の魂を今一度肉体に戻す魔法じゃ」

先生は顔に汗を浮かべていた。

「どうじゃ。これがネクロマンサーの魔法じゃ」

あの後少し休憩して私の番になった。

まず最初に使った魔法。死の宣告へモータルレイ〈を実際に使ってみることになった。先生は魔法を使う前に魔法について教えてくれた。

死霊術師の魔法は基本的に魔法使いと同じでエレメンタルの力を外的に使用するのではなく魂に作用させるようだ。



言葉で言われるとどうやって作用させるの？って話だけど実際は条件と詠唱がきちんとしていたら発動するみたいだ。

今私はロジエさんが置いたゴブリンの前にいる。

ゴブリンもさっきの光景を見ていて次は自分の番と悟ったのかブルブル震えている。

「行きます」

私はゴブリンの魂を見て呪文の詠唱を行い、ゴブリンに向けて指を突き出した。すると何かが抜けるような感覚と同時に指先から黒い輪が出てゴブリンに命中してした。

.....

あれ？先生のは当たるとゴブリンの魂が勢いよく飛び出たのに何も起こらない。

「うむ。最初からゴブリンは荷が重かったかな？」

先生が言うにはこの魔法は当てて効果が出ないと意味がないとのこと。

ゴブリンと一緒に持ってきた鶏に当てると成功したのでやはり単純に威力不足のことらしい

次に死体の操作、死体操作へクリエイトゾンビをモーターレイに成功した鶏に使用した。

「・・・なんかぎこちないですね」

動きだした鶏はカクカクした動きで動きだした。

これも使つていく内に滑らかに動き出すらしい。

操作感は命令を念じるとまるで意思があるかのようにそれに答えてくれる感じで、動かしている物の限界以上の力は出せないみたいだ。

その後、瞑想のやり方を教えてもらい瞑想で魔法力を回復している間、ロジエさんが森の中からペピー（犬の体に兎の頭を持つ動物）やナデイ（猿みたいな動物）を捕まえてきて私の魔法の実験台になった。

各魔法の使用回数はモーターレイ5発、クリエイトゾンビ3回だった。

クリエイトゾンビは複数体操作した場合、個別の動きをさせることはできなかった。

瞑想で回復しつつ、魔法の練習をしていると最後の鐘が鳴る時刻になった。

「明日から死者蘇生（ソウルリボン）の練習をしよう」

ギルドに入って4日目、明日は死者蘇生を学ぶ

## 5 話

5日目、目が覚め早めの朝食を取った私は訓練開始の鐘が鳴るまで瞑想で魔法力を回復していた。

1日寝れば魔法力は問題ないと知っていたが、その知識の出所についての記憶がないので念のため瞑想を行った。

訓練開始の鐘が鳴り私はギルド内の1部屋で訓練を受けた。

「いいか。死者蘇生の魔法は魂を肉体に戻す魔法じゃ。肉体に戻すだけだから傷や欠損は直らんし、毒などで蝕まれていた場合、せつかく戻したのにその毒でまた死んでしまうのじゃ」

昨日ゴブリンにソウルリボーンを使ったあと暴れたのは逃げようとしたのではなく傷の痛みで暴れていたのか

それに魂を戻すだけで傷や毒の治療ができないんじゃないかなり使い勝手が悪いんじゃない

「なのでほとんどの場合、戻す前後で傷の治療や神官や聖騎士の光魔法で治療してやるのが一般的なのじゃ」

なるほどそこでパーティーの出番か

そう言えば暗黒騎士以外のギルドは自由に所属を変えたり、条件はあるが他のクラス  
のスキルを学べると聞いた。神官の治癒魔法を学んで1人で蘇生できるようにの悪  
くないかも

そうこうしている内に先生のこの世界の死者の仕組みとソウルリボーンについての  
説明が終わった。

大昔、不死の王ヘノーライフキング<ののがゴブリンとかの種族を率いて帝国を作  
り、人間族やエルフ族に戦争を仕掛けた。

仕掛けられた種族は互いに同盟を組んで対抗し、ノーライフキングが死んで帝国が崩  
壊、分裂した混乱に乗じた結果、今のアラバキア王国やその他同盟種族の国家ができた。  
だけどノーライフキングは死んでもその呪いは残っており、死んで5日ほど死体を放  
置しているとゾンビとなり人に襲いかかる。長い年月かけて体が腐り、肉が落ちてスケ  
ルトン。もしゾンビを倒しても浄化せずに放置するとゴーストかスケルトンパーツと  
なってしまう。

なので神官や死霊術師や呪医ヘシャーマン<はゾンビやスケルトン倒した後、浄化を  
行う。ゴーストの場合は直接浄化を行うのがルールになっている。

因みに死霊術師の浄化は神官と違い魔法力を行使するためスキル扱いとなり、ギルド

にお金を払って学ぶ必要があるとのこと。

呪医はエルフの国で学べるクラスで先生もあまり知らないらしい。

ここで重要になってくるのは死んで5日以内に蘇生させないとゾンビとなり蘇生できなくなるとのことだ。

余談だが、ノーライフキングについては死亡説、生存説が今なお盛んに話し合われているらしい。

ソウルリボンについては、人が死ぬと魂と肉体は分離してしまうが、新鮮？な内は何かの形で結びついている。これは人によって見え方が様々で、私の場合はヒモみみたいなもので繋がって見えている。

この結び付きは時間と共に弱くなっていき最終的には見えなくなるらしい。

要するにこの肉体と魂の繋がりを引っ張って、もう1度魂を肉体に入れ直す魔法がソウルリボンだそうだ。

モーターレイで死んだ死体は結び付きがなくなっているので蘇生はできない。

また見えなくなった場合の蘇生魔法は、あることはあるのだがそこまで放置されると、逆に蘇生中にゾンビになり襲われる危険があると学ぶのにお金が必要だということだ。

先生は大きなかごに入れられた鶏を持つてきた。

鶏はもちろん死んでいる。体に切り傷があるのでそれが死因だろう。

先生から詠唱を教えてもらい私はかごの前に座り、ソウルリボーンを唱え鶏に触れた。

触れた瞬間酷い目眩がして目のピントがぼやけ何も見えなくなった。

うわ、なにこれ・・・やば・・・

私はよろけてかごを倒してしまった

しばらくして目眩が治り、私はかごの中身を確認するが鶏は死んだままだった。

「もう一度、魂を肉体に入れるようなイメージを心がけなさい」

先生のアドバイスを元にもう一度詠唱しようとするができない。たった一回で魔法力が尽きたのだ。

瞑想を行い魔法力を回復してからもう一度詠唱した。

鶏に触れた瞬間また酷い目眩がしてよろけそうになる。

私は目眩に耐えながら鶏から出ているヒモをひたすら引き寄せるイメージをするがうまくいかない・・・失敗した。

もう1度……失敗

もう1度……おお、今少し動いた？

目眩が覚め鶏を見る。かなり弱っているが生きている。

先生の方を見ると先生頷いてくれた。

先生は交換してくると言っただけでかごを持っていた。

訓練のためとはいえ大丈夫なのかと思っただけで休憩中に命を奪った家畜はギルド間で消費することを教えてもらった。

休憩後も同じように練習したが、成功率はだいたい4回に1回位だった。

訓練終了後、先生から残りの日数は4日目のようにひたすら魔法の訓練をすることを告げられた。

訓練が終了して私はネクロマンサーの服を着て杖と荷物を持ってギルドの前で先生を待っていた。

残りの2日は先生が言っていた通りひたすら覚えた魔法を使った。

モーターレイは使用回数が増え高確率でゴブリンにも効くようになった。

クリエイトゾンビは激しい動きはまだ怪しいが何とか戦わせることができるように

なった。

ソウルリポーンはあまり変わらなかった。

後は実践等で練習していくしかない。

それにしてもネクロマンサーの服は全体的に黒い。多分墓地とかそういう感じを出そうとしている気がする。

「最初先生を見たときポロポロだと思ったけど自分が着るとは思わなかったな」

それに私訓練の時一切杖使わなかったけど本当に必要なのかなあ

ネクロマンサーの衣装について思っていると先生とロジエさんの2人がきた

3人で馬車まで移動すると先生が私に硬貨が入った袋2つ、

あの粉末が入った袋、折り畳まれた紙を渡してくれた。

粉末は魂を見やすくする薬でソウルリポーンの成功率を上げるために使用しなさいといわれた

「さて、ワシはここまでじゃ。その2つの袋は馬車の運賃と餞別じゃ。そしてその紙を見るのじゃ」

私は折り畳まれた紙を開いた。紙には文字が書いてあった内容は



## 請求書

下記魔法の支払いがまだされていませんので  
至急支払いをお願いします。

- ・ 死体操作（ヘクリエイトゾンビ）
- ・ 死者蘇生（ヘソウルリボン）

合計10ゴールド、80シルバー

「ハア!?!」

自分でもびっくりするぐらいの大声が出た。

「すまない。本当はこんなことするつもりはなかったのじゃがギルド間のルール上無料にすることはできなかつたんじゃ」

先生はすまなそうに言った。

広告塔として死霊術師らしい魔法を教えてくださいましたのはいいが、スキルを覚えるための費用を無料にすることがどうしてもできなかつたらしい。

支払いは事情が事情なので待つてくれるそうなので少しずつ返していくしかないよ  
うだ。

実は後払いもバレるとかなり不味いのだか、これはギルドの人たちが少しずつ出し合つて私が支払つたことにしているらしい。

「・・・わかりました・・・できるだけ早く返せるように頑張ります・・・」

『気を付けろよ。何も知らないと平気で騙してくるやつがいるんだから』

騙されたわけではないが屋台のおじさんの言葉を思い出していた。

「本当にすまない。アドバイザーとしてロジエにしばらくついてもらうようにしたら彼に色々と教えてもらうのじゃ」

どうやらアドバイザーとしてロジエさんがついてくれるらしい。

その後、馬車の発車時間になり先生と別れた私はロジエさんと馬車に乗り込んだ。

「シオリ、このパーティーはお前がリーダーだ」

馬車に揺られてしばらくしてロジエさんが言った。

「えっ？」

ロジエさんはあくまでアドバイザーなので教えることを教えて問題がないと思っただけで、さっさと帰ると。

そんなロジエさんがリーダーだと、後々問題が出るため仲間集めから私がやれと言っている。

「私まだ見習いです。そんなのに入ってくれるとは思えません」

「ブロワからの餞別を見てみる」

ロジエさんに言われて見てみる。ゴールドとたくさんのシルバーが見える。

「まずオルタナに着いたら団章を買え。その後宿を取ったら次の日から仲間探しだ」

ロジエさんはどこまで先生と決めているんだろ・・・

セルテイからオルタナまで5日かかった。

その5日間私はロジエさんからパーティーについて色々教えてもらった。

まず前提として戦士と神官は必須。

戦士と言ってもタンク役を任せられる人を入れないと私のような自衛できないクラスや神官が狙われてすぐにパーティーが崩壊するらしい。

タンク役は聖騎士もできるがその場合は光魔法の援護は諦めるしかない。

ロジエさんはアタッカーよりなのでタンクはできないとのこと。

私の安全性を考えるとタンク1人、アタッカー1人、神官1人、魔法使い以外のクラス1人がいいと言われた。

私ことしか考えていないのではないかと言うとリーダーが死ぬのは神官が死ぬ以上に危険なことを教えられた。

ほとんどの場合、神官がリーダーを兼任し、神官を守りながら戦うのが多いらしい。

まあ最初の方はそこまで危険な場所にいくつもりはないから6人集める必要もないか。

6人といえばマナト達はどうしているだろう。もう団章を買うことはできたのだろうか。

そう思っているとオルタナの街を走っていた馬車が止まった。

私はオルタナに戻ってきた

## 第6話

レッドムーン事務所に入るとあの時と同じでカウンター奥に所長はいた

「あら、あなた生きていたの？」

全然目立っていなかったのによく覚えてる。もしかしてここに所属している人全員覚えてる？

「おかげさまで。団章を買いにきました」

私は所長の前に20シルバーを置いた

「あの子たちの中じゃレンジのパッケージが一番だと思ってたけど。その格好・・・」

所長目が鋭くなった。10シルバーしか持っていなかった人がオルタナにないギルドに所属しているのが怪しんでいる。

「別にいいだろう。そいつは見習いで団章を買う金を持ってきた。違うか？」

私が所長の視線に固まっていると奥の方からロジエさんが出てきた。

あれ？何で先にいるの？

「ふくん。かなり無理したんじゃないの」

私とロジエさんを見て所長は笑いながら言った

「俺は知らん」

「まあいいわ、おめでとう。あなたは義勇兵見習いから正式な義勇兵になったわ。私達はあなたを歓迎するわ」

所長はそう言つて団章を渡してくれた

団章があればギルド公認の店で格安で物を購入できるし家も買うことができると説明を受けた

「所長。こいつは死者蘇生が使える」

「やつぱりネクロマンサー？ほんとどうやったの？」

「はは・・・」

これに関しては愛想笑いしかできない・・・

所長は笑顔になり

「でも嬉しいわ。新人とはいえ前線に死者蘇生が使えるのが来てくれるのは」

「こいつはパーティーを組んでもらう」

「そうなの。できれば街から出ないで欲しいのだけど」

「それは無理だ。だがこいつが死者蘇生を使えることを他の奴らに伝えておいてくれ」

「言われなくても、いくら？」

「2ゴールド」

「あら安い。1ゴールドで」

「1ゴールド50シルバー」

「1ゴールド25シルバー」

「1ゴールド50シルバーこれ以上は下げんと伝えておけ」

「いいわ」

私の許可もなく勝手に決まっていっく……

「今は北門が活発よ」

「ダムロー辺りで何かあったのか？」

「ゴブリンが多くてあの辺りの収集がうまくいかないの」

ゴブリンは繁殖力が高く一定間隔で討伐依頼が組まれるのだから今回は依頼の食い付きが悪いとのこと

それが影響して北門周辺の狩猟・収集が高騰して人が集まっているらしい。

「でもゴブリン程度じゃ必要ないかもね」

ゴブリンはグリムガルド最弱の種族と言われている。都市ダムローの奥に行かない限り危険はほぼないらしい

その後、所長の薦めで部屋の奥にある掲示板にパーティーを募集している旨の紙を貼った。

「人が増えたと聞いていたが治安はいい方だな」

北門に移動して辺りを見渡しロジエさんはそう言った

治安の合格が出たので私達は北門周辺の部屋を借りた

お風呂とトイレ共用、水場なしだが部屋が広くテラスがある。扉もちゃんとした鍵も付いている。これで1日60カパー。ギルド公認店なので印章があれば40カパーだ

ロジエさんはここより高い部屋を借りた。今度見せてもらおう

ここに来て初めての1人の空間。ギルドにいたときは1人だったが多人数が寝泊まりする部屋だったので気分が違う

私は備え付けのベットに寝転がった。せんべい布団みたいなベットだ。ベットを買うときはフカフカのベットを買うぞ。せんべいという言葉をお忘れながら私はそんなことを考えていた

替えの服や必需品を買っていると夜になった

私達は酒場で食事をしていて。初めてお酒を飲んだけど私には無理だった。

レッドムーン事務所や他のギルドで出される依頼には大きく分けて採取と討伐がある。私は採取のスキルがないため討伐で生計を立てていくことになる

仲間を探しながら日々の生活費を稼ぐ。私はちゃんとやっていけるのだろうか……



俺たちゴブリン3人はペビーを捕まえるために息を潜めていた

ペビーは警戒心の強い動物だ。少しでも危険を感じると素早く逃げる

3人の中で小柄で瞬発力があるゴブリンが先頭に出てにじり寄る

ペビーは気づいていない。今日はペビーが食えるな。ここにきて肉はミルミしか食っていない。ミルミは肉も固くて臭い。俺たちゴブリンでもあまり食いたくない肉だ

元々俺たちはダムローで生活していたが最近人間に荒らされて森に移動してきた

最初の内は単独行動しているやつが襲われていたが最近は2、3人で行動しているやつも襲われている

俺たちはそこまで強くないから森に逃げた。多分もう少ししたら上位ゴブリン達が来てくれるのでそれまでの辛抱だ

そうこう考えているとペピイを仕留められる距離まで移動することができたようだ

劍を構えペピーを突き刺そうとしたとき急に長い何かの小柄ゴブリンにぶち当たった

何かが地面に転がる。小柄ゴブリンの頭だった。小柄ゴブリンの体から血のシャワーが出ている

あまりのことに呆然としてしていると人間が2人が出てきて矢を放ってきた

俺は肩を射ぬかれたがもう1人は足を射ぬかれた

俺は足を射ぬかれたゴブリンに先に逃げるように言い人間たちの前に立ち剣抜いて威嚇をした

せめてあいつが逃げるまでの時間稼ぎを……後ろからあいつの悲鳴が聞こえた。後ろを振り向くとあいつの頭にエストックが突き刺さっているのが見えた

「うおおおー」

人間の唸り声が聞こえ視線を戻すと血に濡れた両手剣が振り下ろされているのが俺が見た最後の光景だった

「ふう……」

最後のゴブリンが戦士の憤怒の一撃へレイジブローで倒したところで私は緊張を解いた

今私は都市ダムロー旧市街に近い森で採取クラン内の警護班の1パーティー内で働いていた。理由は名前を売るためだ

「すいません。射抜へピックショットの時、ペピイを離しておいた方がよかったですね」  
ペピイはゴブリンの血で赤く染まっている。これでは売り物にならない

「このペピイでだいたい稼がせてもらったしいよ。それにこれ以上するとゴブリンスレイヤーと呼ばれてしまう」

笑いながら両手剣についた血を拭っていた戦士でパーティーリーダーのトウジョウさんが言った。

ここ数日こうやってペピイや穴熊を使ってゴブリンを誘いだし倒している

今回の警護報酬は16シルバーと警護中に倒したモンスターのみ。私達もうすでに持ちきれない位のゴブリンの剣や兜、30以上のゴブリン袋が報酬として上がっている

「こんなことならガナー口を連れてきたらよかった」

「ばか。誰が面倒見るのよ」

狩人のダイさんとステラさんが近づいてくる。

ガナー口とは家畜のことで乳や肉、労働力になる万能選手だ

「剣はダメね。できが悪い」

ゴブリン袋を手に戦士のアデイさんが言った

ステラさん、アデイさんはグリムガルの人だ。義勇兵は私達のような記憶のない人間で構成されていると思うていたが中には義勇兵になりモンスターと戦う人もいる

「アデイとシオリは拠点に戻ってくれ残りは引き続き周囲を警戒」

「もうこの辺のは狩り尽くしたんじゃないの？」

「わかんないでしょそんなこと」

離れる私達の耳にダイさんとステラさんの喧嘩が聞こえる。あの2人はあれでも付き合っているらしい

私とアデイさんは離れたところに置いておいた戦利品を持って拠点に移動した

「パーティーの件だけどいいわよ」

「ほんとですか」

しばらく歩いてアデイさんはそう言った。

「今回一緒にやって稼がせてもらえるのがわかったしね」

「ありがとうございます。でもまだアデイさんしかいませんし」

「わかってる。必要な時に言っただけ」

以前からアデイさんには個人的にパーティーに入らないか依頼をしていたのだが今回の件が決め手でアデイさんは私のパーティーに入ることが決まった

私はウキウキした気分で残りの警護日数を消化した

本日の報酬16シルバー+31シルバー70カパー||47シルバー70カパーなり

財布と心が暖かくなった私は軽い足取りで酒場に向いた

## 7話

ハルヒロside

トイレに行きたくなり目が覚めた

「あれ・・・？マナト？」

さっさと済ませて寢床に戻る際にマナトがいないことに気付いた。借宿内を探すがいない。庭に出るとちょうど外から帰ってくるマナトを見つけた

「マナトどこか・・・」

マナトからアルコールの匂いがする

「もしかして・・・飲んでる？」

『うん・・・』

マナトは肯定した

「なんか意外」

『そお？』

立ち話も何だから俺達2人は外に設置してある炊事場に移動した。かまどに火を入れ汲み置きしていた水を沸かす

「俺も連れてつてくれてもよかったのに……」

『飲めるの?』

「あくわかんない」

酒はどうだろう? 飲んだ記憶もない。当然か

『最初にみんな情報収集した通りにシエリーの酒場つていう義勇兵の溜まり場があるんだ。そこで情報収集』

俺達が寝てる時もマナトはみんなのために動いてくれる

ゴブリンも満足に倒せなくて収入も火の車なのに……酒代を出すのもキツイはずなのに……

『結構平気だった。飲んだ時嫌な感じがなかったし。多分昔飲んでた……』

マナトはかまどの火を眺めてる

『割りとすぐ慣れるもんだね……こういう生活……』

「え……」

『初めは火を起こすのも大変だったし、水を沸かすのを忘れて飲んだり……』

確かに最初は大変だった。どんなに回してもつかない火、沸かすことを知らずに水を飲んでお腹を壊したり……寝床が藁だったのがきつかった……もう慣れたけど……

お湯をコップに注ぎマナトに渡した

「なんかごめん・・・マナトにばっかり苦労かけて」

『場所を変えてみようかと思つて、今の所は見つけても複数だから』

マナトが話題を変えるかのように言った

『北門から北東にダムローって街があつたみたいで今はゴブリンの住みかになつてる』  
「大丈夫なのそこ？」

『北部はホブゴブリンや強いゴブリンが出るらしいけど南部の旧市街はその群れからはぐれたゴブリンが住んでいるんだつて。そこに行けば今みたいにゴブリンが見つからずに帰ることもないんじゃないかと思つて』

確かに最近ゴブリンを見つけても大人数で手が出せない場合が多い

「でも逆に襲われない？」

『旧市街だし、森より隠れられる場所が多いし大丈夫だと思ふよ』

その後は俺が入つた盗賊ギルドやマナトの神官ギルドの話をした

『そういえば・・・あの子どうしたのかな？』

「えっ」

『ギルドの訓練が終わつたら戻つて言つてた。ギルドの訓練が終わつて20日以上・・・もう戻つてると思う』

そういえばみんなでギルドに入る話をした時に他の街の魔法使いギルドかどこかに



スカウトされたとか言っていた気がする

「今の俺たちを見て呆れて他の所に入ったとか？」

『そんなことをする子じゃないと思う』

どちらにせよ帰ってるのなら早く顔を出せばいいのに・・・

『あとネクロマンサーが来たみたい』

「何それ怖い」

『ちゃんとしたクラスみたい。別の街のギルドから派遣されたみたいだよ』

「意外にあの子だったりして」

『覚えるのに数ゴールドする死者蘇生を使えるから違うと思う』

「ゴールドかあ。今の俺達には無縁の話だなあ。で、死者蘇生って」

『どうも死んだ人を甦らせることができるみたい』

「神官はできないの？」

『できない』

「すごいね」

『うん・・・シェリーの酒場の反対方向のフリーダの酒場でよく見かけて珍しくてみんな

見に行ってるみたい』

「今度俺らも行く？」

マナトは笑う

『機会があれば』

ハルヒロside

end

## 8話

「ふう〜」

果実水を飲んで一息

今回の仕事で私のパーティーに初めてメンバーが増えた。今回のような依頼で結成されるパーティーではなく本当のパーティーメンバーだ。本当はアデイさんと乾杯したかったが「旦那が待っている」と言われて断られた

結婚してたのですねアデイさん・・・

依頼で数日間街を離れていたのしばらくは体を休めるため街の外に出る予定はない。この休養期間中の時間は消耗した物の補充やメンバー集めのために使おう

あとの必須枠は神官・・・

「神官かあ」

神官の需要はかなり高い。フリーの神官なんてほぼいない。人気がありすぎて複数のパーティーに所属したりしてあっちこっち引つ張りだこだ

パーティーに入った人を神官にする手もあるがそんなことしたくない。かといって

私は神官になれない

「神官だけはどこから引き抜くしかないかなあ」

引き抜く場合やっぱり必要になるのはお金。依頼を受け始めて今まででそれなりに蓄えはある

しかし、パーティーを維持するにはお金がかかる。数日街を出るときにはみんなの食料、各個人の装備も個人で貯めて購入するのではなく状況によつては補助してよりいい装備を買ったりするとかくお金がかかる

引き抜いてしまうとそういう部分にも優遇してやらないと不満が貯まって最悪高いお金を使ったのに抜けることになる。そうなればこれから入るメンバーに対しても悪い

「どっかに都合のいい神官は射ないかなあ」

思い浮かぶのはマナトとシホル。確か2人は神官希望だったはずだ。そうしたらこつちは神官なしでもいい

「かといって戻るのもなあ」

2日後の馬車で出るって言つときながら戻らずそのままギルドに直行、別れの挨拶もできなかった

あの薬を飲むタイミングが違っていたらもつとその辺はよくなつてたかも？

「あれ〜？あれあれあれ〜？」

自然に会うにはどうすればいいか悩んでいるときに大きな声で近づいてくる人がいた

「あのととき以来じゃなくい。元気〜？」

キツカワだった。かなり酔っているらしく周りの人にぶつかりながら近づいてくるあれでよく絡まれないわね

「1人〜？」

「ええ。キツカワはあれからどうです？」

「俺〜？俺はパーティーに入って団章を買いました」

私の座っているすぐ横に座り腕を回して団章を出す

ええい絡むな酔っぱらい

「持っているんでいいです」

「君も入った系〜？」

キツカワは私の夕食をつまみに飲み始めた

「ちよつと何やってるのですか」

「酒は〜1人よりみんなで飲んだ方が美味しいよ〜」

「私は飲めません」

「え〜人生損してたくない〜」

つまみながら飲むキツカワ

私は諦めつままれてもいいようにいくつか料理を頼んだ。キツカワもついでに酒を頼んでいた

ちゃんとお金払いますよね？

あの時会話なんてしたことなかったキツカワとの会話は弾んだ。本当にコミュ力が高い男だ。いつしか話題はパーティーの話になり

「パーティー？捨てられちゃったの？あつららく、入る？」

「いえ、メンバーを集めているんです」

「へ〜」

「ただ神官がどうしても見つからなくて」

「紹介しよつか？」

「えっ」

「俺〜意外と顔が広いんだ〜ここいらで活動している義勇兵だけじゃなくて色んな場所のを」

酒をひと飲み

「だから条件次第でメンバーになってくれる人も今フリーの人もお・し・え・てあげる〜」

うそ。こんな話が転がり込んでくるなんて

「じゃ、じゃあその情報教「の、前に〜」

私の言葉を遮ってくる

キツカワはすまなそうにして

「名前なんだっけ？話してると思い出せそうんだけど、どーしても思い出せないんだあ。ごめんねえ、ごめんちゃい。だからぼくちに君の名前を教えてクレッシエント」

ジヨツキを手にポーズをするキツカワ

かかっている、かかっている私に

その後 この周辺の神官の情報を教えてもらった

意外にここから近いシェリーの酒場で1人フリーの神官がいるらしい。ただあまりいい噂を聞かない

その神官はあまり治療をしてくれないのだ。さすがに活動に支障が出るほどの怪我は治療をしてくれるみたいだが……

パーティーを転々としてるので試してみたらどうだと言われた

「仲良くなったらそれとなく聞いてみよう……」

私は料金を支払い借宿に帰った。キツカワの酒代？もちろんこっち持ち。普通じゃ

手に入らない情報を貰ったし仕方ないよね

次の日の夜シェリーの酒場を覗く。話に聞いた神官を探す

その神官はカウンターで1人で食事をしていた

「あの・・・神官のメリイさんでしょうか？」

「こちらを振り向く、気の強そうな雰囲気がある

「何か・・・」

目をすぼめてこちらを観察してくる

メリイさんは同性の私から見ても綺麗だった

「実は神官のメリイさんに私のパーティーに入って欲しくて」

「いいわよ」

あっさりとした了承してくれた。

その後私も隣で食事をして条件について話し合った

話していると冷く、人を拒絶しているような感じはしたが私が思っていたような人ではない気がする

「とりあえず今パーティーは依頼後で休養期間中です。1週間後ぐらいしたら依頼を取  
ると思うのでその時にまたお願いします」



「わかった」

これで神官が入った。まだ一緒に行動してないのでメリイさんが噂通りの人かどうかわからない

「話した感じは普通だと思うのだけどなあ」

私はそう呟いた

その後、消耗品の補充や内臓サンド屋台のおじさんに会いに行ったりしていた。ちなみに内臓サンドはアンドルテという名前だった。そうやってゆつくりと休養期間が過ぎていくと思っていたら

「ネクロマンサーのシオリ様はいらっしゃいますか？」

私が借宿でゆつくりしている時にドアがノックされた

臨時のパーティー編成の依頼等で私の部屋までくる義勇兵はいるが妙に丁寧だ

「どちら様でしょうか？」

私は扉を開けずに答えた。不用心に扉を開けてしまうと強盗とかの場合だったら目も当てられない状況になる

「私はザナク商会のものです。不躰ながらネクロマンサーであるシオリ様のお力をお借

りしたいと思ひ参じました」

ザナク商会はオルタナ北部を主に活動している商会だ

全然接点がない。話の感じは依頼っぽいが……

私は警戒しつつ扉を開いた。扉の前にいるのは初老の男性

「ありがとうございます。実は依頼がありまして……」

話を聞くと死者蘇生の依頼だった。自分の主人の息子が落馬してルミアリス神殿に運ぶがもう事切れていた。悲しみにくれていたが義勇兵に死者蘇生が使えるネクロマンサーがいるから甦らせてもらおうというわけだ

そういえば使えました。全然依頼がなかったからすっかり忘れていた

私は依頼に了承し準備されていた馬車でルミアリス神殿に移動した。部屋に案内される。石でできた祭壇に子供が寝かされていた。近くには涙で腫らした顔をした親らしき人がいる。子供は見た感じ手足の骨折以外に外傷は見当たらない

私はネクロマンサーの死者蘇生について簡単に説明した

蘇生後に治癒魔法をかけるので問題ないとのこと

「私は死者蘇生が使えるとは言ってもまだ未熟です。何度か失敗するかもしれませんが必ず成功させますので安心してお待ちください」

まだ1日も経っていないし大丈夫。時間はある

子供の前に立つ。私の後ろに神官が備えた。おそらく落馬したことにより中にダメージが入っている。蘇生しても痛みによるショック死の可能性もあるのですぐ治療できるように備えたのだ

私は詠唱し、子供に触れた。とたんに激しい目眩。そうそうこんな感じだった

私は必死に集中し、魂を引つ張るイメージをした。子供が血を吐きながら咳をする……成功だ

後ろに控えた神官が素早く治療魔法をかけた。あんなに苦しそうだった子供が今では安らかな顔で寝ている

親が泣きながら感謝してくる

私も感化されて潤んじやった

さすがに体力までは回復しないので数日間入院すること。報酬については後日商会で受け取ることになった

私を送る手はずになっていたが、いい時間なので歩いて帰ると言って部屋を出た

—————いいよっ!!—————

かなり大きい声だった

私は何かあったのかと思いきや失礼だが声のした部屋を覗いた

ハルヒロが神官と対峙している

シホルが膝から崩れ落ちてユメに支えられている  
ランタ、モグゾーは呆然としている

石でできている祭壇にはマナトが寝かされていた

## 9話

ハルヒロside

「ハア!!」

マナトのスマッシュがゴブリンの頭に命中。兜が大きくへこんだゴブリンはよろけ  
ると倒れて動かなくなった

「よっしやーまたまた悪徳〈ヴァイス〉ゲツト」

倒れたゴブリンにランタが飛び付く

ゴブリンは意外にしぶとい。さっきみたいに頭がへこんでいてもしばらくすると何  
もなかったかのように起き上がる

初めてのゴブリンを倒した時も急に起き上がりランタが襲われた

マナトのスマッシュではゴブリンを気絶させることはできても殺すことはできない。  
だからああやってトドメを差す必要がある

もっぱらランタがヴァイス狙いでやっちゃうけど

「いい時間だし、そろそろ休憩しよう」

マナトの号令で俺たちはいつも休憩に使っている場所へ移動した。しばらく歩くと

教会が見えてきた

この教会は他と比べ損傷が少なく、もし見つかったとしても裏口から逃げれるという理由でいつも利用している

朝からゴブリンを狩り続けてまともな休憩は取っていなかったがみんなの顔は明るい。それもそのはず、今までは何日もゴブリンを探して少ない稼ぎで貧乏生活だったが、ここダムローに来て俺達の懐具合はかなり良くなった

いや、まだ貧乏なんだけどね

今日の昼飯は野菜やハムがたっぷりと挟んである大きなサンドイッチ、モグゾー作である。固いパンにジャーキーが昼飯だった頃と大違いだ

「いい感じのパーティーになってきたね」

「えっ?」

「初めは単独行動しているゴブリンを狙っていたけど今は3匹は余裕で行けるし、やり方を変えたら4匹、いや5匹はいけるんじゃない?」

マナトはみんなを一人一人見て

「俺もみんなも個性が出てきた。これからもっと強くなるよ」

「ここまで行けたのはマナトがいてくれたからだよ」

本当に感謝しているマナトには・・・

水を飲もうと皮袋の水筒に手を伸ばす

ドスッ

肩の辺りに衝撃を感じた。目の前のユメが大きく目を見開いている

肩を見たら矢が刺さっていた。

「ああああああっく!!」

痛い。だんだん痛くなってきた。刺さってるって理解した瞬間めちやくちや痛く  
なった

「ハルヒロ!?!」

それと同時にゴブリンが乗り込んでくる。多い10匹はいるんじゃないのか?

「早く裏口へ!」

マナトが叫ぶ。俺はモグゾーに担いでもらいながら急ぐ

「ギャギャ」

ヤバイ、裏口にもゴブリンが

「憤慨突(へアンガー)〜!」

ランタがアンガーでゴブリンを突き飛ばす。ナイスランタ!

裏口に出るとゴブリンに囲まれていた。いったい何匹いるんだ？教会を背にしてゴブリンと対峙する。モグゾー、ランタ、マナトがゴブリンと対峙してくれているけど……「早くしないと挟まれる」

みんな冷や汗をかく。さつき4匹、5匹は行けるのではないかと話していたが、目の前にいるゴブリンは少なく見ても5匹以上はいる。そして後ろから10匹以上のゴブリンが近づいてくる

「ヤバイ詰んだ。どうする？どうにもできない。死んだ……死ぬの？頭が混乱する……何にも考えられない」

「ぬがー」

ボロボロのモグゾーがどうも斬りじやないレイジブローでゴブリン1匹を倒し包囲に穴が開いた

「みんな！早くー！」

マナトが叫ぶ。みんながむしやらに走る……ダムローから出て森に入る。気づいた時にはみんなとはぐれてしまった……そこから1日位かけてマナト以外と合流した。物音がする度、ビクツツとなりゴブリンの恐怖に怯えた

「みんな……」

そして、マナトが林から出てきて



「ごめん……」

倒れた

「……ッ！」

俺はマナトを呼べなかった。背中に無数の切り傷、そして矢が刺さっている

「マ、マ、マナト、ケガ！治療。そうだ早く魔法を」

「うん……光よ、ルミアリス……の加護をの元に……癒し手へキュア」

「なんで俺にしてるんだよ！自分にだよ！」

マナトは自分ではなく、俺の肩にキュアをした

「ご、め……んな。ハル、ヒロ」

「何が！早く魔法で直さないと！」

「た……の、む」

「頼むって何を！マナト！マナト！」

「包帯だ！」

ランタ叫ぶ

「包帯なんて……」

モグゾーの顔が沈む。鞆はみんなあの教会に置いてきた。俺達は着ている服を包帯がわりに使った

「魔法、魔法やったらなんとかなる！」

「ルミアリス神殿か」

「僕が連れていく」

モグゾーがマナトを背負う

みんなオルタナ北門に一番近いルミアリス神殿に向かって走る。途中シホルやランタがついていけずにはぐれるが俺達は一身不乱に走った

神殿に到着すると俺達の様子から直ぐに部屋に通されマナトを台の上に乗せた。そしてシホル、ランタが到着する位に神官がきた

「お願いします。マナトを助けてください。お、俺、何でもするんで、どうか頼みます：：  
お願いします」

神官はマナトを見て

「・・・輝かしき光明神ルミアリスと言えども、死したものを救うことはできぬ・・・マナトよ。才覚に恵まれておきながら簡単に命を散らすとは何事か！」

シホルが崩れユメが支える。モグゾーとランタは呆然としている

「このうえは、丁重に葬ってやることだ・・・ノーライフキングの呪いによりグリムガルで適切に埋葬されぬ者は、やつに従者になってしまふ。長くても5日、聞いたところで3日でゾンビになつという話もある」

「・・・それって、マナトを燃やせつてことですか？」

「郊外に焼き場がある。呪いに蝕まれぬよう亡骸を炎で浄化したのち、丘の上の墓場に葬るのだ」

「・・・・・・・・」

「持ち合わせがなければわしが払「いいよ!!」」

「いいよ・・・足りなくても、どうにかするし。マナトは・・・マナトは、俺達の、大事な仲間だから・・・」

「そうか・・・ならば別れが済んだら呼びなさい・・・」

神官が部屋から出ていった

「あのくすいません。ハルヒロ君？何かありました？」

声の方を見るとシオリが扉の前にいた。服装は魔法使いっぽいがところどころボロボロで悪趣味な杖を持っている。おそらく1人で頑張っていたのだろう。そしてシオリは心配そうにみんなとマナトを見ている

「マナトが・・・死んじゃって・・・」

「えっ？」

シオリがマナトに近づき触る

「あ、おい！何やってるんだよ」

ランタが我に返り叫ぶ

「背中に切り傷・・・毒で死んでいないのですよね？でも神殿だから毒ぐらいは浄化できるか・・・」

「やめろよ！」

俺はシオリをマナトから引き剥がす

「何でそんなことができるんだよ！」

「当然でしょ！蘇生させるんだから」

「ハア!?意味のわからないこと言うなよ！死んだ人間は甦らないんだ！」

「できますよ。ネクロマンサーですから」

「ネクロマンサー・・・」

『どうも死んだ人間を甦らせることができるみたい』

あのときの記憶が甦る・・・そうだネクロマンサーは神官にはできない死者蘇生ができるんだ！

「そうだ、ネクロマンサーなら死んだ人を・・・マナトが・・・甦る・・・」

モグゾー、ランタ、ユメ、シホルがこちらを見る。

「シオリ！知っているんだろ！ネクロマンサーのいる所、教えてくれ！マナトを甦らせなきゃ！」

俺はシオリの肩を掴んだ。一瞬痛そうに顔をしかめると手を上げて

「私、ネクロマンサー。死者蘇生、使える。」

「えっ？」

「だから、私がマナトを甦らせて神官の人に治療してもらえば問題なしです」

「ウソ……」

「本当ですよ。料金は1ゴールドと50シルバー。諸事情でまけることはできませんがツケときます」

「あ、うん。でも、治療費……」

「やっと合流できたんですもの私が払います」

「いや、そんな……悪いよ」

「じゃあ、これもツケで私達で折半しましょう」

「うん……」

トントン拍子に話が進む。シオリはあの後、神官を呼んできて自分がネクロマンサーであることを告げ、マナトの治療の依頼をした

「ここにきた者から聞いてはいたがまさか北門を拠点にしていたとは。師であるわしからも頼むマナトを甦らせてくれ」

神官が言う。あの人マナトのお師匠だったのか

そしてシオリは何度かの魔法の失敗後、魔法を成功させた  
俺達のリーダーマナトは甦った・・・  
ハルヒロside end

## 10話

マナト達6人は入院した

マナトは当然だとして、5人はケガをしているにも関わらず、休憩せずここまで走ってボロボロでだったので念のために

さらに聞けば少なくとも2週間はオルタナとダムローを往復していたと言っていた。その事を聞いたマナトの先生ホーネンさんは

「何を考えておる！疲れというのは自分の知らぬ所で蓄積すると！おそらく今回の件はそれが祟ったのだ！」

とカンカンに怒っていた。まあその前後を見るとマナトを本当に思ってくれていると感じるのでマナトはいい先生を持ったと思う

「先生か・・・」

オルタナに戻ってもう1ヶ月は過ぎた。ホーネンさんのマナトへの思いを見てホムシツクではないが先生に会いたいと思った

「今度お手紙でも書こう」

オルタナからだと言信をもらったとしても1ヶ月、これなら会いに行つた方が早い

借金の件もありますし帰りましょう

「帰るって私は先生の子供ですか」

先生は多分喜ぶだろう。そうこう思っている内にマナト達が入院している病室に到着した

ノックをして部屋に入るとマナトのベットの中心に5人は集まっていた

「あ、シオリくホントにありがとう」

「わ、ユ、ユメ」

ユメが抱きついてくる

「シオリありがとう。もしシオリがあの時いてくれなかったらマナトが本当に死んだ」

「シオリさんありがとう」

「ありがとうございます」

「仲間ならちよつとはまけるよ」

3人はそれぞれお礼を言ってくれる。ランタはツケのことが不満のようだ

「ランタ!」

「うるさい。マナトのことは感謝してる。でもこいつはちよつと離れている内に金に汚い守銭奴になっちまってんだよ」



「今言うことじゃないだろ」

「いえ、仕方ないですよ」

ケンカを始めそうになるランタ、ハルヒロ、ユメはこちらを向く

「神殿にたまたまいたのは蘇生の依頼があつたからなんです。自分はお金を払っているのにあつちは安くする。そうなると思うます？」

「そりゃあ……こつちもまけるように……」

「そうなります。ちなみに今回の依頼はザナク商会でオルタナ北部を中心に活動しています。商会ににらまされると色々と不便ですし私だけならいいですけどみんなに迷惑をかけるのは悪いと思つての行動です」

「お、おう……そうなのか……」

ランタは納得してくれたようだ。実は価格が決まった後、所長とロジエさんに似たような話をしたときに2人にこつぴどく怒られた。「あんた、一生タダ働きたくなかつたら安くしちやダメ」って笑顔で言つてたけど私には後ろにオークが見えてた

「何か……人が変わった？前はあまり喋らなかつたような……」

マナトが言つた

「うゝん。ここに戻つてきて全部自分でやるようになったからかな？私に色々教えてくれた人は「お前がやるんだらやれ」って人だから色々聞いたりしていく内にこんな

なっちゃたかも……」

「そう……なんだ……」

あれ？マナトの顔が暗い？何か悪いこと言った？

「ごめん……ちよつと疲れちゃったから休むよ」

「マ、マナトくん大丈夫？」

「大丈夫。傷はもうないし後は体力的な問題」

「モグゾー、マナトはもう大丈夫だって、そろそろ俺達も家に帰ろう。また明日来るよ」

「うん」

ハルヒロ達はもう帰るようだ

「ハルヒロ達が帰るのなら私も出ようかな？マナトまたね」

「シオリ本当にありがとう。また」

私は療養所を出てハルヒロ達としばらく歩きシエリーの酒場で別れた

マナト side

「やつと見失ってくれた……？」

草むらに隠れながら俺は呟いた。ダムローでゴブリンの大群に襲われた俺達は森に

逃げた。めちやくちやに逃げたせいかわるはろとどはぐれてしまった

「みんな……無事でいてくれ……」

俺はみんなの無事を祈りながら立った

「ツ！」

背中が痛い……痛みで気を失いそうだ……

ハルヒロたちとはぐれてからも俺はゴブリンに執拗に終われた。見つかる度に傷つき矢を射られた。

傷つけば治癒魔法で直せばいいのだから、俺の使える治癒は傷に直接癒しの魔法を当てないといけない。なので背中での治癒はできない

「何で……」

あんな大人数で群れているゴブリンは見たことない。それにあの教会で襲われた時は裏口に逃げれば何とかなっていた

「もしかして……待ち伏せ？」

俺達は大きな休憩をする時はいつもあそこを使っていた。もし俺が襲うならそこを狙う

「みんな……ごめん……」

だとしたら俺の責任だ……この危険に気づいていれば

背中の痛みが引かない。その場で寝転んでしまいたい。そんなことをするとダメなような気がする……

みんなが心配だ。俺の責任で危険な目に合わせてしまった

草むらを抜ける。そこにハルヒロ達がいた

「みんな……」

安心して足がもつれる

「ごめん……」

俺はその場で倒れてしまった

「……ッ！」

ハルヒロ達が走ってくる。大丈夫だよ、ちよつともつれただけだから

「マ、マ、マナト、ケガ！治療。そうだ早く魔法を」

そういえばあの時ハルヒロに矢が刺さってた。血は止まっているけど痛々しい……俺はキュアをハルヒロにかける

「なんで俺にしてるんだよ！自分にだよ！」

俺の治療魔法は自分の背中にはかけられない。この傷も休めば大丈夫だ。

それにいつまでもここにいられない早くここを移動しないと。緊張が切れたのか体が動かない、仕方がない少し休ませてもらおう。

「ご、め・・・んな。ハル、ヒロ」

「何が！早く魔法で直さないと！」

「た・・・の、む」

みんなを安全な所まで頼むよハルヒロ・・・

「頼むって何を！マナト！マナト！」

そういえば主語が抜けてるでもハルヒロなら分かってくれる。休んでいる間のことはハルヒロに任せて休もう。そしてまた明日からも頑張ろう・・・

次に目を覚ますとどこか知らない部屋だった。窓から見える空は白んでいるので早朝だろう。周りを見るとみんながベットで寝ている

どうやらあれから朝まで寝ていたようだ。余裕が出てきたとはいえ宿に休んでお金大丈夫かな？

そう考えているとモグゾーが起きた

「モグゾーおはよう。今日の朝飯の当番は必要ないよ」

「あ、あ、マ、マナト、マナトくん！」

モグゾーが泣きながら抱きついてくる。痛いよモグゾー

モグゾーの出した音でみんなが起きた

ほらみんなが起きちやったじゃないか

そこからが大変だった。みんなが泣いて抱きついてくる。確かに1日近く目を覚ま  
さなかつただけなのにみんな大袈裟だ

「俺……死んでたんだ……」

みんなから俺が死んでいたことを聞かされる。そしてシオリと出会ったことを……  
色々聞いたりしてしているとシオリがノックをして入ってくる。よかつた元気そうだ。  
あの服装はネクロマンサーの正装かな？ちよつとボロいかも

ランタが俺を甦らせた料金について文句を言うと言い負かされた。何か最初の頃よ  
り全然違う

「何か……人が変わった？前はあまり喋らなかつたような……」

「うくん。ここに戻ってきて全部自分でやるようになったからかな？私に色々教えてく  
れた人は「お前がやるんだらやれ」って人だから色々聞いたりしていく内にこんな  
なつちやたかも……」

シオリはシオリで大変だったようだ

でも全部1人でやって正式な義勇兵になって数ゴールドもかかる死者蘇生も覚え

て・・・俺よりもすごい

もしシオリがパーティリーダーだったらこんなことにならずに今頃は全員団章をもらっていたんじゃないだろうか・・・

暗くなっていることに気づいたのかみんな心配してくる

俺は疲れたと言ったらみんな帰るようだ

みんなが帰った後俺は考える・・・俺なんかリーダーをやつていいんだろうか・・・そんなことを考えていると俺の師匠ホーネンさんが入ってきた。

「体の調子はどうだ？」

「はい、体は問題ないですが疲れはあります」

師匠は椅子を引き寄せるとそこに座った

「さてマナトよ。ワシの言いたいことはわかるか？」

「・・・・・・・・」

何も言えない。だつて思い当たる節が多すぎるから。師匠がこういうことを言うと大抵怒られる。褒められたことはないけどね。神官ギルドに入って怒られるために生きていたのではないかと錯覚するぐらい怒られた。そして今回も・・・

「なぜ全て自分でやろうとする。他のメンバーを信用していないのか」

「信用しています」

「なら何故一緒にやらん、頼まん。聞けばここ最近ずっとあそこに行っていたそうだな。大方疲れからこのようなことがあったのじやろう。して、これからどうする?」

「シオリに・・・あのネクロマンサーにリーダーをお願いしようかと思えます・・・彼女は元々同期で1人で正式の義勇兵になったそうです」

「裏切るのか・・・」

「・・・・・・・・」

「あの者達に会ったときお主のことを大切な仲間と言っていた。リーダーとして認められていたのではないのか?」

「でもあんな危険な目に合わせました」

「それはお主が仲間を信用せず、1人で動いたからだ。パーティーに絶対はない。時には間違い危険な目に合うだろう」

師匠は俺の肩に手をやる。師匠の顔を見る

「マナトよお前は才覚があるのじや。確かに訓練では才覚を伸ばすために厳しくはした。それはお主のことを思っていることだ。だから自らを摘むようなことはしないでくれ」

師匠。俺のこと認めてくれてたんだ・・・

「して、マナトよもう1度だけ聞くこれからどうする?」



「・・・シオリや他のパーティーリーダーを見て勉強します。それで今回のことがないようになります」

「それがいい。今は間違った答えをだし続けても、最後に正解を出せばいいのだ。精進しろマナト」

「はい・・・」

そういうと師匠は出ていった。おそらく慰めに来てくれたのではないだろうか・・・きつとそうだ

それから数日問題なく過ぎ俺はみんなと合流した

マナト side      e n d

「メリイさん食事一緒にしませんか？」

「・・・」

食事中のメリイさんはこちらをちらりと見て食事を再開した

私は断られていないので隣に座り注文をした

「メリイさんって私より義勇兵歴長いんですよ？いつ頃からいるの？」

「私普段は別の酒場で食事しているんだけどここのおすすめは何かなく」

「メリイさんって嫌いな食べ物ある？」

私は色々と話しかけるがメリイさんは答えないか、素っ気ない回答で会話が続かない  
そうこう言っている内にメリイさんの食事が終わった

「じゃ」

メリイさんが席を立とうとする。その時、酒場が騒がしくなった

「……おい、あれレンジってやつじゃないか？……」

「……ルーキー達のパーティーじゃ若い方だがかなりやるそうだぜ……」

レンジ？ 私は声のする方を見る。レンジ達だ。誰かを探している

レンジはこちら辺りを見るとアダチ達に一声かけて近づいてくる。そして私の前に

来て一言

「おれのパーティーを手伝え」

## 11話

「俺のパーティーを手伝え」

私はメリイさんの方を見る

メリイさんはこちらの視線に気づき「あなたが言われてるの」って目で見てくる

あ、やっぱり私ですよね・・・

「あの・・・どういうことでしょうか？」

レンジの言葉は私とのパーティーでクランを組み依頼を受けたいということだった  
依頼内容はサイリン鉱山周辺でのコボルトの調査だ

コボルトはサイリン鉱山を占領している。しかし、最近オルタナに近い場所での発見が多くなっているためサイリン鉱山周辺でのコボルトの活動状態を調査する必要があるとのことだ。

「活動しているコボルトの討伐依頼もあるが、いるかわからない物を受ける気にならん」

「確かにコボルトの住みかであるサイリン鉱山の実態を確認してから討伐依頼を受けた方が無駄がない」

「メンバーと相談するので回答は後日でいいですか」

「出発は4日後、明日またくる」

レンジはアダチ達の元に戻り二、三会話を交わし出ていった。あ、アダチさんが挨拶してきた。どうも〜

「どうするの?」

「戦闘メインではなさそうなので受けたいと思いますけど・・・」

「あいつらのこと?」

「はい・・・実は同期なのですがちよつと荒っぽいというか〜」

「血の気が多くて無茶しそうってこと?」

「はい・・・3人だけでは数が足りないので短期で2人ほど雇用します」

「その辺のこと言わなくていいわ」

「仲間なんですから言いますよ」

「あと、携帯食料の買い出しをしたかったので明後日に一緒に市場に行きましょう」

「・・・いいわよ」

メリイさんは席を立ち出ていった。

「これはまずいですね」

私はハルヒロ達と街の外に行くための道具の確認をしている。ダムローでゴブリン狩りを始めて懐具合がだいぶ良くなったと聞いてはいたが、今回のことで街の外に出て活動するための道具は全て失っている

「鞆を中古で買ったとしても必要な道具が買えなくなっちゃうし、この周辺にゴブリンなんて・・・」

城塞都市オルタナ周辺はアラバキア王国の警備兵が巡回しているのでモンスターはほぼいない。あるとすれば組織だって行動してくる上位モンスターだ

「や、やつぱりこれも・・・」

5人は私を見る

「ハア、わかっています」

「本当にごめん。絶対に返すから」

「返す前に正式な義勇兵になってください・・・」

「ははは・・・」

ここにきて話を聞くとマナト達はまだ義勇兵見習いだ

先生のお金で義勇兵になった私はあまり強く言えないですけど・・・

「でも、こんなに借りたらシオリさんに迷惑じゃあ」

「でも借りなきゃ生きてはいけません。このままだと確実に路地裏の人たちになってしましますよ」

オルタナのスラム外や人気のない路地裏にいる元義勇兵の姿を思い出したモグゾーは青い顔をした

「でも、ほんまの話大丈夫なん?」

「それでもレンジ達より早く義勇兵になって稼いでいます。それにパーティーのために積み立てている資金があるので大丈夫ですよ」

「でも・・・」

「シオリがいいって言ってんだから借りちまおうぜ」

心配そうなシホルにランタが言う

「むしろ借りてもらって早く義勇兵になって欲しいです。だって私がパーティーを作っているのもみんなと一緒にいたいためにしているのです」

「わかった。何が必要かは明日マナトと相談する」

「あと装備の修理ですよね・・・。3日後依頼で街を出るので買い出しは戻って来てからお願いします」

その後、ザナク商会で報酬を受け取り、ダイさん、ステラさんに臨時のパーティーに

入ってもらおうようにお願いした

「どうする?」

「受けます」

私はシェリーの酒場でレンジとアダチと席を共にしている

「ありがとう。君のパーティーが手伝ってくれるのは心強いよ」

「そちらと違って固定メンバーは2人しかいませんし、私もまだまだですよ」

「では今回は3人で?」

「いえ、調査がメインのようなので狩人を2人雇いました」

「使えるのか?」

アダチとの会話にレンジが入ってくる

「大丈夫です。山道に強いので」

「そうか・・・」

感じ悪い・・・

「とりあえず今回はコボルトの姿を確認した場所を通ってサイリン鉱山へ、周辺の調査を行い、何も無いようであれば戻ります」

アダチさんが気にせず喋り出す。レンジのこういうのは前からなんだろう・・・

「もし、コボルトが拠点を作っていた場合は？」

「規模にもよりますが攻撃します」

その後、アダチさんと話を詰めていった

「よろしくお願いします」

市場で頼んでおいた携帯食料を受け取り、北門前でレンジ達のパーティーと合流する

私のパーティーは

戦士：アディ

狩人：ダイ、ステラ

神官：メリイ

ネクロマンサー：私

レンジのパーティーは

戦士：レンジ

パラディン：ロン

盗賊：サツサ



神官：チビ

魔法使い：アダチ

簡単な挨拶のあと北門を出てコボルトの目撃があつた地点へ

「そろそろ目撃があつた地点です」

アダチが地図を見ながら言った

「ダイさん、ステラさん先行お願いします」

「サツサ」

3人が前に出る。ダムロー周辺の道と違いサイリン鉱山への道は急勾配で予想以上に体力の消耗が激しい。私達は小休憩をしながら移動する

「いたよ」

何度目かの小休憩の最中、先行してくれていた3人の内サツサがコボルトを見つけたと戻ってきた

「数は3。今は2人が見張ってる」

「無視して背後からやられると厄介だ。やるぞ」

レンジの言葉に私たちが頷く

「まずは2人が弓でその後、私とシオリさんで魔法攻撃、その後は数の有利で行きましょう」

2人と合流しアダチさんが作戦を提案する。みんなの準備が完了して「しゅっ」「ふっ」

ダイさんとステラさんが弓を射る

矢はそれぞれ顔と肩に当たる

顔に当たったコボルトは倒れる

2人に気づいた無傷のコボルトがこちらに走ってきた

「ジール・メア・グラム・フェル・カノン」

「安寧を生きるものに死の告知を・死の宣告へモーターレイ」

私のモーターレイは肩を射ぬいた方、アダチさん魔法は向かってくるコボルト

モーターレイを浴びたコボルトから魂が飛び出し倒れる

アダチさんの魔法はコボルトの足に当たり氷結する。足を氷結されたコボルトは足

をもつれさせて転倒する。

「よっ」と

倒れたコボルトの頭にダイさんの剣鉞が深く刺さる。ダイさんの使用する剣鉞は大型で刃渡り50センチ近くあり重量もある。こんなので頭を割られたら生きてはいないだろう。顔を射られたコボルトは痙攣して倒れてる。これはレンジがトドメを差した

「コボルトって結構みすぼらしい装備なんですね」

「そのコボルトは下級〈レッサー〉だからよ。サイリン鉱山上層部にいるコボルトよ」  
私の疑問にメリイさんが答える

「レッサー？」

「鉱山の上層に住んでいるコボルトは体も身なりもひどいの。それで下級〈レッサー〉って呼ばれているの」

メリイさんがコボルトの前に座り、石がついた鼻飾りを持って見せ

「これがお守りへタリスマン〈どのコボルトも絶対に1つ持っているの。このタリスマンは普通の石を削ったものだからいいわ」

「レッサーじゃないコボルトはもつといいのを持っているの？」

「ええ、宝石や鉱石や金属をタリスマンにしているわ」

「ふくん。レッサーは外れかあ」

「レッサーでもたまに銀貨や銅貨をタリスマンにしていることはあるわよ」

「でも穴が空いちちゃってますよね」

硬貨に穴や欠け、深刻な傷があると価値が一気に半分位になる。銀貨だと交換できるが、銅貨だと数十枚集めてやっと銅貨1枚となるので割りに合わない

「そろそろ行くよ」

メリイさんと話しているとアデイさんが移動すると言ってきた

酒場で話しかけても反応が薄かったけどたくさん喋れて嬉しかった。プライベートの事をあまり話したがないのかなあ

その後、私達はコボルトに出会わずにサイリン鉱山まで移動した

「キャンプを開きたいところですが狙われるのが怖いです。周囲のが確認できるまで野宿で行きましょう」

キャンプでこちらの位置を教えてしまうのはまずい。最悪囲まれて全滅する恐れがある

1日かけて周囲を探索し安全を確保した私達はキャンプを設営した

その後、盗賊のサツサさん、狩人のダイさん、ステラさんを中心とした3チームを編成しサイリン鉱山周辺の調査を行った

調査の途中何度かレッサーコボルトと遭遇したが1匹、2匹と数が少なかったため比較的安全に調査が進んだ

そして調査3日目の情報交換の際

「オークとコボルトが一緒にいた」

オークとコボルトの拠点を見つけた

## 12話

「オークとコボルトが一緒にいた」

サイリン 鉱山周辺の調査3日目の情報交換の時、サツサ班が言った

「オークとコボルトって本当ですか？」

「ああ」

アダチさんの問いにサツサと同じ班だったレンジが頷く

オークは緑色の肌をしていて鼻は潰れ、耳が小さく尖り、口は大きく両端から大きな牙が生えている。体は大きく横幅もある大型人型種族だ。ノーライフキングなどの不死族を除く種族でオルタナや同盟国家最大の敵だ

「おかしい。コボルトは他種族と一緒に行動することはない」

メリイさんが疑問を口にする

コボルトは犬頭で全身体毛に覆われた人型種族だ。犬のような見た目をしているように強い上下関係があり、他種族に排他的だ

「一緒に行動していたのは事実だ」

「・・・オルタナに戻って報告すべきですが、情報が足りません。ここはその拠点の調査

を行いそれから戻りましょう」

「この情報だけでも戻る価値はあると思うけど？」

アダチさんの提案にアデイさんが異を唱える。

「そもそも調査と言つてもここに居られるのもあと僅かだし、戻るべき」

「せめてコボルトに上位へエルダー」や普通のがいないかだけでも・・・」

議論の結果、1日だけ使つて数や規模、その他に拠点は作られてないか、といった情報を集めることとなった

「この状況下では情報を持ち帰るのが優先です。班のリーダーの方は決して無茶をしないでください」

サツサさん、ダイさん、ステラさんが頷く

次の日、サツサさんの情報を元にオークとコボルトの拠点に向かった

「確かにオークとコボルトが一緒にいますね。装備が貧相なのでレッサーですよね」  
「ええ」

私の間にメリイさんが答える。見た所下働きしているのは主にレッサーコボルトで普通のコボルト、エルダーコボルトの姿は1度も確認できなかった

今日1日の調査で下記の情報が共有された

・拠点にはコボルト30匹、オーク10匹がいる

・コボルトはレッサーまでしか確認できなかった

・コボルト側がレッサーまでなので上位オークがいると思われる

・その周辺に他の拠点は見当たらず

十分すぎる情報を得た私達は早朝にキャンプをたたみ、オルタナに戻るために移動を開始した

元来た道を戻る。途中、下り勾配が終わり、平坦な道の岩場から大きな影と小さな影に出くわした

「フゴッ!」「キャン!」

「へっ?」「んっ!」

オークとコボルトだった。数は見えるだけでオーク3匹、コボルト2匹。お互い気配に気づいていなかったのか時が止まってしまった

「ッ!」

この状況で1番最初に動いたのがレンジだ

レンジは前方の3人を押し退け、グレートソードでオークの肩からナナメに一閃して斬り倒した。

「うおおおおお」

続いてロンさんが突撃、レンジと2人で前方のオーク、コボルトと相対した



「オウ、オウ、ワオオオオオン」

コボルトが大きく吠える。まずい

「クソ、仲間を呼ばれた」

アデイさんがエストックを抜いて岩の上からこちらに飛びかかろうとしたコボルトを切りつける

「安寧を生きるものに死の告知を・死の宣告へモーターレイ」

私は近づいてくるコボルトにモーターレイを打ち倒す

よし、コボルトもゴブリンと一緒に高確率で倒せる

「オーム・レル・エクト・ヴェル・ダーシユ」

アダチさんの放った魔法は命中すると鈍い音を出しながらコボルトは無抵抗になつた

「シオリさん！」

私はそのコボルトをモーターレイで倒して

「私のモーターレイは一撃で倒せないことがあるのでトドメは他の方に！」

「わかりました！」

前方にいたダイさん、ステラさんが下がってメリイさんと3人で私とアダチさんを守る

サツサさんは私達より前に出ているアデイさんとチビの援護をしている

オークは見えているだけだったが、コボルトの数が多い。だが、レンジとロンさんがオークを抑えてくれているので安全にコボルトに対処ができる

「これならいける・・・」

後は相手の援護がくる前に・・・

「フゴオオオオ！」

突如、オークの雄叫びが響いた。私達も戦っていたオークもコボルトも動きが止まる

「雄叫びへウオークライ・・・」

ステラさんが震える声で言う

2、3秒して動けるようになり、声のする方向を見る

オークが3匹いた。真ん中のオークは一回り体が大きく、身に付けている鎧も他のオークと違う。

体の大きいオークは私達を見渡し

「オマエタチノナカデツヨイノハダレタ」

喋った？もしかして上位オーク？

オークの声を聞いてレンジが前に出る

「キャス・リアンオマエハ」

「レンジだ」

「レンジコツチダ」

キャス・リアンと名乗ったオークはレンジを私達と離れたところに誘う

「アトハスキニシロ」

キャス・リアンの言葉を聞いた残りのオークは雄叫びを上げこちらに向かってきた

「ダイ、あつちを！」

「わかった！」

向かってきたオークにラウンドシールドを全面に向けたアデイさんが突っ込んできた

それと同時にダイさんがチビさんとサツサさんの元に走る

「オヴウ！」

オークがアデイさんごと倒れる

「フゴウ！」「グッ！」

倒れたオークに追撃をかけようとしたがもう一匹に阻まれ飛ばされる。アデイさんはすぐに起き上がるがふらついている

「アデイさん！メリイさん回復を」

私はメリイさんをに回復を頼むが反応がない。メリイさんに顔を向けると真っ青な

顔をしていた

「あ、あ……」

「メリイさん！大丈夫ですか!?!しっかりとってください！メリイさん！」

「ム……ツミ？」

「私はシオリです！メリイさん！」

アデイさんは先程のダメージが残っているのかオーク2匹の攻撃に押されている。アダチさんの魔法もステラさんの弓もあまり効果が薄く。チビさんとサツサさんもコボルトに阻まれてしまっている

どうする？このままじゃ……

「あぐうー！」

アデイさんが吹き飛ばされる。起き上がるがろうとしているがうまくいかない所にオークが近づく

「あ、ああああ！」

私は飛び出し、オークの1体に

「安寧を生きるものに死の告知を・死の宣告へモーターレイ！」

お願い効いて！

願いが通じたのかオークの魂が飛び出て倒れる

「死して我に従う玩具となれ・死体操作〈ゾンビクリエイト〉」

倒れたオークにゾンビクリエイトを唱え触れて操作する

そのままもう1体のオークに飛びかかる

「ンゴツ」

オークの首を絞める。抵抗して殴ってくるがもう死んでいるから無駄だ

オークの魂を見て肉体から飛び出た所でもう1体のオークにゾンビクリエイトをかける

「メリイさん。アデイさんをお願いします」

「え、ええ・・・」

まだ顔色が悪いけど大丈夫・・・

私はオーク2匹とダイさん、チビさん、サツサさんの元に行く。3人はこちらに向かってくるオークにビックリしたが、私とオークが一緒にいること。オークがコボルトを襲う姿を見て、ゾンビクリエイトだと気づいたようだ

「アダチさんの元に戻ってください」

3人にそう伝えロンさんの元に向かう。

「ロンさん・・・」

ロンさんはオークとコボルトを倒し座り込んでいた

「そっちも・・・終わっ・・・たか」

ロンが立ち上がりレンジの元に向かう。私もゾンビクリエイトで操作しているオークと共に向かう

レンジはキャス・リアンとの戦いに勝っていた。ただ、相当疲労しているのか私達が近づいても一瞥しただけだった

私はオークにレンジとロンさんを抱っこさせみんなの元に戻った

みんな無事であることが確認でき皆の顔には笑みが出ていたが、私にはきになっていたことがあった

メリイさんのあの反応・・・何か過去にオークか何かで・・・それにムツミって？

聞けば簡単なのだが恐らくはぐらかされるだろう

メリイさんから話してくれるのを待つしかないのかなあ

「シオリさんの暴走がなかったら誰か死んでたかも知れませんか」

「えっ！」

アダチさんの言葉で意識が引き戻される

「まさかオークに突っ込んでいくとは・・・」

「いや〜無我夢中で・・・」

「所であのオークを使って鎧やらを持ち運ぶことは可能ですよね？」

ホントちゃっかりしてるねアダチさん・・・

その後は問題なくオルタナに戻りレッドムーン事務所ですら調査で得た情報を報告した。早い内に遠征隊が組まれるのでその参加が義務づけられた。

今回のモンスターに身ぐるみは等分で換金は後日行うこととなった

「メリイさん来てないなあ・・・もしかしてもう帰った？」

その日の夜私にはシェリーの酒場にいた。理由はメリイさん。あの時のことを話してくれなくても何だか一緒にいてあげなきゃいけない気がした

食欲もあまりなく簡単なものを摘まんでいると声がかかった

「ちよつといいかい？」

声の方を振り向く。そこにはマナトを大人にした感じの男が立っていた。身なりはかなりいい。鎧の肩当てに星のマークがいくつもある

「私はオリオンのシノハラ。最近メリイと一緒にいるところを見てね。ちよつと話しませんか？」

ただのナンパだったら断っている。ただし、メリイさんが関わっている。私は了承し、ササハラさんの後について酒場の2階に上がっていった

## 13話

私はオリオンのシノハラさんについてシエリーの酒場の2階に上がる。シエリーの酒場の2階に上がったことはないけど見てみると大人数のパーティーやクランが主に使用しているようだ

「急に呼び出して申し訳ない。メリイがいない今ならいいかと思つて」

シノハラさんはオリオンのメンバーが集まっている長机まで私を案内すると椅子に促した

「あの・・・何かご用でしょうか」

席に座りながら言う

「実はメリイは元々私達のクランに所属していて・・・それで時々様子を見たりしていたのですがどうでしょうか？彼女は」

「どうでしょうか？とは」

「いえ、あの・・・何か取り乱したりとか・・・」

もしかしてオークの時のこと？

「はい。最近の依頼で様子がおかしくなつて、私の頭はことをムツミつて」



ガタツ!

オリオンのメンバーの1人が立ち上がる

「すみません・・・」

「失礼。彼は元々メリイと同じパーティーだったのですよ。シオリさんあなたはメリイはパーティーの仲間だと思っっていますか?」

「はい」

「本来ならば他人のプライベートを話す訳にいきませんが、あなたはメンバーのことを色々考え行動しているので大丈夫だと信じています」

メンバーのこと?アデイさんやダイさん達のこと?

「ハヤシ。彼はさっき言った通りメリイとパーティーだった男です。不躰で申し訳ありませんがメリイのことよろしくお願いします」

ハヤシと呼ばれた男がササハラさんに入れ替わる

「ハヤシです。急で申し訳ありませんが、メリイの過去についてです・・・」  
「えっ!?!」

急展開で付いていけない。そんな私を無視してハヤシさんはメリイさんの過去を話始めた

メリイ side

「どうする？」

オグが声を潜めながら皆に聞く。

「どうするって、このまま近づかれたら見つかるし、逃げるにしてもあいつらの前に出ないといと……」

ミチキが外の様子を見ながら言う。今私達はサイリン鉱山の第5層のとある岩影に隠れている。隠れている場所から遠くに大型コボルトと数匹のコボルトが近づいているのが見える

デットスポット。黒白斑の被毛を持つ大型コボルトは多くの義勇兵を手にかけている

「デットスポットに出くわしたら、一も二もなく即、逃げろ！ やつは時に入口付近にまでやってくる。たとえ浅い場所においても、要注意だ」

ここにくる前に情報をくれたベテラン義勇兵が教えてくれた。恐らく近づいてきている大型コボルトはデットスポットだろう

「やるしかない。そして隙を見つけて逃げよう」

ミチキが私達に振り返りながら言った。

魔法使いのムツミが先制攻撃を仕掛けるために息を潜める

デットスポットは無警戒に私達の隠れている場所に近づく。あと少し……

突然デットスポットは飛び上がり私達が隠れていた岩影を砕いた

「ギャオオオオオオオ!!」

デットスポットの雄叫びで私達は身がすくんだ。雄叫びへウオークライ〜だ

走り寄ってくるコボルトに手で制し私達の前に出て剣を構えた。私達は体の痺れが引くと急いで武器を構える

私達が準備を終えるのを待っていた・・・？

ミチキが前に出るとデットスポットはミチキを飛び越え、剣を持っていない腕をふるいオグとムツミを吹き飛ばした

「オグームツミー」

ハヤシが2人に駆け寄る

デットスポットはそのまま後ろのミチキに剣を振るう。ミチキはグレードソードの腹で防御するが・・・

「ぐつ！うううううう・・・」

デットスポットの力を受けきれずに腕の骨を折ってしまった。デットスポットは数歩横に避け剣を構える。デットスポットの目は私を見ているような気がした

「メリィー！」

ハヤシの声で我に帰る。オグとムツミは！・・・良かった生きている。私は2人とミ

チキにヒールをする

デットスポットは3人が立ち上がるのを確認するとハヤシ達の所へ

「うわああああ」「ぐああああ」「キヤアアア」

ハヤシ達3人が吹き飛ばされる。デットスポットは離れて剣を構える・・・顔を私に向けながら・・・

私は分かってしまった。デットスポットに遊ばれていることを

そこからは地獄だった・・・回復しても傷つき倒れる仲間・・・回復しても無意味だがやめることはできなかった。やめると私達は殺される。

途中節約のためキュアに切り替えていたが・・・

「あ・・・・・・・・・・」

治癒魔法が使えない・・・MPが・・・なくなつた・・・まだオグとムツミがまだなのに！

「ご・・・めん・・・ごめん・・・なさい、わたし・・・魔法が・・・魔法が・・・」

私の下で倒れているムツミの顔に涙が落ちる。ムツミは笑つた

「グオオオオオオ！」

いつまでたつても立ち上がってくる様子がないため、デットスポットが唸りながら近づく・・・もう終わりみたいだ

「ハヤシ！どうにかする！逃げる！」

ミチキが、デットスポットと切り結ぶ。しかし、力に差があるので吹き飛ばされる  
「いや！逃げるならみんなで！」

私は叫ぶ。みんなで生き残らないと意味がない！

「いいから、早く！」

ハヤシはムツミの団章を引きちぎると私の手を取り走り出した

「ミチキ！オグ！ムツミ！離して！一緒に逃げるの！」

「はっ！」

いつの間にか寝てしまったようだ

寝汗もかいてる・・・気持ち悪い

「久しぶりに見たな・・・」

多分、あの時のオークのウォークライを聞いたときに記憶のフラッシュバックがあったからだ・・・

最近は見ることなく落ち着いてきたが、帰ってきた直後は全くダメだった・・・

「シオリ……」

私は所属したパーティーリーダーの名前を呟く。

オリオン鉦山から帰ってきた私の状態を知っている義勇兵は多く、パーティーに入っても腫れ物を扱うようにされ居心地が悪くなり抜けては別のパーティーに入るを繰り返した。最初彼女のパーティーでもそう扱われると思っていたが、全くそんな雰囲気を感じさせなかった

久しぶりにあの楽しかった時の気持ちを思い出せた気がした

「でも……」

今回のことで私のことを幻滅しただろう

それに私は神官なのに仲間を助けられなかった。見捨てて生き延びてしまった  
「う、うううううう」

私はベットで丸くなり静かに泣いた……

Meriside end

「シオリ……シオリ！」

「えっ!?!」

私を呼ぶ声で意識が呼び戻される

「シオリ大丈夫？ 帰ったばっかで疲れてるんちゃう？」

「大丈夫ですよ。ちよつと考え事を」

今私は退院したマナト達と買い物に来ている。しかし、私の頭はオリオンで聞いたメリイの過去のことを考えていた

メリイさんにあんな過去があつたなんて・・・どうしたらいいでしょうか・・・

「おい、また考え込んでるよ。気を付けろよ。財布が財布を落とすと意味ないからな」

「ランター！」

買い物は進む。しかし、私は上の空・・・

「これ前使ってたけどこつちの方が安いからこつちをかうね」

「ええ・・・」

「これって他の義勇兵が持っていたけど何に使うの？」

「ええ・・・」

買い物は続く・・・

「ちよつと休憩しようか」

マナトの提案で近くのオープンカフェで休憩する。飲み物が行き届きしばらくしてマナトが切り出した

「シオリさん悩み事があるなら相談にのるよ」

「・・・・・・・・・・」

相談・・・できない。仕方がないとはいえ仲間を見殺しにしてしまったメリイさんの慰める方法を考えているなんて。これを言ったら無関係なマナト達にメリイさんの過去を教えることになる・・・

「俺やみんなはシオリさんのパーティーで仲間だ。悩んでいるのなら助けたい」

「俺達に相談できることがあつたら・・・」

「そやでシオリはうちらに色々してくれるけど私らは何もできてへん」

「その・・・もしプライベートなことだつたら・・・」

「フン、今なら聞いてやらなくもない」

「あの・・・無理しないで・・・言えばスッキリするかも・・・」

「そやで・・・みんな・・・ごめんなさい。仲間なのに無関係と決めつけて・・・」

「・・・・・・・・・・実は・・・」



## 14話

本当は言いふらしてはいけけないのだが私はマナト達にメリイさんのことを相談した

「私のパーティーとメリイさんの問題なんでマナト達にはあまり関わりがないと言  
か……どうしようか考えちゃって……」

「はあくつまんね話だなあ」

「おい」

ため息を吐くランタにハルヒロが突っ込む

「だってそうだろ。メリイつてやつがウジウジして勝手に抜けてるってことだろ？パー  
ティーを仲間扱いしてないってことじゃんか」

「それは……」

ランタは率直に思ったことを口にする。でも私はそう思えない

「うう……」

「シホル？」

ユメがシホルを気にかける。私もそちらを見た

「もし……あの時、マナトくんが死んじやったら……私……メリイさんみたいになっ

「ちやうかも」

「シホルが目には涙をため、声を震わしながら言う。最悪の結果を想像してしまつたらしい」

「シオリさん、パーティーとメリイさんのことはわかつたよ。でもシオリさんはどうしたいんだい？」

「マナトが聞く」

「メリイさんにはパーティーに……」

「そうじゃないよね。シオリさんの本当の気持ちをメリイさんに伝えるんだ」  
「私の本当の気持ち？」

「トントン」

「メリイさん……いますか？」

「マナト達と会つた翌日、私はメリイさんの借宿の前にいた」

扉を何度かノックしたが、返事もなく帰ろうとすると

「シオリ……?」

メリイさんが出てきた

「良かった。最近シェリーの酒場で見かけなかったんで心配していたんです」

「……うん」

元気がない

「あの……もしよかったら気分転換に外歩きませんか?」

私とメリイさんは外を歩く。特に行き場所は決めていない。しばらく歩くと広場に  
着いた。広場のベンチに座り、お互い何も喋らずにいた。夕方に近づき人がまばらに  
なってきた時メリイさんが小さい声で言った

「ごめんなさい。私……パーティーから抜ける……」

「え……何で……?」

「ごめんなさい……」

メリイさんは謝るだけで理由を言ってくれなかった。だけど私はメリイさんが過去  
に捕らわれていることを知っている。仲間になって日も浅いけど私はメリイさんを失  
いたくない。助けたい。前を向いて欲しい

「あの……聞いてください。私、メリイさんの過去を知りました」

「……っ！」

メリイさんが悲しい目をして反応する

「ごめんなさい……嫌でしたよね。でも聞いて欲しいんです。私は元々義勇兵見習い同士のパーティーを組む予定でした。でも私を含めて7人いて、私が抜けて別の街にあるネクロマンサーギルドに入りました。みんなには相談は全くしていませんが……今は合流できました。多分心のどこかで私や誰かを見捨てることを嫌がっていたんだと思います。私はメリイさんのように仲間を3人失ったことはありません。でもあの時の……アデイさんがオークにやられそうになったとき心が張り裂けそうになりました。1人でこんななのにメリイさんは3倍苦しいと思うと……どんな形にしろ私は仲間を失いたくないです。メリイさん、マナト達6人、アデイさん……私の大切な仲間です……仲間なんです。メリイさん……私を置いていかないでください」

途中から涙が溢れてきた。メリイさんは何も言わない

時間だけが過ぎていく……空が暗くなり夜になってメリイさんは口を開いた

「別に……あなたに知られても……あまり嫌じゃなかった……」

メリイさんは立つ

「あ……」

私もつられて立つ

「その・・・まだ・・・待ってて」

メリイさんは歩き出す。私はメリイさんの数歩後ろを歩く。そのままメリイさんの借宿の前まで歩いた

「・・・また」

「うん・・・」

私はメリイさんを待った。途中、遠征の日取りが決まり準備に追われたがシェリーの酒場には必ず顔を出した

トントン

メリイさんを別れて何日目かの夜。私の部屋に誰かが訪ねてきた

「こんな夜どちらですか？」

「・・・私」

メリイさんだ。私は急いで部屋に招き入れ椅子に座ってもらった

「私は・・・仲間を見殺しにした・・・の、そんな神官でも・・・いいの?」

お互い向かい合って座り、長い時間経ってメリイさんが口を開いた

「メリイさんがいいんです。メリイさんじゃなきや嫌なんです」

私は答えた。するとメリイさんは泣き出し

「私も・・・あなたがいい・・・」

そう言ってくれた。私はメリイさんの元に行き胸を貸した。メリイさんが寄りかかってくる。私の方が体格的に小さかったので重さに負けて一緒に倒れてしまった。それでもメリイさんは泣き続け、私もつられて泣いてしまった

「ごめんなさい。もう帰るわ」

泣き止み、少し赤くなったメリイさんは帰ろうとする

「あの・・・もう夜も遅いので泊まりませんか?メリイさんが良ければですけど・・・」

「メリイ」

「えっ!?!」

「敬語もさん付けもいらさない」

「・・・うん。メリイ夜も遅いし泊まらない?」

「・・・うん。泊まる」

私とメリイは一緒のベッドで寝た。私が眠っているとメリイが抱きついてきて目が覚めた。抱き返すと私に回した手が一瞬強くなった気がした・・・

## 15話

「ん．．．」

朝日で目が覚めた。一緒に寝ていたメリイがいない．．．

「起きた？」

メリイがコップを片手に近づいてきた

「白湯を作ろうと思ったんだけど．．．ここつて釜戸がないんだね」

コップを受け取り、中身の水を飲んだ。もちろんこの水は昨日の夜に煮沸してある

「炊事場がない代わりに部屋が広いんだ」

「不便じゃない？」

「ここにきてまともに料理したことないから．．．」

「教えてあげようか？」

「できるかな」

頭をかく

「簡単よ」

「うん。じゃあ教えて」



朝食に買い置きしているパンを食べながら

「すごい変わったねメリイ」

「・・・怖かったんだと思う。一緒になっても、あの時のように別れるのが・・・でもこんなにも想ってくれる人がいることが分かったから・・・吹っ切れたかと言われるとまだだと思う。でもシオリがいるから前を向くわ」

前のクールなメリイも良かったけど、今の明るいメリイの方が好き

「毎日冷たいパンじゃいやにならないの？」

「うーん」

「それに服もネクロマンサー系統の服しかないの？」

「服かく高いからあまり買わないかな？それにネクロマンサーを有名にしたいから他の服は気にしてない」

「もう女の子なんだから気にしなさい」

ちよつと、いや、かなりお節介な人だったんだねメリイ

その後、服と一緒に買いに行ったり色々な物を見て回った。メリイの借宿へ付き添っている時に私は思い出した

「あ、実は今日遠征隊の人たちとシェリーの酒場で打ち合わせるんだけどメリイもどう？」

「うん。出る」

「私じゃ知らないことも多いし。メリイが出てくれてうれしい」

メリイと別れ私は時間まで時間を潰した

ハルヒロside

「うち酒場なんて初めてや」

「すごい賑やか・・・」

ユメとシホルは初めての酒場デビューに戸惑っている。今俺達は義勇兵見習い復帰のお祝いのためシェリーの酒場に来ている

「おいおい、あんまりキョロキョロするなよ。おのぼりじゃあねんだから」

「そんなんゆうてもくランタ達はきたことあるん？」

「俺はある」

「僕はランタくんに連れられて」

「俺も」

「情報収集でたまに」

「ん〜うちとシホルだけ仲間外れやん」

ユメがむくれる

「そんなことよりまずは酒だ。そこの巨乳のおねえさ〜ん。ビール6つ〜」

「あ、うちお酒あれやし他のにする」

「私も」

「んだよ。ノリが悪いなあ」

飲み物が行き渡った所で

「「「「かんば〜い」」」」」

「このレモネードむっちやおいしい」

「うん」

「じゃんじゃん頼もうぜ」

「これ前食べたけどおいしかったよ」

乾杯も終わり、メニューを片手に何を頼もうか悩んでいると

「あ、みんなごめん。ちよつと席外す」

「ん〜どうした？」

「うん。療養所にいる時に見舞いに来てくれた人がいたからちよつと挨拶。すぐ戻るか

ら」

そう言うのとマナトは席を立ち鎧を着た人の所に行き、二、三話すと2階の方にながっていった

「おいおい、ちゃんと戻って来るのか」

ランタはビールを飲みながら呟く

「あ、あれシオリちゃん？シオリ〜！」

ユメが手を振る。酒場の入り口に目を向けるとシオリがこつちに手を振っている。すると手で「ごめん」とサインすると別のテーブルに行ってしまった

「あれってシオリのパーティーちゃん？」

シオリの座ったテーブルには女性3人に男性1人がおり、シオリと話している

5人で座るにしてはテーブルが大きいような？

「後から人が来るのかなあ」

「なんだあいつハーレムじゃねえか」

ランタはパーティーの男性が気にくわないようだ

「あ、あれレンジくんじゃ」

モグゾーの声で入り口に目線に戻すとレンジとアダチを見つけた

「うはあ、あいつらド派手だな・・・」

まったくだ。本当にド派手すぎる。銀髪だけでも人目を引くのに、レンジは鎧の上に黒いファー付の陣羽織みたいなものを着ている。背に背負っている剣も高そうだ。アダチも黒い長衣も光沢があり、高そうな杖を持っている

レンジは辺りを見渡すとシオリ達の席に行き、アダチが一声かけるとテーブルに座った

「おいおい、何でレンジ達と一緒に座ってるんだよ」

「シオリさん達も僕らと一緒にでお祝いかも・・・」

「んなのあいつが来るわけねーだろ」

「それじゃあ何だよ」

「そりゃああれだ、あれ」

「みんなどうしたの？」

俺達がシオリとレンジについて話しているとマナトが戻ってきた

「シオリのパーティーとレンジ達が一緒にテーブルに座ったから何でだろうって」

「ああ、依頼の打ち合わせだよ」

シオリ達の方を見るとマナトと一緒にいた人が近づき声をかけると一緒に2階に上がって行ってしまった

「依頼？マナト何で知ってるの？」

「うん。その事でみんなに相談があるんだ」

マナトは席に座りビールを一口飲んだ。何だか様になって格好いい

「さっき俺が挨拶しに行った人・・・オリオンのシノハラさんと言ってこのシェリーの酒場を拠点にしているクランの団長なんだ」

「くらんって?」

「クランっていうのは依頼や共通の目標を掲げているパーティー同士が結成するグループなんだ。俺や神官の使う光の護法へプロテクションっていう強化魔法は6人までしか対象にできない。義勇兵になったら依頼が受けられるようになるんだけど、依頼によつては6人じゃ対処できないことがあるから、結束を図るために作られたんだ」

「あーシオリが義勇兵になって欲しいってのも」

「うん。俺達とクランを結成するために言っているんだ」

ユメは「へ〜」とか「ほ〜」と言って感心している。多分だけどシオリは別れた時から知っていたんじゃないかと思う

「話を戻すね。そのオリオンっていうクランの団長のササハラさんから依頼に同行しないかと誘われたんだ」

「えっ?でも俺達見習い・・・」

さつきマナトが言っていたように正式な義勇兵にならないと依頼は受けられないは

ずだ

「うん。普通だったら俺達義勇兵見習いは依頼を受けることはできないけど今回の依頼はクランに依頼が来ているんだ。だから、一時的にオリオンに所属して同行しないかって」

「依頼ってどんなことするんだよ？」

ランタが依頼について質問する

「依頼はここオルタナ北門から北西にあるサイリン鉱山周辺のコボルトとオークの拠点の攻撃」

「コボルト？オーク？」

俺達はマナトからコボルト、オークについて教えてもらった。正直レッサーコボルトはどうかかと思うけど普通のやつやオーク、ましてやエルダーコボルトに勝てるとは思えない

「うん。でもシオリさん達が出会ったのはレッサーコボルトとオークと上位オークだからレッサーコボルトならどうかかと思う。それに今回の同行のメインは勉強なんだ」

「シオリ達が出会ったって？勉強？」

「どうやら買い出し前に受けていた依頼はレンジ達とサイリン鉱山の調査でその時に

オークや上位オークと戦って勝ったみたいだ

「はつきり言つて俺達とシオリさんには大きな差がある。俺はそのせいでみんなに危険な目に会わせてしまった・・・」

「そんな・・・マナトくんは悪くないです」

「・・・うん。僕は戦士なのにみんなを守ることを考えずに逃げちやつたから」

「そうだ、マナトが入院している時に俺やランタ、モグゾーは酒場や自分のギルドで情報収集して自分のクラスの役割を再確認したんだ

「だから俺への勉強とみんなのレベルアップにもいいと思つて、先輩義勇兵の戦いを見るだけでも価値がある」

マナトがみんなを見渡す

「この依頼には俺達にも報酬が出る。みんなで3ゴールド30シルバーだ」

「[[[[えっ?]]]]」

今マナトは何て言つた? 3ゴールド? そんな大金もらえるの?

「依頼は1日ではなく最長20日を予定しているからその準備をしないといけない。その費用を前借りするからおそらく報酬は2ゴールド50シルバー位になる」

2ゴールド50シルバー? それでも1人41シルバーもらえるじゃないか団章も買える



「この依頼を受けて成功させれば団章も買えるけど俺にはやりたいことがある・・・」  
「やりたいこと？」

「あの時のゴブリン数が多すぎじゃなかったかい？」

マナトは俺達に教えてくれた。あの時のゴブリン達は上位ゴブリンに従っていたと

「・・・挫折させられてそのまま義勇兵になるのも悔しい。だから今回の報酬で装備やスキルを覚えて上位ゴブリンを倒して義勇兵になりたいと俺はそう思う」

マナトはみんなを見渡す

「・・・確かにやられたままなんて俺達らしくもねえ。何なら今からでも構わねえ」

「今からやとやられるやろ」

「うん。悔しい」

「私も嫌」

「マナトやろう」

みんな飲み物を持ち、打ち鳴らす

「」「」「打倒！上位ゴブリン！」「」「」

ハルヒロside end

## 16話

私のパーティーとレンジ達はオリオンのシノハラさんに案内されシエリーの酒場2階に移動した

今回の遠征隊にはオリオンの人達がメインに参加する。メリイはオリオンに一時的に参加したが例の件で抜けてしまっている

私はメリイの方をちらりと見る・・・大丈夫そうだ

前に私が案内された場所まで連れられると長机がいくつか並べられ大人数が座れるようになっていた

ハヤシさんが見当たらないなあ・・・

どうやらハヤシさんはメリイに顔を会わせづらいのか、打ち合わせには欠席をしているようだ。

あれ？あの小さい子もしかしてネクロマンサー？

並べられた長机に座るオリオンの人達とは違う6人の男女。その中にネクロマンサーの格好をした男の子がいた。ただ目がどんよりしていて全体的な雰囲気がい

私達が席に座り、飲み物が配られ打ち合わせが始まった

まずは簡単な自己紹介。そしてあの6人の番になった。最初に黒い鎧を着た戦士が立ち上がった

「俺はソウマ。このパーティーのリーダーをやっている。クラスは武士」

「あれがソウマ……」

ダイさんソウマさんのこと知ってる？

私はダイさんに小声で話かけた

「ダイさん、ダイさん、ソウマさんって有名何ですか？」

「お前、ソウマのこと知らないのかよ」

ソウマさんは義勇兵の中で一番有名な人らしい。それに有名なのを鼻にかけずパーティーが困っていれば助け、命を大事にする人格者だそうだ

そして彼のクラス武士、一見戦士と変わらない感じだが刀という剣を使い素早い攻撃をするクラスらしい

そして私気が気になっていたネクロマンサーの男の子の番になった

「……ビングゴ。ネクロマンサー。それでこの子はゼンマイ。僕が作った」

「……よろしく」

ゼンマイと呼ばれた男性が鳴くような声で挨拶する

やっぱりネクロマンサーだ。初めて同業者に会っちゃった。でも、ゼンマイを「作っ

た?」ゾンビクリエイトとはまた違う魔法?

打ち合わせが終わり私はビンゴくと話をしたかったが、ソウマさん達とさっさと帰ってしまった

「この後どうする? 私らは帰るけど?」

「晩御飯がまだなんで食べて帰ります」

「私もまだだからここで食べる」

アデイさん達は帰り、私とメリイが残った

夜も更けてきて酒場のテーブルは埋まってしまうている。私達はカウンターに座った

「何飲む?」

メリイがお酒を勧めてくる。でも私はお酒は飲めない

「お酒飲めないから果実水を」

「ワインとかミードもダメなの?」

「飲んだことないからわかんない」

ミードとは蜂蜜酒のことだ

試しにミードを頼み飲む。甘さの中にほのかに酸味がある味だ。アルコールの嫌な風味もあまり感じない

「甘くて酸味があつていけるかも」

「酸味？」

メリイが私のミードを取り一口

「ああ、ラズベリーが入ってるのか・・・」

料理が並べられ談笑しながら食事をしていると

「シオリさんちよつといいかい？」

後ろを見るとシノハラさんがいた

「その様子だとメリイとはうまくいつているようですね」

シノハラさんは笑顔で話しかける

「はい。大切な仲間です」

「メリイもすいません。結果的にはよくなりましたが、プライベートな話を勝手に話し

てしまって・・・」

「いえ、おかげで私は前を向けました」

「ハヤシもシオリさんみたいに頑張つて欲しいですがね・・・」

「やつぱりあの場にハヤシさんが見当たらなかったのは・・・」

メリイの顔に影がさす

やつぱり、ハヤシさんと3人のことはどこかで決着をつけないといけない。もしそう

なればサイリン鉱山内に置いてきた遺体……今はおそらくゾンビになっている3人の浄化が必要不可欠だ

でもそうなるとデットスポットの遭遇の危険が……

メリイのトラウマの元のデットスポット。やつもどうにかしないといけない。幸い今回は中に入らないのでやつと出会う可能性は低いだろう

「ええ……それとそうともう一つ話があるのですが……」

シノハラさんの話には私は驚かされた……

「ほらほら、盗賊なんだからもつと動いて攪乱させる」

「ハルヒロ、挟み撃ちで行くぞ」

「うん」

ハルヒロとランタがアデイさんを挟んで攻撃する。しかし、シールドで防御されたり時には避けられたりして攻撃が当たらない

「くそ、俺様の攻撃が当たらないなんて・・・今だ！アンガー！」

ハルヒロがアデイさんに果敢に斬りかかって自分に意識が向いていないのが勝機と  
思いアンガーで突っ込んでくる

「ほい」

「えっ？ちよつとランタ！」

「避ける！」

アデイさんが横に避け射線上にいたハルヒロにアンガーが当たる

「いって〜」

「ちゃんと避けるよ」

「無理ゆうな」

「戦いはまだ終わってないし、敵は待つてくれない」

ハルヒロとランタが言い合っている間にランタの後ろにまわったアデイさんが木剣  
の腹でランタ頭を叩く

「痛って〜」

「はい。ハルヒロも倒れたらすぐに起きる」

アデイさんが胸に木剣を突き刺す

「はい。2人とも終わり。ランタは攻撃が単純すぎだし、奇襲もあんな大声だとモロバ

レ。ハルヒロはもつと考えなさい」

「でも何でスキル名を叫んでいるの？暗黒騎士のスキルは魔法と一緒に言葉に出さないといけないの？」

「技は名前を言うのが基本って言ってた。ランタのアホが勝手にやってるんや」

私の疑問にユメが答える。ハルヒロとランタがアデイさんと戦っているのに呑気にユメと喋っているのはこれが訓練でやっているからだ

「まさかマナト達も参加するとは思いませんでした」

「俺達もたまたまあそこについてシノハラさんに誘われたんだ」

「かなり報酬もいいし。成功させればすぐに義勇兵になれるね」

「そのことなんだけど・・・」

私は酒場での話し合いの結果を聞かされる

「そっか・・・目標なんだね」

「うん。挫折したまま義勇兵になるのはダメだと俺達は思っている。あの時上位ゴブリンなんて見ている暇もなかったからどのゴブリンかもわからない。でも俺達はやると決めたんだ」

「でもダムローに戻ったとしても1ヶ月以上経っていますし、もういないんじや」

上位ゴブリンを探してダムロー北側に行くのも危険すぎる



「うん。だから同じようにゴブリンを狩り続けて上位ゴブリンが来るまで待つ」

「それってかなり危険じゃ・・・」

「色んな人達に聞いてみたら規模にもよるけどあそこで1週間位狩り続けたら上位ゴブリンが出てくるみたい」

マナト達はかなり本気だ

「分かりました。もし危なそうなら私も同行します」

「私も、シオリを守らなきゃ」

メリイも来てくれるみたいだ

「メリイありがとう」

「どうもー!」

モグゾーの大声で視線を戻す。モグゾーのレイジブローを放ったようだがアディさんは距離を取り射程外に離れてしまっている

「威力はすごいけど苦し紛れの攻撃は避けられるわ。もっと相手を見て攻撃に緩急をつけて」

アディさんが突っ込んでくる。アディさんの手数にモグゾーは防戦一方だ

「ぬー!」

モグゾーの横風ぎ。しかしシールドでうまく剣先を反らし空ぶかせる

「ほい」

横風ぎでできたスキに合わせて首を木剣で斬る。危険なのでかなり手加減された攻撃だ

「はい。終わりつと。体格任せの攻撃だと私のようなのが相手だとやられちゃうわよ。さつきも言っただけ攻撃の緩急やバリエーションを増やしなさい」

「はい」

ハルヒロ達は肩で息をしていたのにアデイさんはそこまで呼吸は乱れていない。そういう所でも差はあるみたいだ

「ちよつと休憩したら次は3人で行くわよ。そうね、もし勝つことができたら胸を揉ませてあげる」

アデイさんがシホルと同じ位の胸をわざとらしく強調させる。大きい胸がさらに大きくなる

「マジか!」

ランタが食いつく。2人は顔を赤くしているが目線は胸にいつている。まあ3人がどれだけ頑張ってもアデイさんに勝つのは無理だ

「マナトこつちにこい!シホル並みの巨乳が揉めるぞ!」

「・・・俺は遠慮しとくよ」

マナトは胸興味ないんだあと思い見るとシホルがマナトの服を見えないように挿んでいた

なるほど、なるほど、シホルはマナトのことを

「ランタサイテー」

「うるせ、ちつぱい。ちつぱいお前に果てしない男の子欲望は理解できまい」

「またちつぱいって言う！」

ユメの胸が小さいなら私の胸は・・・

私は胸が小さい方のユメやステラさんと比べても確実に小さい。そんな気持ちを感じ取ったのかメリイが肩に手を置いてきた

「ありがとメリイ」

「まあ頑張つて？」

あの後、3人は何度挑戦したがアデイさんには勝てなかった

「ホント男つていややわ〜」

「ほんとですわね」

## 17話

「それでは明後日よろしく願います」

「ああ」

今回の遠征では前に出て戦闘を行わなければならない。ダイさんも前衛ができなくもないがやはり心もとない。そのため戦士のトウジヨウさんにパーティーの参加をお願いしたところだ

「それと、もしよければなんですけど今後パーティーとして参加していただきたいのですけど……」

「すまないが先約があつてね。来月以降はパーティー参加は無理なんだ」

「そうですか……」

「パーティーメンバーなら新人をいれるのはどうだい？」

「新人ですか？」

「ああ、ブリちゃんに言っておけば新人が来たときは連絡くれるよ。それにここに来たばかりは右も左も分からないだろうし助けにもなる」

私もロジエさんがいてくれたから今があるしそれもいいかも。トウジヨウさんと別

れたあとレッドムーン事務所に行き、新人の話を所長にした

「あたしはオススメしないわね。だって使えるかどうかわからないし」

「でも色々教えてあげれば・・・」

「ここオルタナに新人⇨私達のような記憶のない人達がくるタイミミングはランダムだ。しかし、来る前兆は判るらしく、新人が欲しい場合は連絡が行くようになってる

「ここつちから勧誘するより、入りたいって子を待てばいいのに。ほとんどの場合はそつちの方が使えるし」

「でもそこまで私達は有名でもないですし」

「今回のことでもそこそこ覚えられているわよ」

サイリン鉾山周辺の調査で上位オークを倒したことで、新人パーティー内で私はそれなりに株を上げたようだ。中にはレンジ達のパーティーがいたおかげという人もいるので名前を覚えられた程度の認識でいいとのことだが・・・

まあ実際に上位オークはレンジが1人で倒したのだから本当のことだけどね

「まあ、連絡はルールだからするけどちゃんと見なさいよ」

「分かっていますよ。ちゃんと教えて、ちゃんと守ります」

「それ、赤ちゃんじゃないんだから。何でもやってあげてたら使えない子になるの。パーティーに貢献して欲しい子に育てたいなら厳しく躾ないと」

「えくでも・・・」

「でも何でもないの。まあ教え方は人それぞれだからあたしがいうことじゃないわね。まあ暇だったら躰について相談に乗ってあげるわ」

「分からないことがあればお願いします」

これで新人が来たら連絡は来るようになった。実際に何人入るかは未定だが、アデイさんとメリイに付いてきてもらってちゃんと決めよう

その後は遠征に持ち込む装備や個人用の携帯食料の買い物をした

ダイさん、ステラさんは装備のメンテナンスを中心に

アデイさんは剣とシールドの予備をいくつか

メリイは動きに邪魔にならない程度の厚手の服を

私は何も買わなかった。だってほとんど前にいかないし買っても意味がない気がする

「そんなんだから同じような服しか買わないのよ」

メリイに怒られた

遠征の朝、マナト達の借宿に集合し市場で2〜3日程度の携帯食料を受けとる。残り  
の日数の食料はガナー口に引かせて運ぶ

「これからしばらく携帯食料やと飽きてしまいうや」

「大丈夫ですよ。ガナー口に積んでいる分は私達が持つような物じゃなくて保存の効く  
根野菜とか燻製肉ですから。それに移動しながら野草や動物を取ったりするので意外  
に新鮮な物を食べられますよ」

「へー。でもうち狩人やのに弓苦手やし手伝えへんかも」

「だったら「早目」なんてどうです？」

ステラさんが話に入ってくる

「早目？」

「弓の命中率を上げるスキルなんだけど討伐以外に狩りでも使えるわよ」

「へ〜」

「あとは罠に関するスキルとか。獲物だけじゃなく待ち伏せにも使えるから便利よ」

ユメはステラさんの狩人スキル講習に聞き入っている。これじゃあこれ渡せないね

「シホル、これシホルとユメの分のドライフルーツ」

私はシホルにドライフルーツ詰め合わせの袋を2つ渡す

「えっ、どうして」

「こういうのを休憩中に食べるといい気晴らしになっていいよ」

「ありがとう」

「いくな〜ユメとシホルだけ」

「ランタ達の分もあるよ」

「へへっ、やった」

ランタ達にもドライフルーツを渡し集合場所であるシエリーの酒場に移動した

シエリーの酒場にはすでにソウマさんのパーティー到着していた。私はピングくん  
と話しかかったが、ソウマさんを含む全員が他の義勇兵に囲まれていて近づけない

まあ、これから一緒ですからチャンスはいくらでもありますから・・・

そうこうしているうちに出発時間になり、サイリン鉱山へ移動を開始した

人数が多いのとガナードとの随伴で移動速度は前回と比べてかなり遅い。おそらく  
目的地に着くのは2、3日かかるだろう



ハルヒロ side

「どうだい？初めての長期の移動は？」

移動を開始して何度目かの休憩の時オリオンの団員の人が話しかけてきた

「あ、はい。何か思つてより移動が遅いんですね」

「敵に襲われないように警戒しながら移動しているからね」

「こんな大人数に襲いかかるやつなんているのかよ。さつさといけばいいんだよ」

ランタがいう

「襲われるのではなく付きまとわれるのが困るんだ。それに……」

俺達に行軍について説明しようとしたが、前にいた人が小走りで走つて来るのが見えた

「この奥にコボルトの集団がいたこちらにはまだ気づいていない」

「よし。ハルヒロくんコボルトとは戦つたことがなかったんだよね。いい機会だから戦つてみようか」

俺とランタとモグゾーの3人は団員さんと前の方に移動した。物陰から確認すると犬頭で二足歩行する生物が何匹か見える

「君たちには1体受け持つてもらおうよ。大丈夫、ゴブリンを倒せるならコボルトも簡単

だ」

各自配置につき掛け声と共に突っ込む。同時に走り出した場合、軽装の俺が1番最初にコボルトの元にたどり着く

「ギャン！」

急な襲撃で驚いているコボルトの横をすり抜け横腹を切りつける

「おらっ！」

攻撃を受け怯んでいるところをランタがロングソードで一閃し倒す

「よっしやー」

「新人、1匹そっちに行っただぞ」

一緒に戦っている誰かの声が聞こえた。声のする方を見るとコボルトが1匹こっちに走ってくる

切りかかってくるコボルトの攻撃を避けダガーで切る

「うわっ」

コボルトは攻撃を避けて組ついてきた

「ハルヒロ！」「ハルヒロくん!」

モグゾーがグレートソードでコボルト吹き飛ばそうとするが後ろに飛んで避けられた

「サンキューモグゾー」

モグゾーはそのままコボルトに攻撃を仕掛けるが右へ左に飛んで避ける。ゴブリンと違ってコボルトは瞬発力が高い

俺はコボルトの後ろに回り、コボルトが飛んで着地したタイミングで切りつける

「どうもー!」

モグゾーのレイジブローがコボルトを斬り倒す

「ハルヒロくん大丈夫だった?」

モグゾーが気遣ってくれる

「大丈夫。ちよつとヒヤッてしたけど」

俺達は倒したコボルトの死骸の元に膝をつく

「こいつの武器とか防具ってボロいなあ。鼻に付けてるのは銀貨か」

「こいつはレッサーコボルトと言ってコボルトの中では最下級なんだ。そしてこの鼻についでるのがタリスマン」

団員さんが説明してくれる

「ゴブリン袋みたいなのは持っていないのですね」

「コボルトだからね。普通のコボルトならもっといいのをつけてるよ。はい」

団員さんはコボルトからタリスマンを取ると俺に渡してくる

「えっ、こういうのは山分けじゃ？」

「んっ？遠征中に倒したモンスターの身ぐるみは倒したパーティーのものだったはずだけど？」

「聞いてないです」

「多分君たちが無茶をしないようにわざと言っていないなかったようだね。教えちゃったけど無茶して死んだら元もこもないから気を付けるように」

俺達は残りのコボルトのタリスマンを剥いでみんなの元に戻った。その後もゴブリンやコボルトとの遭遇戦に積極的に参加しつつ3日かけてサイリン鉱山に到着した。

ハルヒロside           end

移動中特に大きな問題は発生しなかった。何かあったとすればマナト達のパーティーがゴブリンやコボルトの遭遇戦に積極的に参加していると聞いた程度だ

キャンプ予定地に到着して、シノハラさんの指示の元、周囲の安全確認班、前回見つけた拠点の確認班に別れ調査を開始した

「うわゝ結構すごいことになってますね」

前回見たときは木の柵で覆っている程度だったが、今は柵が木の板の壁になり、両端に矢倉が立っている

「これじゃあ、中の様子はわからないですねえ」

「でも、これだけの物を作れるとなると相当な人数がいることに間違いない」

その後も周辺の調査を行い会議の結果、明日攻撃することになった

「ビンゴくんちよつといいですか?」

夕飯の時、私はビンゴくんに話かけた

「・・・」

ビンゴくんはこちらを一瞥して食事に戻る

「私同じネクロマンサーなんですよ〜」

「ゼンマイさんを作ったって言ってましたけどネクロマンサーの魔法か何かですか?」

私は色々と話しかけたがビンゴくんは無視する

1番最初のメリイみたいだ・・・

「え〜と、シオリさん?」

私が振り向くとソウマさんがいた

「ごめんね。ビンゴは誰にでもそんななんだ。こらビンゴ。初対面とはいえ無視はよくないぞ」

ソウマさんに怒られてしぶしぶといった感じでビンゴくんはこちらを向く

「・・・あまり話しかけないで」

「こらっ！」

ビンゴくんと話すにはもうちよつと仲良くなる必要があるみたい・・・

「それじゃあ。ビンゴくんもまたね」

「ああ、ちよつと待って」

去ろうとしたらソウマさんに呼び止められる

「確か君もビンゴと一緒にネクロマンサーなんだよね。ブリちゃんから聞いたけど死者の蘇生ができるみたいだけどどこまでできるんだい？」

「えっ?」

ソウマさんが質問した時、ビンゴくんや近くにいた同じパーティーの皆が私を見ていたことに気づいた

えっ? どういうこと? 死者蘇生にそんな興味あるの?

「・・・魂を肉体に戻すまでですけど・・・」

「そうか・・・変な質問をしてごめんね」

「はあ・・・」

ソウマさんからは落胆を感じた。何で死者蘇生のことを聞きたかったのか聞きたいが聞けるような感じでもない。私は気になりながらも皆の元に戻った。テントにはもうメリイが入っていた

「あ、シオリどこ行ってたの」

「ビンゴくんの所に行ってた。無視されたけど」

「同じネクロマンサーだから？」

「ここに来て初めての同業者だからね。でも無視された」

「ふうん。明日は忙しくなるし早く寝よ」

「うん」

明日は拠点攻撃、誰も死にませんように・・・

## 18話

マナト side

昨日の拠点への調査で出入り口は3ヶ所で門などの侵入者を拒む設備はなかった。その事により3班に別れ各出入口に同時に攻撃する事になった

「それでは各班の組分けを発表する」

俺達、シオリさん、レンジの各パーティーは別々の班となった

「マナト、大丈夫？」

「うん？」

ハルヒロが話かけてきた

「ハルヒロあまり喋らない方がいい」

「いや、すごい緊張してる顔してたし」

「そう？」

知らない間に緊張していたようだ。仕方がない。だって今俺達は拠点前の茂みに隠れているから。俺は深呼吸をしながらここに来るまでに見たオークを思い出す。シノハラさんに聞いていた通りの見た目だが想像以上に大きかった。あんなのに攻撃され



たら死んでしまう

いや、ゴブリンやコボルトに攻撃されても死ぬんだけど・・・

あのオークは睡魔の幻影へスリーピーシャドーで眠らされた後、シオリさんの魔法で倒した。その後、魔法を唱えオークに触れると動きだしても驚いた

「狼煙が」

空を見ると狼煙が上がっている。オーク達にも気づかれたが突撃の時間だ。俺は矢避けの盾を持つ指に力を込める

「行くぞー！」

班のリーダーの声で俺達は走り出す。櫓にはレッサーコボルトがいたようだが数が少ない。盾を掲げていたが盾に矢が当たる心配がなかった

拠点内に入ると数人が櫓に昇る。前衛は待ち構えていたオーク、レッサーコボルトと戦い始めた。俺は後衛の護衛と前衛の回復のために1歩引いた位置にいる

「又グウー！」

「モグゾー!?!」

ハルヒロの声の方を向くとモグゾーがオークと戦っている。俺達の中で1番力持ちのモグゾーが押し負けている

「グルッシュユー！」

オークは手に持ったメイスでモグゾーを攻撃する。モグゾーは何とか耐えているが持ちそうにない

「マリク・エム・パルク」

シホルの魔法の矢（マジックアロー）で援護するが・・・効いていない

「くうっ！」「オラッ！」

ハルヒロ、ランタがモグゾーを助けるために攻撃するが鎧や兜に阻まれ有効打が決められない

「ハルヒロ！ランタ！少しだけ頼む」

「うん」「おう！」

俺はハルヒロとランタにオークの気を引いて貰っている間にモグゾーを回復させる

「ごめん。マナトくん」

「大丈夫？モグゾーどうにかして鎧とかの隙間を攻撃できる？それか少しだけでもいいからオークの動きを止めるだけでもいい」

「やってみる」

「2人とも！鎧の隙間とか肌を露出しているところを狙うんだ！」

「そんなこと言ったらって（てもなあ）」

どうにか攻撃できる隙を・・・

「うおおおおお！」

モグゾーが突っ込みオークとつばぜり合いをする。

「ナイスだ、モグゾー！アングー」

オークの動きが止まったのをチャンスと見てランタが憤慨突へアングーを首に向かつて打つ。しかし、オークは体を反らして突きを避ける

「ウオオオ！どうもおおお！」

体を反らしたことによりつばぜり合いに勝ったモグゾーが渾身の憤怒斬りへレイジブローでオークを倒す

「よっしゃー」

「喜ぶのはまだ早いよ。他の人の援護を！」

その後も順調にオーク、レッサーコボルトを倒していき敵の姿は見えなくなった。俺達神官は傷ついた人の治療を行った

「残りの班の援護に行くぞ」

櫓に登った少数を見張りとして置いて俺達はシオリさん達の班の援護に走った

マナト side end

「レビュー！」

オークの掛け声でゾンビクリエイトで操作しているオークにレッサーコボルト達が群がってきた。手に持っている剣を振って抵抗するが数が多い。こちらの抵抗むなしく足をズタズタにされ立てなくなり倒れる。私は最後の抵抗で手を伸ばしコボルトを掴もうとしたが、コボルトはもうすでに手の届かない場所に移動してしまった

「くっ……」

最初こそゾンビクリエイトの同士討ちは上手くいったが、上位オークの出現により対策されてしまった。ここまででモーターレイ4回にゾンビクリエイトが2回の使用

まずい……魔法力が切れちゃう……

今までの戦闘は短時間がかつ仲間がほとんど倒してくれていたので魔法力切れとは無縁だった

私ってここまで長期戦に弱かったの……

もう無駄打ちはできない。私は比較的損傷が少ないオークに最後のゾンビクリエイトを使い操作する

「1人で戦おうとしないで、もっと連携させて」

私達後衛の護衛と前衛の回復のため、近くで待機をしているメリイが私にアドバイス

する

「連携って言っても……」

「みんなから離れないように離れるときつきみたいにレッサーコボルトにやられちゃうから……」

メリイは戦場を見渡し

「まずはアデイさんとダイさんの所へ！」

見るとアデイさんとダイさんは槍を持ったオークと戦っている。私はメリイの言われた通りに援護に向かう

「アデイさん！ダイさん！ゾンビクリエイトで操作したオークがそっちに行きます」

アデイさんは私の声を聞くと後ろに飛び退く。それに入れ替わるように操作したオークを前に出す

「ブフオ！」

オークは躊躇いもなく槍を心臓に向けて突き刺す。しかし、もうすでに死んでいるので意味がない。私は突き刺さった槍を掴み抜けないようにする

「プギユ、プギユ」

オークは槍を抜こうとするが手間取っている

「ハアッ！」

その隙についてアデイさんがオークの頭部めがけ射抜へピックショットを放つ。強烈な突きがオークの顔に突き刺さりオークを倒す

「でりゃー！」

倒れたオークにダイさんが飛び乗り剣鉈で何度も切りつける。剣鉈で切りつける度オークの抵抗が弱まり動かなくなる

「シオリ、サンキュー」

「ありがとう」

アデイさん、ダイさんは礼を言うと他の人の援護に向かった

「プジュ、プビュ！」

上位オークの声でレッサーコボルトが走り寄ってくる

「1度下がらせて、ステラさん前に」

「ええ」

オークを下げるとメリイやステラさんが先頭に立って守ってくれる

「次はトウジョウウさん達の所に」

その後もメリイさんの指示の元、オークを援護に向かわせた。オークが使い物にならなくなつた時には数的に圧倒的な差が生まれていた

「ピュア、ププギユ」

「グルルル」

そして残るは上位オークと取り巻きのレッサーコボルトだけになり、上位オークはレッサーコボルトを盾に逃げようと走り出す

「ブルギューイ！」

突然上位オークが途中で立ち止まった。遠くの方から反対側から攻めていた班の一部がこつちに来てくれた。どうやら向こうは既に終わったようだ

マナト達全員が見える良かった・・・

こつちに来てくれた人達と上位オーク達を囲む

「タノム、ミノガシテクレ」

上位オークは命乞いをしてきたが、聞き入れられるわけもなくレッサーコボルトと共に倒された

「よし、正面班の援護のため少数を残して行くぞ」

まだ姿が確認できていない正面班の援護に向かったが戦闘はほぼ終わっている状態であった

「死者はなしですね」

拠点自身攻められることを想定していない作りだったのが幸いしてか死者はでない

夕食時、死者なしで拠点攻めが成功しみんな喜びが溢れている。だけど私は今日のこ  
とを思い出していた

「暗い顔をしてどうしたんだい？」

「マナト」

マナトが話かけてきた

「いつも悩んでいるね」

「ちよつと今日のことです」

マナトは座り、私が言うのを待つてくれている

「私が長期戦に弱いこと・・・まあこれは私が覚えている魔法が少なくて使用回数が少ないのが悪いんですけど・・・やっぱりもつといい魔法を覚えた方がいいのかなあ？」

マナトは拍子抜けた顔になった。そんなしような悩みかなあ

「オークを1発で倒せる魔法があるんだしいと思うのだけど・・・」

「効けば1発ですけど遠距離魔法はそれだけなんですよ」

「倒したオークを動かしたのは？」

「あれはもつと少ないです」

「シホルに相談してみる？クラスは違うけど同じ後衛だし・・・」

「そうですね」



シホルと相談したが、いまいちピンと来なかった……。そもそも私ネクロマンサーのスキル何があるか知らないじゃん。翌日以降は攻撃した拠点の破壊。周辺のオーク、コボルトの敗残兵の殲滅を行い、私達はオルタナに戻ってきた

「それじゃ、また」

みんなと別れて借宿に戻る

明日は戦利品の換金をしてみんなに分配して……

私は明日以降のスケジュールを考える。依頼が終わってもなかなか休めないのはつらい

「とりあえず今日は何も何も考えずにゆっくりしよう」

現実逃避しつつ部屋の前につくとメッセージカードが差してあった。メッセージカードには

近い内に新人が入ってくるわよ

と書かれていた

## 19話

「ふう」

私は朝早くにレッドムーン事務所に来て奥のテーブルに座った。メッセーজカードを受け取って数日、最初はメリイも付き合ってくれてたけど朝も早く申し訳なかったの  
で私一人で来ている

「前兆があるって言ってもいつ来るかわかりませんよね〜」  
「そうだけに〜」

隣のテーブルに座るキツカワが反応する

「あれ？キツカワのパーティーも新人の勧誘？」

「違うよ〜新人の視察〜」

「視察？」

知らなかったのだが、義勇兵間で新人の動向をチェックし合っているらしい。これは  
右も左も知らない新人に「色々教えてやる」「装備を整えてやる」といった優しい言葉で  
近づき支度金を巻き上げられるような詐欺行為を防ぐためでもある

「なるほど……ここにいる人達は勧誘ではなく視察で来ていたのですね」

「うちらがここに来たときも奥に沢山いたんだよ。ち・な・みにくシオリンは詐欺にも遭ってないのにどのギルドにも顔も出さないしく街でも全然見当たらないので捜索隊が組まれてました」

「えっ!?!」

それは知らなかった。視界にいる義勇兵数人がキツカワの言葉に頷いているので嘘ではないようだ。私は周りに「すいません」と謝った

「それはそうと今マナト達と一緒にいるじゃん?彼らまだ見習いだからみんな心配してるよ」

「あくマナト達はもう義勇兵になれるだけのお金は稼いでいるのですが目標があつてそれを達成するまでは団章は買わないそうです」

「へえ、そうなの?」

いつの間にか所長が私の後ろにいた

「あの子達に伝えときなさい。うちは使えるやつを遊ばせてるほど余裕はないの。さつさと買いに来ないと売らないわよって」

「あくわかりました」

「それと、お待ちかねの新人今こつちに来てるわよ」

そう伝えると所長は入り口前のカウンターに戻っていった

「いよいよですね」

「気合い入ってる」

「茶化さないでください」

キツカワや周りの人と談笑していると・・・

「は〜い、ブリちゃん連れてきたよ〜」

ひよむーの懐かしい声が事務所に響いた。顔を向けるとひよむーの後ろに25人の新人がいた

男性11人に女性14人。私の時は13人だったのに沢山来たな〜

新人達は居心地悪そうに周囲を見渡している

「それじゃあ、失礼しまーす」

所長との引き継ぎが完了してひよむーは事務所から出て行ってしまった

「ようこそあなた達歓迎するわ。あたしは当オルタナ辺境軍義勇兵団レッドムーン事務所  
の所長兼ホストのブリトニーよ。所長と読んでもいいけど、ブリちゃんでもいいわ。  
ただし、親愛を込めて呼ぶのよ? いいわね」

所長が新人達を見渡しながら言った。

私達が初めて来たときもこんな話してたっけな・・・

所長の話は続き、新人は全員見習い章と支度金10シルバーを受け取った

「おめでとう……これであんた達は今から義勇兵見習いよ。しつかり頑張つて、あたしから団章を買つて一人前になりなさい。もし困つたことがあつたら相談に乗つてあげないこともないわよ。義勇兵限定だけどね」

よし、話は終わったようだ。私は立ち上がり新人達の方に行こうと歩きだした

「ちよい待ち、嬢ちゃん」

「うっ」

私の前に足が出されて止められる。足の差し出し先を睨む

「まずは新人達の好きにやらしてやりな。勧誘はその後だ」

その言葉に従い待つ。新人達は戸惑つていたがチーム、またはペアで事務所を出てい

く

「そろそろ大丈夫だな。悪かつた、もういいぞ」

気を取り直し新人達の前に

「おはようございます」

新人達は挨拶をしながら近づいてくる私にびっくりしたのか身構える

「身構えなくて大丈夫ですよ。私はパーティーの勧誘をしに来たんですよ。もし来てくれたら色々教えてあげますよ」

奥の方から笑い声がする。変なこと言つてないのに……

「あんた詐欺師みたいなこと言わないの」

所長が呆れ声で突っ込んできた。新人達は「詐欺って……」って小声で言ってる。「詐欺師じゃないですよ」

訂正するが新人の見る目は怪しい人を見る目だ

「ハア、ごめんなさい。詐欺師って言ったのは例えよ。この子はこんなだけ見習い章もらった子達の中で一番最初に団章を買ったし、パーティーリーダーとしても義勇兵としても将来有望な子よ」

所長がフオローを入れてくれる。新人達は小声で話し合いをしたりしている。失敗しちやった〜

「あの……」

中肉中背のショートボブ、着ている服も特に特徴のない男の子が前に出た

「もしよかったらパーティーに入れてもらえませんか……」

「喜んで、歓迎しますよ。名前は？」

「ヒロトです。名前しか覚えてないのですけど」

「初めはみんなそうです」

ヒロトは私の横に立つ。1人手を上げれば何人か挙げると思ったがそう上手くいくとは限らないようだ。私とヒロトは念のため新人達が事務所から追い出されるまで待

機した

「入ってくれたのはヒロトだけでしたね。あ、くん付けの方がいい？」

「別に呼び捨てでも大丈夫です」

私はヒロトを北門近くの大通りまで案内した

「ここが今私達が主な活動拠点になっている北門の大通り、基本的に日々の買い物や装備の購入はこの周辺で行っているわ。それで・・・」

手に銀貨と銅貨を持つ

「これがお金。あと金貨があるんだけど銅貨100枚で銀貨、銀貨100枚で金貨になるの。だいたい屋台で売っている食べ物には銅貨4枚、4カパーって言うのだけれど：：それにしても支度金沢山もらってない？」

「装備を買うためですか？」

「ううん、ギルドに入るための金の話は長くなるからお昼にしよう。それまではいろんな店を見て回ろう」

お昼までかなり時間があつたので結構な店を回ることができた

「あ、メリイ」

行きつけの食事処に行くとメリイが食事を食べていた

「新人？」

「うん。ヒロト。この人は私のパーティーメンバーの1人でメリイ、後アディさんがいて全員で4人が私達のパーティー」

「3人でやっていたのですか？」

「仕事の内容で短期で雇ったりしてからの実際は5人位での行動かな？」

私達も座り、食事を始め落ち着いた所で

「さて、義勇兵は仕事をするにはギルドに所属しないとイケないんだ。今オルタナにあるギルドは・・・」

ヒロトにクラスとギルドについて説明をする

「あの、シオリさんとメリイさんのクラスは・・・」

「ああ、私はネクロマンサーでメリイは神官なの」

「ネクロマンサー？」

「ネクロマンサーのギルドはオルタナにないの」

「へー、俺どんなクラスになればいいんでしょうか？」

「それは自分で決めないとダメだよ。ギルドもすぐに決めないとイケない訳じゃないしゆっくり決めたらいいよ」

「はい」

「昼からは案内の続きと今日泊まる宿を探しましょう」



夜、私達パーティー全員で新人歓迎会をしにシエリーの酒場に集まっていた  
「新しく入ったヒロトです。え〜クラスはまだ決められていません。これからよろしくお  
願います」

「乾杯」

アデイさんはビール、私とメリイはミード、ヒロトはレモネードを飲む

「ヒロトは酒行けるの?」

「わからないので頼まなかったのですけど。どうでしょう?」

「よし、次は頼んでみよう。その2人はダメだからなかなか楽しめないんだ」

「頑張ります・・・」

「シオリ、次のメンバーは酒飲めるやつをお願いね」

アデイさんはヒロトに絡む。よかったアデイさんに絡まれると大変なんだ。ヒロト  
を隠れ蓑にしてメリイと料理を食べる

「ヒロト、私達3人なら誰がいい?」

「ええ、誰がって・・・」

「もしかしたらやらしてくるかもしれないよ。あ、私はダメだから旦那がいるし」

アデイさんもいい感じに出来上がってヒロトに絡む

「あの・・・事務所にした人ですよね？」

私とメリイは振り向く。ショートカットの優しそうな女の子が立っていた。服装を見る限り新人のようだ

「私アオイって言います・・・パーティーに入りたいたんですけどもう遅いですよね・・・」

なんと私のパーティーに入りたいと言ってきた

「まだ大丈夫よ。一人？」

「はい・・・途中で追い出されちゃって・・・」

なんとひどい。何も知らない同士なのによくそんなことができる

「まずここに座って、大丈夫だった？何も取られてない？」

メリイさんが席に促す

「あの・・・お金ないです・・・」

アオイちゃんは泣き出す。話を聞くと事務所から出た後、新人何人かで行動していたが、お金だけ取られて追い出されたらしい

「胸くそ悪いわねえ。誰よそんなことするやつ。ビールもう一本」

アデイさんはビールをイッキ飲みするとテーブルに叩きつけるように置く

「アオイちゃん明日事務所に私が伝えておくから、今日の宿・・・私の部屋広いから泊まろっか」

「はい」

アオイちゃんは何も食べていなかったのか料理を一生懸命食べる。この様子じゃ今後の話は時間を置いてからにした方がいいか・・・

借宿に帰りメリイが泊まるときに使う布団を敷いてアオイちゃんを寝かせる。ちよつとトラブルはあつたがパーティーメンバー2人が加入してくれた

## 20話

翌朝私とアオイちゃんはレッドムーン事務所に詐欺に合ったことを報告しに行った

「なかなかゲスイことしてくれるじゃない。でも、騙されたのはそっちの責任よ、自分で何とかしなさい」

「お金は無理だと思えますけど捕まえることはできないのですか？」

「無理、無理。いちいちそんなことに人を使つてたらキリがないわ。それにあたし達義勇兵は信用が大事よ、そういう問題行動を起こす人間は長続きしないから勝手に痛い目見る。ほおつておきなさい」

「せめて注意喚起とか」

「その子酒場で拾つたのでしょ？物好きが勝手に調べて広めるから何も言う必要はないわ」

他の義勇兵が調べてくれて、アオイちゃんを捨てた犯人も制裁を加えてくれるらしい「すごいですね。義勇兵同士の情報網」

「あたし達は何も無いからね。人一倍繋がりは大切にするのよ」

所長はアオイちゃんに笑顔で

「あなたよかったじゃない。ハマしたけど最終的に彼女を見つけて助かった。いい勉強になったでしょ？」

「そんな・・・」

「抜けてるけどツキは持つてる。今回のことはさっさと忘れて、今度は捨てられないようにしなさい」

所長なりに励ましてる？

私達は事務所から出て北門周辺に向かつて歩く。やっぱアオイちゃんの顔は暗い

「所長もああ言ってるし。過ぎたことより今を頑張ろう」

「でも・・・すいません。私ドジだから・・・」

「そんなことないよ。だってこんな広い街の中で私を見つけたんだから。私だったら見つけられずにそのまま終わってた。アオイちゃんがドジなんかじゃない。これから頑張ろう」

「はい・・・」

「よし。じゃあまずは戻りながら私達が普段使う店を教えてあげる。それからヒロトが泊まっている宿についたらクラスとギルドについてね」

励ましが通じてくれたのかアオイちゃんは元気を取り戻してくれたみたいだ。その後、午前中はアオイちゃんの案内とクラスとギルドの説明、昼からはギルドの訓練を完

了してからの住む所を探した。

「結局、義勇兵宿舎が見習いにとって1番リーズナブルみたいね」

街の借宿は見習い章による割引が効かないので泊まろうとすると1日最低50カパーかかる。そこに食事代を加えると3日住めたらいい方だ。その点義勇兵宿舎は見習い章でも割引が効き1日10カパー、団章だとなんと無料になる。マナト達そんな激安物件に住んでいたのね。住む所も決まり、希望するギルドの案内を行った。2人が戻ってくるのは7日後、それまではゆっくりと過ごそう

ハルヒロside

夜、変な時間に起きてしまい寝直すことができなくなった俺は部屋から出てそのまま外に出た。ここは盗賊ギルドの宿舎。今俺は新しいスキルを覚えるためにここに来ている。コボルトとオークの拠点討伐の報酬と戦利品で俺は4つもスキルを覚えて、残ったお金で中古の防具を買う予定だ。武器に関しては今の所研ぎに出せば切れ味がちゃんと出るので購入する事は考えていない。みんなも俺と同じようにスキルや武器、防具を買うために別行動をしている。

これが終わればダムローでゴブリンを狩って上位ゴブリンを倒す・・・

物思いに耽っていたら足音がしてきた。こんな遅くに俺みたいに寝れないやつがいたみたいだ

そいつは月明かりに照らされて姿を見せた。女の子だ。服装がこちら辺で売ってない服・・・俺達がここに来たときに着てたような服・・・

「つてことは新人か・・・」

訓練の時、バルバラ先生が新人が何人か入って来たつていつてたつて。あの後「早く義勇兵になりな。恥ずかしい」つてしごかれたつて・・・

女の子は先客がいたことにビックリしたのか足を止めている。俺は女の子を改めて見る。その子は髪はボブカットで顔は目が大きい寝不足がどうか知らないが目の下に隈ができている。拗ねたような唇が気難しそうで、近寄りがたい印象を受ける。でもなんだか妙に気になる・・・

女の子も大きな目で俺を見ている。初対面の人をじつと見ちやつて不味いよな・・・

「あ、ごめん。じつと見ちやつて」

「いえ・・・何かご用ですか？」

ぶつきらぼうに返される

「いや・・・用つていうか」

「特にないのであれば、失礼します」

女の子は踵を返すと立ち去った。途中、彼女は振り返り

「あの・・・名前は？」

「えっ？ハルヒロだけど」

俺の名前に反応した。もしかして担当教官に変な人がいましたと通報するつもりじゃ・・・

「・・・チヨコです」

名前を言うと前に向き直り立ち去って行った。

チヨコ

その名前に引つかかる。グリムガルにくる前のことは忘れているはずなのにその名前に覚えがあるように感じる

「・・・チヨコ」

あのチヨコなのか？いや、何があのとかはわからないけど・・・

「何かの偶然なんだよな・・・これ」

ハルヒロside end



「あれ？いるのはマナトとモグゾーだけ？」

マナト達に用事があったのだけれど宿舎にいたのはマナトとモグゾーだけだった

「残りは街って訳じゃなさそうですね」

「他のみんなはギルドでスキルの訓練中。俺とモグゾーは教えてもらったスキルが少なかったからね。」

「ああ、そうなんですか」

今回の報酬と戦利品でマナト達のパーティーはかなり強くなった

マナトはヒールをこれで離れていても傷を直すことができるようになったし、あの時のような悲劇は起きなくなっただろう。

ハルヒロは忍び歩きへスニーキング、蠅叩へスラップ、敵感知、罨解除の盗賊基本スキル4つと中古だが手甲、足甲などの全身防具を購入

ランタは排出系へイグゾースト、忌避突へアヴオイド、強斬りへハードショット、使い魔防衛へシャドウスキンの4つとヘッドギアを購入

モグゾーは咆哮へウォークライの1つだけだが、オークが身に付けていた鎧を自分が着れるように打ち直してもらい、余った鉄片をいつも被っている厚手の帽子に縫い付け鉄の額当てにした

ユメは早目、穴ネズミ、静者、下がり打ちへダウンストリングの4つとなめし革

の上着とズボン

シホルは睡魔の幻影(スリーピングシャドウ)と氷結の茨(フリージングスオン)、闇の衣(ダークトローガ)の3つと防具の購入

「シオリさんは今回の報酬で何か覚えたり購入したりしないの？」

「覚えたいとは思いますが、教えに乞いに行くのにも日数がかかりますし、いい防具なんてオルタナには少なくて値段が張りますもの」

「そっかここにはギルドがないもんね。ところで何か用事があつて来たんじゃないの？」

「ええ、パーティー新しく入った新人2人がここに住むことになるんでよろしくつてのと、暫くは一緒に狩りをさせてもらおうかと」

私は義勇兵見習い期間がなく、メリイやアディさんは義勇兵になってそれなりに時間が経っている。私達のペースで動くよりは義勇兵見習いであるマナト達のペースで動いた方が2人のためになるだろう

「新人？俺達みたいなの？」

「ええ、それと所長が早く団章を買いに来ないと売らないって言っていましたよ」

「急がないとね。でも俺達と一緒に行動するってことは早い内にゴブリンの集団との戦いになるしその2人は大丈夫？」

「私達もフォロー入れますし、大丈夫ですよ」

「わかった」

その日は義勇兵宿舎で夕御飯をこちそうになった

「シオリさん！」

待ち合わせの広場で待っていると私を呼んで駆け寄ってくる人がいた。白に青いらインの入った鎧で盾を背負い、腰に剣を差している

「すいません。待たせちゃいました？」

「いえ、全然待ってませんよ」

「アオイさんは？」

「まだ来てないですねえ」

私とヒロトは周囲を見渡す。少しだが人が増えてきている。早く見つけてあげないと

「あ、あそこにいます」

ヒロトが見つつけてくれたようだ。目を向けると白地に青いラインの入ったフード付きの服、腰にはマナトと同じ伸縮できる杖を差したアオイちゃんが見えた。私かヒロトを探しているのか周囲をキョロキョロしている

「お〜い、アオイちゃん。こっち〜」

私が声をかけると気づいて走ってくる

「ごめんなさい。全然見つからなくて」

「大丈夫、俺もついさっき合流したばかりだから」

パラデインのヒロト、神官のアオイちゃん。2人はちゃんと希望したクラスになれて良かった。

私達3人は義勇兵宿舎に移動してマナト達に2人を紹介した

「マナトこの2人が前に言っていた新人。ヒロト、アオイちゃんこの人がマナトって言ってそこにいる5人とパーティーを組んでいるリーダー」

「ヒロトです。よろしくお願いします」

「アオイです。よろしく・・・」

「そんなに緊張しなくていいよ。君たちと一緒にまだ見習いだから。俺はマナト。つてさつき紹介されたね」

「うちユメ。狩人やってんねん。2人のクラスは？」

ユメが先頭になって2人にうまく絡んで打ち解けてくれている。その後、ゴブリン狩りのためにダムローで活動することや宿舎の説明で時間が過ぎていった

## 21話

「この辺は収集クランに同行したときにキャンプをしてた場所なので安全だと思います」

今回ダムローでのゴ布林狩りは毎日オルタナとの往復を行うのではなくキャンプを張りながら行うことになった

「うちギルドで早目教えてらって弓が当たるようになったから何か狩ってくる」

「俺とモグゾーは釣りにいってくらあ」

弓矢を片手にユメが釣竿を片手にランタとモグゾーがキャンプから出て行こうとする

「3人もちよつと待ってヒロトくんとアオイさんはゴ布林と戦ったことがないから今日1日はこの森でゴ布林を探そう」

ダムローでゴ布林と戦うとその音でゴ布林が集まってくるので2人だけで時間をかけて戦わせることはできない。なのでキャンプ周辺の森ではぐれのゴ布林と戦って経験をつけようと言うわけだ。私達は何人かの班に別れゴ布林を探す。できれば1人で行動しているはぐれが見つかれば良いのだけれど……

「どう? あれ」

私達の視界には小川で火を焚いているゴブリンが1匹いた。

「周りに他のゴブリンはいない」

辺りを探索していたハルヒロとユメが戻ってくる

「ユメが弓で合図をしたら2人が出る。それでいいかい?」

「・・・」

2人は緊張からか無言だ

「大丈夫。本当に危なくなったら助ける。もし無理そうなら何人かで一緒に倒すかい?」

「いえ俺達2人でやってみます。アオイさんは?」

「・・・うん。ヒロトくんがいいなら・・・」

手に杖を強く握りながらアオイちゃんは答える

「よし。じゃあ行動開始だ」

ゴブリンを囲むような形に移動し隠れる。ハルヒロは様子を伺い合図を送るとユメが弓を構える。目を瞑って深呼吸し、瞼を開き弓を打つ。矢はまっすぐ飛びゴブリンの足元に刺さる

「グア!?!」

ゴブリンは驚き立ち上がる。そこにヒロトとアオイちゃんが出る。ヒロトはゴブリンとアオイちゃんの間立ち盾を前に構えている。アオイちゃんは杖を構えているが腰が引けて微かに震えている

「ガアアアアア！」

ゴブリンは大きく叫びヒロト達を威嚇した。その声に萎縮した2人を見てゴブリンが走る

「ええい」

ヒロトが剣を振るう。しかし、ゴブリンは避けて後ろのアオイちゃんに飛びかかった

「きやあぁー！」

私は前に出ようとする。とメリイが「大丈夫」と首を振って止める。視線を戻すとヒロトが盾を横に振るいゴブリンを突き飛ばしていた

「アオイさん大丈夫？」

剣をゴブリンに向けながらアオイちゃんを立たせようとする

「あ、ごめんなさい。んっ、すぐに・・・」

アオイちゃんはうまく立てないでいる。多分腰が抜けてしまったんだ。

「そのままです」

ヒロトは盾を構え直しゴブリンと相對する。アオイちゃんとの距離が近いのは倒れ



ているアオイちゃんを守るのとさつきみたいなのを防ぐためだろう

「グ、グフツ」

ゴブリンが笑う。さつきのやり取りでこつちが素人だとバレた。ゴブリンは横に移動しながら攻撃のチャンスを待っている

「でやあああー！」

この膠着で先に動いたのはヒロト。ゴブリンはこつちに主導権があると思いきや油断していたのか反応が遅れヒロトの剣が肩に食い込む

「くううう。もしかして骨？」

「ギヤスー！」

「あぐう」「ヒロトくん！」

ゴブリンの肩に吸い込まれた剣は途中で骨に阻まれて止まってしまった。ゴブリンはお返しと言わんばかりにヒロトの肩に短剣を突き刺す

「は、離れろ」

ゴブリンを蹴って距離を取る。距離が離れたので肩に刺さっている短剣を抜く。肩の傷は深いようで剣が握れず盾を持っていた手で剣を持って構える。ゴブリンも肩におった傷のお陰か動きが緩慢だ

「おおおおおおお」

ヒロトが剣を前に構えゴブリンに体ごと突っ込む。ゴブリンにマウントポジションを取ったヒロトは剣を何度も腹に突き刺す。ゴブリンもやられまいと体や腕をふるいヒロトをどかさうとする。やがてゴブリンの抵抗がなくなりヒロトはゴブリンに刺した剣にもたれかかり荒い息を吐いている

「アオイさん、ヒロトくんに治療を」

「あ・・・はい」

メリイはアオイちゃんの元に駆け寄りヒロトの回復を指示する。アオイちゃんは時間をかけて立ち上がりヒロトの元へ

「ヒロトくん・・・」

「ハア、ハア・・・アオイさん大丈夫だった・・・」

「ヒロトくんのお陰で大丈夫でした。あの・・・治療します」

「あ、うん。お願い」

「ルミアリスの加護の元に・癒し手へキュア」

アオイちゃんはヒロトの傷にキュアをする。傷が癒えるなりヒロトは横に倒れる

「ヒロトくん!」

「大丈夫・・・ちよつと疲れたから」

「アオイさん大丈夫。俺達の回復は傷は直せても血や体力は元に戻らない。ちよつと血

を流し過ぎただけだよ、休めば元気になる」

マナトとモグゾーが近づいてくる。マナトはヒロトの剣と盾を拾い。モグゾーはヒロトをおんぶした

「ごめんね。刺された段階で助けられたら良かったんだけど・・・」

「モグゾーさん、なんとかなつたんで大丈夫ですよ」

「今日はもうゴブリンを狩るのはやめよう。明日はヒロトくんの様子を見てダムローに行くかどうか決めよう」

その後、夕食を取りヒロトは戦いの疲れがまだ残っているみたいでさっさとテントに入ってしまった

ヒロト side

夕食の後、初めてのゴブリンとの戦いの疲れが取れていない俺は先にテントで横になって休ませてもらっている

「・・・ふう」

ゴブリンとの戦いを思い出す。お互い必死だった。初めは後ろでシオリさんやマナ

トさん達が控えていて助けてくれると思つて何処か心のどこかで軽く見ていた。けど時間が経つごとにその事を忘れて目の前のゴブリンを倒すことに必死になつていった。

「あんなに頑張つたのにたつたこれだけかあ・・・」

あのゴブリンからの戦利品は欠けた銀貨と何かの爪が何本かそしてゴブリン自身を持つていた短剣。換金しても全然稼ぎにならないと思う

「マナトさん達のこと笑えないな・・・」

シオリさんにマナトさん達を紹介してもらつた時、「ずっと見習いなんだ・・・」つてちよつと下に見ていた。だけどここにくるまでに見た色々な知識や今回のゴブリンとの戦いでそれは間違いだと気づかされた。何も知らない時からゴブリンなどのモンスターと戦い続けて今にいたる。俺だつたら途中で死んでる。今日だってアオイさんがいなかったらキャンプに戻れず途中でのたれ死んでる・・・

アオイさん大丈夫かな。なんだか今日のこと引きずっている感じがしたけど

「ヒロトくん・・・起きてる?」

「アオイさん?だ、大丈夫入つて」

アオイさんのことを考えた瞬間、訪ねてきた。俺は驚きを隠しつつアオイさんをテント内に招く

「どうしたの？」

「あの・・・今日のことです・・・私全然役に立たなくてむしろ足を引っ張っちゃったから謝ろうと」

「あれは仕方がないよ。俺も必死だったし」

「でも、結局一人で倒しちやったし。私やつぱり捨てられて当然なのかなって・・・」

「そんなことないよ。今日だってアオイさんが肩の傷を治してくれたんだし」

「そんなのメリイさんやマナトさんもできます・・・」

アオイさんは目に涙をためている。まずいネガティブモードになってしまっている

「あーその、俺はアオイさんに治療してくれると嬉しいからそんなこと言わないで欲しい」

「・・・でも」

「マナトさん達も俺達と同じ見習いだけど今はもう義勇兵と変わらない。多分最初は手探りだったんだよ。アオイさんみたいに何もできなかつたりしたと思うし、最初はみんなそうだよ。これから一緒に頑張っていけばいいんだよ」

「・・・うん」

何とか持ち直してくれたようだ。明日から本格的なゴブリン狩り。俺達は上手くやっっていけるのか？

ヒ  
ロ  
ト  
s  
i  
d  
e

e  
n  
d

## 22話

翌朝、ヒロトの体調も問題がなさそうなのでダムローでの狩りを開始した

「奥の広場にゴブ5匹」

ハルヒロとユメが戻ってくる。大人数で探索すると待ち伏せされたりして危険なので盗賊と狩人のハルヒロとユメに斥候をやってもらいゴブリンを探す

「大丈夫。他には見当たらない」

ゴブリンがいる場所まで移動し、ハルヒロが周りを偵察して増援の可能性がないか確認する。

「今回はユメの弓は使わずに前衛4人でハルヒロとユメは後ろに回って」

簡単に作戦の説明を受ける。モグゾー、ランタ、アデイさん、ヒロトはわざと声を出しゴブリンに突撃する。ゴブリンが4人にかかりつきりになっている間にハルヒロとユメが後方に移動しモグゾーに合図をした。モグゾーは合図に気づくと

「うおおおおおおお！」

モグゾーのウォークライで範囲に入っているゴブリンの動きが止まる。動きの止まったゴブリンに向かってハルヒロとユメが走りそれぞれ背面打突へバックスタブ、斜

め十字で攻撃する。2人の攻撃に耐えきれず倒れるゴブリン。ゴブリンを倒したハルヒロとユメはそれぞれ別れゴブリンの背後、または横から攻撃し前衛の援護をする。「ほんと仲間がいるとここここまで簡単になるんですね」

額に流れる汗を拭いながらヒロトが言う

「数が多いと色々な作戦がとれるからね。昨日は2人で申し訳なかったけど」

「いや、2人で戦ったから今日の戦いがわかるのである意味良かったですよ」

アオイちゃんがヒロトの元に駆け寄ってくる

「ヒロトくん。怪我は・・・」

「大丈夫してないよ」

「うん・・・良かった」

アオイちゃんはヒロトが前で剣を振るう度に怪我の確認をしてくる。よほど昨日の怪我が堪えているみたいだ

「アオイちゃん仲間がいるし。ヒロトが昨日みたいな大怪我をすることはないよ」

「でも心配で・・・」

「これはしばらくは続きそうかな？」

「回復をこまめにしちゃうと大事なときに使えないと困るからある程度は我慢しなきゃ」



「でもヒーラー3人いるしいんじやねーの」

ランタが横から入ってくる。余計なこと言わないで欲しい・・・

「もく、アオイちゃんに教えてるときに余計なこと言わない。ゴブチンの早く終わらし」  
ユメがランタに怒る

「みんな、そろそろキャンプに戻ろうか」

空を見ると太陽がだいぶ傾いている。あと1時間ほどすると夕方になるだろう。

「ふう〜今日は狩りまくったぜ〜」

ゴブリンの身ぐるみとスカルヘルに捧げる供物を剥いでいたランタが伸びながら言う。確かに今日1日でゴブリンを30匹近くを狩った。ハルヒロの敵感知や前衛の厚さが幸いしてペースが早い

「ツ!!みんな、気をつけて!何か近づいてくる。多分走ってる」

ハルヒロのスキル敵感知に反応があったみたいだ。この大人数に向かってくるなんて相手も大人数?ゴブリンの身ぐるみ剥ぎを中断し、みんな武器を持ちハルヒロの指し示す方向に構える

「光よ、ルミアリスの加護の元に・・・光の護法へプロテクション」

メリイが自身、ランタ、モグゾー、アデイさん、ヒロト、ハルヒロを対象にプロテクションをかけ後ろからの襲撃に備え後方に移動する。先制攻撃のため、遠距離攻撃がで

きる私とユメとシホルが前に出ていつでも攻撃できるように待機する。暫くすると小石を蹴り飛ばしかなりの速度でこちらに向かつてくる音が私の耳にも聞こえてきた。そして物陰から何かが出てきたと同時にユメが弓を放つ

「おわっ!」

出てきたのは私達と同じ義勇兵達だった。先頭の義勇兵は大きく体を反らして矢を避けるが無理な体勢だったため後ろに倒れる

「おい、何滑ってんだ!」

後ろにいた義勇兵が手を伸ばし支える。かなり背が高いモグゾーと同じ位?

「ああ、良かった。助けてください!」

背が高い人と一緒に出てきた人が私達に気付き助けを求めてきた。私達は道を開け隙間を作る。助けを求めた義勇兵達は中に入ってくるのと同時にゴブリン数匹が飛び出してきた

「オーム・レル・エクト・ヴェル・ダーシュ」

「安寧を生きるものに死の告知を・死の宣告へモータルレイ」

ユメの弓矢、シホルのシャドービート、私のモータルレイがゴブリン達の元に吸い込まれる

「ギャギャ!?!」

ゴブリン達は急な不意打ちに驚いている隙にモグゾー、ランタ、アデイさん、ヒロトの4人が突っ込む

「ガァー！」

後方から2匹のゴブリンが走ってくる。おそらく回り込んできたんだ

「みんな避けてー！」

ユメが走りながら弓を放つ。しかし矢はゴブリンの横に抜ける

「ごめん。当たらんかった」

ゴブリン2匹の突撃をメリイ、マナト、ハルヒロが止める。少し遅れてそこに剣鉈を抜いたユメが参加する。私は先ほど倒したゴブリンを操り前衛を援護、シホルは隙を見つけて魔法で攻撃。ゴブリン達は私達の布陣を崩せず1人、また1人と倒れていった

「大丈夫だった？ 怪我はない？」

「大丈夫・・・です。すいません助けてもらって」

マナトが助けた義勇兵に怪我の有無を確認するとマナトと雰囲気似た男性がメンバーの様子を確認しつつ答えた。彼がこのパーティーのリーダーのようだ

「いや、お互い様だよ」

男4人、女2人の6人パーティーでどこかで見たような・・・

「あれ？もしかして最近来た新人？」

「あー、詐欺師の人」

キツカワみたいなヘラヘラした顔の男が指を指して言う。マナト似が「おい！」と頭を叩くが

「詐欺師・・・？」

「いや、勧誘の時失敗しちゃって」

仲間から「何で？」という目にさらされながら私は頭を掻きながら答えた

「コホン。どうしたんですかゴ布林に追われて」

「ゴ布林と戦っていると増援がどんどん来てヤバくなって・・・」

周りの偵察を怠ってしまい自分達の処理量以上のゴ布林と相手してしまったようだ

「あー！やべえ盾落とした」

キツカワ似が叫ぶ。でも、ここダムローで武器や防具を落としてしまうと・・・

「うそー！どこにもねえ！」

みんなで逃げてきた道に戻るが盾は落ちていなかった。ダムローで武器、防具を落とした場合、ゴ布林に拾われて自分の物にされる。直前までゴ布林に追われてしまっているのならなおさらだ。そして、新人で武器、防具を失うのは大幅な戦力ダウンだ。リーダーのマナト似も少し青い顔をしている

「まずいなあ。今の俺達の稼ぎじや新しい盾なんて買えないぞ」

「でもない俺まともに戦えない・・・」

「相談はここでするのは良くないよ。それよりも時間が遅いけどどこかでキャンプをする予定があるのかい？」

「えっ!?!もうそんな時間なんですか? 日帰りの予定だったのですが・・・」

今から帰ると途中で夜になってしまう。そうなると危険だ

「もし良かったら俺達のキャンプで一晩過ごさないか? 今から帰ると夜になって危険だし。みんなもいいかい?」

みんな了承する。キャンプに戻る最中お互いの自己紹介をした。新人義勇兵はそれぞれ

マナト似 || ユート                      クラス戦士

キツカワ似 || シュウ                      クラス戦士

背の高い人 || クザク                      クラスパラディン

優しそうな人 || タクマ                      クラス神官お

女の人1 || チョコ                      クラス盗賊

女の人2 || リン                      クラス魔法使い

と紹介を受けた。自己紹介後、なんだかハルヒロの様子がおかしい気がする

「ハルヒロどうかしましたか？ さっきのどこか怪我しました？」

「あ、いやちよつと・・・」

言葉を濁されたが目線がチヨコちゃん辺りに行っている。私とビンゴくんみたいに同業者で珍しいってわけじゃないだろうし・・・どういうことだろう？ チヨコちゃんの方を見ているとハルヒロの方をチラチラ見ている

「チヨコちゃんもハルヒロのことが気になっっている感じですよ。何処かであつたことあるんですか？」

「えっ、いや、スキル教えてもらっている時に一度会って・・・」

盗賊ギルドに一度会っていたのか・・・成る程。大方それ関係の話かな？ キャンプに戻って一泊。食料の関係上一度戻ることが決まった。ユート達新人義勇兵も集まって今後のことを相談している

「皆さんの仲間に入れてもらえませんか？」

朝食を食べ終わり、撤収しようとしたときにユートが切り出してきた

「ダムローでのゴ布林狩りがいいと聞いて来たのですが、上手いかわなくて・・・」

「ぶっちゃけ盾を買うまででいいので一緒にいさせてください！」

「おー！」

ユートの言葉を遮ってシユウが手で拝みながら言ってきた。せつかくユートが最もらしい理由を説明しているのに……。私は私のパーティーを見る。みんな別に構わないようだ

「私のパーティーは別にいいです」

「俺達のパーティーはゴブリンを沢山狩って上位ゴブリンを引つ張り出す予定なんだ。昨日以上のゴブリンと戦うことになるよ。それでもいいの？それに人数が増えろとそれだけ取り分も減っちゃうし……」

その言葉を聞いてユート達が離れて相談を始め少しして戻ってくる

「それでもいいです。上位ゴブリンってのが来るのならなおさら俺達だけなのはまずい」

「よし。決まりだ。今日はもうオルタナに戻るから撤収を手伝ってくれる？」

「はい」

その後、オルタナに戻りユート達の宿舎にマナト達が使っている義勇兵宿舎とは別館に泊まっていることが分かった

「明日の昼過ぎにシオリさんと一緒に今後の相談するから宿舎で待っていて」

「はい。よろしくお願いします」

次のダムロープ行きの相談を行う約束をした。



## 23話

ハルヒロside

・・・むに

何かが俺の頬を触る。虫が張り付いたかな？

「ん、うゝん」

頬を払い再び眠りの世界へ・・・

・・・むにむに

また俺の頬に何かが触れる。・・・しつこい虫だなあ。ランタか？全く、テントの入り口をちゃんと閉めないで虫が入って鬱陶しいって言ってるのに。目を薄く開けると誰かが顔を覗いている。ランタか？・・・ってチヨコ!?

「うわー！」

声を出すとチヨコも驚いて身を引く。状況を確認しようとして辺りを見渡す・・・外にいる・・・ああ、そうだ新しくチヨコ達のパーティーと一緒にあってゴ布林狩りをしてたんだっけ。それで夜に交代で何人かと番をしていたんだけど途中で寝ちゃったんだ・・・そして交代のチヨコが来て起こしてくれた・・・

「ごめん、寝ちやつてた。もう交代の時間？」

「まだ時間じゃない」

交代の時間じゃないのにいったいどうしたんだ……。チヨコは俺がもたれていた倒木に座る。俺もそこに座る。お互い何も話さずに時間が過ぎてゆく。気まずい……。何か話そうかと思うけど何も思い浮かばない。チヨコの顔を見る。隈がある大きい目は前の暗闇を見つめている。やっぱり何かが引つかかる気がする……

「……何？」

チヨコが俺の視線に気づく。どうしよう……。君の顔が気になるんだって言っちゃうと引かれるなあ

「いや……。別に……。ないというか……。うん、なんでもない……。よ？」

「そう」

「う、うん」

良かった。何とか切り抜けた……

「見張り……。寝てた。先輩なのに……」

「う……。いや、あれは……。ちよつと……」

「フフ……」

見張り中の居眠りを指摘されしもどろしているとチヨコは袖で口元を抑え笑う

「笑うことないと思うけど・・・」

「フフ、ごめん」

「チョコは」

「・・・呼び捨て？」

「ご、ごめん。何かそつちの方がいいかなって・・・」

「意外・・・女慣れしてる・・・パーティーに女の子が多いから？」

変な勘繰りをしてる？いや、俺全然だから・・・

「あ、いや。女慣れしてない。見た目通りだよ。全然・・・チョコ・・・ちゃん？さん？」

「・・・呼び捨てでいい」

「う、うん。ごめん」

「で、何？」

「えっ、あ、いや・・・やっぱいい」

「言ってよ。気になるし」

「言わないよ」

「・・・ふうん」

チョコは詰まらなそうに足を振る

「・・・へたれんぼう」

「えっ」

へたれんぼう

聞き覚えがある……。これは気のせいじゃない。聞いた瞬間心臓がドキツてした。でも、へたれんぼうって一般的じゃないよなあ。今まで聞いたことないし、言ったことも思ったこともない

「あの……。チョコ。ここに来たときの記憶はないよね？」

「うん。ない」

「俺もなんだよ。いや、当たり前なんだけど……。家族とか友達とか全然覚えてないんだ」

「……。うん」

「でも、もしかしたら……。例えばなんだけど……。パーティーのみんなとは初めてなんだけど、そうじゃないこともある……。よね？」

「……。前から、知り合いとか？」

「そういう可能性があるって……。話」

「……。そうかもね」

「うん」

「でも、覚えてなきや意味がない」

再び沈黙が支配する……

「・・・ヒロ」

「えっ？」

また心臓が鳴る

「先輩・・・ハルヒロだからヒロ・・・いい？」

「いいよ」

なんだろう。目の奥が熱くなって、心臓の鼓動がおかしい・・・。多分そんな呼ばれ方しても何でもないはずなのに・・・。誰かにそう呼ばれていたはず・・・誰に？ チョコに？

「いいよ。もちろん」

「ほんとに」

チョコが俺の顔を見てくる。心なしか力が入っているような気がする・・・。もしかしてチョコもヒロって読んでたやつがいた・・・？ 俺？ もしかして俺とチョコは・・・

「あの・・・チョコ・・・もしかして俺達・・・」

「・・・ハルヒロ？ もう交代の時間過ぎとるよ」

言葉が遮られる。交代の時間になっても戻ってこない俺を心配してユメが見に来たようだ

「・・・じゃあ。チョコあとよろしく」

「・・・うん」

タイムリングを逃した俺は立ち上がりチョコに後を任せてキャンプに戻る

「・・・いい雰囲気やったなあ」

「えっ？」

キャンプに戻る途中、ユメが歩くペースを遅くして眩く

「あの子と」

「あ、ああ、盗賊ギルドで会ってその辺りのこと話してた」

「とてもそんな風に見えんかったけどなあ」

ユメは疑いの目を向けてくる

「・・・へたれんぼう」

「えっ」

「覗き見しとうなかつたけど。なかなか声かけれんかったから難儀したわあ」

あの辺りからずつと見られてた？そう思うと顔が赤くなる

「知らん間に他のパーティーの子口説いて何しとんの？」

ユメが不機嫌だ。そう言えばユメが不機嫌になるのを見るの初めてかも。ランタに怒った時はブワーとなつてすぐに収まっていて貯めるってことはなかつたし。覗きの時も不機嫌だつてこつちが勝手に思ってた・・・よね？何でチョコと話してて不機嫌に

なるんだ？

「聞いたんの？」

「うん。聞いている。別に口説いてたわけじゃ……」

「名前……渾名決めてた」

渾名？ヒロのこと？もしかして渾名で呼びたいのか？

「別にユメも好きに呼んでもいいよ」

「えっ」

ユメが驚いた顔をしたら急に悩み出した。おいおい、変な渾名つけないでくれよ……

「……ハル……じゃなくて、ハル……くん？」

「ん？ハルくん？それでいいよ」

悩んでた割りに普通だな

「ハルくん♪」

「何？」

「♪」

ユメが笑う。何だ？何が面白いんだ？

「ハルくん。早よ戻ろ。うちめっちゃ眠いわ」

ユメが上機嫌で歩くペースを上げる。何だ？急に機嫌が直って。それにそつちが

ペースを落としたんじゃないか。ユメの不可解な行動に疑問を浮かべながらキャンプに戻った

ハルヒロside

end

私達はいつものように建物の影に隠れてゴブリン発見の連絡を待つ。そこにハルヒロ、ユメ、チヨコの3人が戻ってくる

「変なゴブリンがいた」

3人の話によるとゴブリン達の集団の中に2倍位体が大きいゴブリンがいたのと

「ホブゴブリンね」

3人の報告を聞いてメリイが答える

「ホブゴブリン?」

「ゴブリンより体が大きくて力が強い、でも知能は高くないから奴隷戦士として飼われていることが多いわ」



「でも俺達がここに来てホブゴブリンなんて見たことも聞いたこともないぞ」  
外を見ていたランタがこちらに近づきながら言う

「殆どの場合、上位ゴブリンが従えてるもの見ないのも当然よ」  
「と、いうことは！」

ホブゴブリンを従える上位ゴブリンがここに来ていいるということだ

「自分達の最大攻撃力であるホブゴブリンを遠くに配置しないはずだから上位ゴブリンも近くにいるわ」

「パーティー毎に別れて上位ゴブリンのいそうな場所を探そう。ユメはシオリさんのパーティーに入ってあげて。みんなゴブリンとの戦いは絶対にしないように。そして無理は絶対にしないでくれ」

マナトはメリイの発言に頷きゴブリン狩りから上位ゴブリン探索にシフトするよう指示する。各班ゴブリンに見つからないように行動し、上位ゴブリンがいそうな場所を探す。ホブゴブリンが発見された周辺はゴブリンが多く物々しい雰囲気を感じた。そして……

「あの建物絶対怪しいやん」

私とユメは遠くに見える建物を見ていた。その建物の屋根にはボウガンを持ったゴブリンが2匹おり、入り口には門番か何かなのかゴブリンが4匹立っている。どのゴブ

リンも装備が明らかにいい。それにユメの早目を使った遠目では窓から2、3匹のゴブリンが歩いているのが見えるらしい

「ユメのいう通り多分あそこにありますね」

「じゃあ、さっさと戻ろう」

辺りを警戒しているアデイさんが合流を促す。できれば上位ゴブリンの姿を確認したかったが長居するのは危険だ。私達は合流地点であるダムロー外に移動する

「多分そこにいるね」

他の班と合流し、キャンプ地に戻る。そこで各班が持ち寄った情報を交換する。私達を持つてきた建物の情報が当たりの可能性が高いことがわかった

「あの時のようにゴブリンの数が多いと思っていたけど予想以上に多いね」

みんなの情報から外で哨戒しているゴブリンは40匹以上、建物には上位ゴブリンが1匹だとしても9匹いる

「みんな。上位ゴブリンへの攻撃は明日行こう。かなり危険な作戦になる。はっきり言つてこの攻撃は俺達のパーティーの自己満足みないなものなんだ。もしやめたいなら遠慮なく言ってくれ」

マナトがみんなの前に出る。誰も反対意見を言わない

「ありがとう。実は作戦は何人かで相談していたんだ。今晚それを煮詰めるから朝に伝

「えるから待っていてくれ」

みんな頷く。いよいよマナト達の雪辱戦が始まる・・・

## 24話

「みんなこれから作戦開始だ。無理は禁物。絶対死なないように」

マナトがみんなの顔を見渡して言う

「よし。作戦開始だ」

「光よ、ルミナリスの加護の元に・光の護法へプロテクション」

メリイ、アデイ、ヒロト、ユート、シユウ、タクマが光に包まれる

「始めましょうか・・・」

目の前にはゴブリンが5匹。私達はそれぞれ配置につく。

「マリク・エム・・・」

ゴブリン達の側面に回りアデイ、ヒロトに守られたリンがマジックミサイルを唱える

「ギー、ギヤー」

ゴブリン達は詠唱に気づくと1匹は大声で叫び。残りの4匹は走ってくる。予定通り仲間を呼んでくれた

「パルク！」

リンのマジックミサイルは走ってくるゴブリンの内1匹に当たる。しかし、しかし残り3匹の足は止まらない

ザシュ！

物陰に隠れていたユート、シユウが剣を突き刺しゴブリン2匹の足を止める。

「ぐう……やあああああ！」

残りのゴブリンはヒロトが盾で受け止める。後ろに飛び退いたゴブリンを追いかけ両手持ちしたロングソードで袈裟斬りにする

「よっしやく大成功」

「シユウ調子に乗るなよ。これからが本番だ」

突き刺したゴブリンに止めを刺す2人。ユートの言う通りもうすぐ敵の増援がくる。私達は囷としてここで戦い敵を集める。そして警備の薄くなった所にマナト達が突入して上位ゴブリンを叩く。敵の数も多く無謀かもしれないが私達にはこれしかないと思っている。残りのゴブリン2匹は増援を待っているのかこちらの様子を伺っている

「ギャギャ」

周りからゴブリンの声が聞こえてきた。メリイ、タクマは私、リン、アオイの周囲を警戒する

「みんな矢に気をつけて」

遠距離攻撃に乏しい私達には距離を取られて矢で攻撃にされるとかなりきつい。なので遮蔽物が多いこの場所を戦う場所を選んだ

「ホブゴブリンが釣れたようね」

アデイさんの声の方に顔を向けるとホブゴブリンとゴブリンの集団が近づいてきている。ホブゴブリンは3匹。聞いた通りかなり大きい。オーク位あるんじゃないか？

「3匹も来ましたか、向こうはかなり楽になりそうですね」

「クザクさんに向こうに送らない方がよかったですかも・・・」

「ヒロト弱音を吐かない」

ヒロトのを叱咤するアデイ。クザク、チョコはこつちがあまり引き付けられなかった時のためにマナト班に入ってもらっている。前衛が1枚足りないのがどう出るか・・・

「ガア〜」

ホブゴブリン3匹の内1匹が間延びした声を出してこちらに走ってきた。それを見たゴブリン達は騒いでいる。もしかしてホブゴブリンってあまりいうこと聞かないの？

「ラッキー。みんな邪魔しないで」

「えっ、アデイさんちよつと待って」

ヒロトの静止を無視しアデイがホブゴブリンの前に出る。ホブゴブリンは手に持ったこん棒を大きく振り上げアデイめがけて降り下ろす

ドシン！

土煙が辺りに舞う。ホブゴブリンの攻撃は空振ったようだ。いや、アデイは盾でこん棒を反らして空振らせたんだ

「シッ！」

その大きな隙をアデイは見逃すはずもなく。射居へピックシヨットでホブゴブリンの首を突き刺す。これって前にモグゾーにしたことと一緒……！

「……ッ!!」

ホブゴブリンは首を抑え、大きく口を開け叫ぶが剣で貫かれて穴が空いてしまっている。その声が出ない。そして首からは勢いよく血が吹き出す

「……ッ!!」

首を抑えよろけるホブゴブリンはやがて血の勢いがなくなると同時に倒れこむ

「うおおお。すげええええ。アデイ姐さん！」

巨大なホブゴブリンを一撃で倒したことでテンションがマックスになるシユウ。他

の皆も驚いている

「あれを動かさせたらかなり楽になるわね」

後ろに下がってしてきたアディが私に話しかける

「距離があるのでまだ難しいですね。せめてもっと押し込まないと・・・」

「もっと引き付けければよかったか」

あれぐらい余裕ですか・・・。ホブゴブリンを速攻で1匹失って動揺するかと思つたがそこまで動揺している感じはしない。でも、何か動きがある・・・あの手に持っているのは！

「みんな来ました！」

ドス！ドス！

前方のゴブリン数匹がボウガンで攻撃してきた。私達は壁に隠れてやり過ぎす

「ギヤア、ギヤア」

ゴブリンの声と小さな足音と大きな足音。よしボウガンなしだとまだいい勝負になる

「グオオオ」ドシン！ガラガラ

「へっ」

ホブゴブリンは壁をこん棒で殴り壁を破壊しながら近づいてくる。壁は壊せるだろ



うと思っただけで最初からやるとは

「壁を壊されるのを防いでください」

アデイ、ユート、シュウの3人はホブゴブリンを止めようとするが取り巻きのゴブリンとボウガンに邪魔されて上手くいかない

「シオリさん俺、盾になるんでボウガン持っているゴブリンに攻撃できませんか?」

石を片手にヒロトが提案してくる

「うん。お願い」

せめてこっちはボウガン持ちを減らさないと

「私も・・・」

リンもマジックミサイルで攻撃しようとして出る

「待ってリンさんのマジックアローじゃ効果が薄いわ。こっちまで来た時用に温存して」

メリイが静止する。リンは悔しそうに了承した。私とヒロトは壁の端に構える。ヒロトが石を放り投げる

シュウ!

矢が通り抜ける音がした。それと同時に私とヒロトは壁から出る。

「安寧を生きるものに・・・」

「うぐう！」「ヒロトくん！」

「死の告知を・死の宣告へモータルレイ」

モータルレイを唱え終わると直ぐに壁に戻る

「ギャオ！ギャウ！」

ゴブリンの声が聞こえてきた。上手くいったみたいだ。しかしヒロトは盾ごと腕を貫かれてしまった。盾と腕の間の木の部分を剣で切って腕に刺さっている矢を抜く

「光よ、ルミナリスの加護の元に・癒し手へキュア」

すかさずアオイがキュアで治療する

「ありがとう。アオイさん。上手くいかなかったですね」

「ボウガンの威力を甘く見てました」

まさか盾ごと貫かれるとは思わなかった。もし腕ではなく頭とかだと思うとゾツとする。

「こつちの方も来たみたいですよ」

タクマが杖を構えながら言った。

「ギアオ！」「ギャウ！」

ゴブリン2匹が飛び込んでくる

「ハッ！」

タクマが殴打スマッシュで飛び込んできたゴブリンを叩き落とす。そこにヒロトが剣を突き刺し止めを刺す。もう1匹はメリイが杖で受ける

「フツ！」

そしてその力を利用してゴブリンに攻撃。突き返しへセットバックだ。メリイの力ウンターを受けたゴブリンは吹き飛ぶ

「よし！」

ヒロトはゴブリンに止めを刺そうと飛び出そうとする。

「待って！射線に出ちゃう」

「うっ」

ヒロトは踏み止まる

「死の告知を・死の宣告へモーターレイ」

倒れたゴブリンにモーターレイを放つ。ゴブリンはこの2匹だけじゃないはず。1度下がる？無理だここから出ると開けた場所に出してしまうのでボウガンに狙い撃ちされる

「やっぱりホブゴブリンよりボウガン持ちをどうにかしないと……」

方法は……ある。っていうか思いついた。が、かなり危険だ。だけど前衛もいつまで持つかも分からない……。ヒロトに守ってもらいながら……無理だ。さつき盾を

貫通してしまうのを見たばかりだ。この作戦はみんな絶対反対するけどやるしかない

「やっぱり1人でやるしかないか」

「シオリ？」

深呼吸

「みんな無理します。ダメだったらごめんなさい」

そう言つて壁から飛び出す

「えっ！ちよつと何してるの！」

メリイの声が聞こえる。だけど私は止まらない。視界にはボウガンを持ったゴブリン達が私に向けて構えているのが見えた

「ンッ！」

肩に鈍い痛み。急所は外れてくれた。姿勢をできるだけ低くして走る。もう少し……

「ツッ！」  
ゴブリンの第2射。今度は足に刺さってしまいコケてしまう。でも、ホブゴブリンに触れた

「死して我に従う玩具となれ・死体操作（ゾンビクリエイト）」

ザシユ！

「うくう……ゴホツゴホツ」

ゾンビクリエイトの詠唱と共に背中に重みと痛みが襲ってきた。何かが逆流する感覚……咳き込むと血を吐いた

「ギャンー！」

ゴブリンが吹き飛ばされる。おそらくリンのマジックミサイルだ。操作したホブゴブリンを使い立ち上がるうとして、いるゴブリンの足を掴みボウガンを持ったゴブリンの方向に思いっきり投げ走る。ゴブリンは死んだホブゴブリンが急に起き上がりこちらに襲いかかってきたのでこちらに攻撃する余裕はないようだ

「おおおおおー！」

混乱に乗じてユートが乱入。これでボウガンの心配もない。ホブゴブリンの姿も見えない事だからボウガンがなくなつてから3人で倒してしまったようだ

「シオリー！」「シオリさん」

メリイとヒロトの声がする。背中が痛すぎて振り向けない

「メリイ、ゴホツ。治療お、んっ」

「光よ、ルミナリスの加護の元に・癒し手へキュア」

こちらがお願ひする前に背中に刺さっている物を抜いてキュアで治療してくれる。背中に心地よい暖かさで痛みが引いていく

「あなた！無理だつたらごめんなさいってどういふことよ！無理だつたら死んじゃう

じゃない！って言うか無理な状態だった！」

メリイが捲し立てる

「メ、メリイさんとりあえず安全な場所に……」

衣服を引つ張られて壁際まで運ばれる。タクマ達は前衛と合流して残りのゴブリンの掃討にかかっている

「とりあえずこっちは上手く行きました。ユート達を援軍に送りましょう。痛い」

メリイは乱暴に矢を引き抜く

「何で相談しなかったの？」

「言ったら絶対反対するし」

「当然でしょ！」「死なないように」って聞いてた？」

「聞いてたよ」

メリイは私の治療をしつつ説教をする。説教よりもちよつと休みたい……

「メリイ、ちよつと休ませて」

「わかった。終わってから続きね」

「うへえ」

とりあえずこっちは何とか終わった。ゴブリンの数がちよつと少ない気がするがユート達を送るから勘弁してほしい。私は疲れからか急速に意識が落ちていった

## 25話

ハルヒロside

俺達は上位ゴブリンがいる建物から大きく離れた場所に待機している。

「そろそろ始まる頃だ・・・」

マナトがシオリ達が向かった辺りを見て呟く。暫くするとゴブリン達が走っていく姿が見えた。中にはホブゴブリンの姿も見える

「始まったようだ。俺達も作戦開始だ」

シオリ達がゴブリンを引き付けてくれているので建物の近くに移動するのは簡単だった。今俺達6人は入口近くの物陰に隠れている。

入口に門番として2匹。屋根には入口側と裏口側にボウガンを持つゴブリンが2匹いる。おそらくだが裏口にも門番ゴブリンがいる

マナトが合図をすると遠く離れたところで待っていたユメが弓を構え矢を放つ。放たれた弓は裏口の警備のため、背を向けているゴブリンの頭に命中し屋根から落下する。

落下音がしたことにより、裏口が騒がしくなる。そして、入口を警備していたゴブリン

ンが後ろを向き身構える。後ろを向いたゴブリンの頭にも矢が当たり倒れ動かなくなつた

「よし。下には気づかれていない」

入口を守るゴブリンは裏口が騒がしいので1人建物に入って今は1人だ

「オーム・レル・エクト・クロム・ダーシユ」

睡魔の幻影へスリーピーシャドウ。シホルの杖から、黒い靄のような影のエレメンタルが飛び出した。黒いエレメンタルはそこまで早くない速度でまっすぐゴブリンに当たる。黒いエレメンタル鼻、耳、口に入り込みゴブリンを眠らせる。俺達は素早く入口に移動する。ゴブリンの手足を縛りランタがゴブリンの首めがけて剣を振るう

「……!?!?」

ゴブリンは首の痛みで飛び起きるが手足を縛られていて動けず、声を出そうにも首を切られているため声が出ない。ユメとクザクが合流する頃にはゴブリンは事切れていた

「よし。中に入ろう」

俺を先頭で中に。ないとは思うが罨を警戒してだ。建物は元は宿屋だったようだ。入口入ってすぐ大きな階段、奥は裏口に繋がっているはずだ。

1階を確認していると奥から足音。ゴブリンが奥から出てきた瞬間、横で待ち構えて



いたモグゾーがグレートソードを降り下ろす

「ガア!?」「ギャギャ!」

奥からゴブリンの声が

「1匹だけじゃなかった!?!」

しまった!ゴブリンの数を見誤った

「肝心なときに使えねえなあ」

2階に走り登りながらランタが言う。後ろにモグゾー、シホルが続く

「ハルヒロ、ユメ、クザク、チョココ手筈通りで」

マナトが俺達に声をかけランタ達を追いかける

「ヒロもつとしっかり」

「チョココ誰だつて失敗はある。ハルヒロ気にするな」

「ランタはいつもあんなだ。気にしてない」

クザクが慰めてくれるが俺はもうあれくらいは気にならない。チョココ同じ盗賊なら

一緒に警戒してもいいんじゃないか?

「そんなスキルない」

足音だから敵感知スキルじゃない気がするなあ

「ハルくんこっちにごないよ」

「うん。ユメお願い」

ゴブリンは階段のある部屋に入ってこない。俺達は1階のゴブリンを倒す。チヨコはこの建物に近づくゴブリンの監視が目的だ。目の前のゴブリンにかまけて2階にゴブリンを送ってしまうとマナト達が挟み撃ちになってしまう。

ユメは弓を構え矢を手取る

「ギャア！」

ゴブリンの達がいるところには身を隠す所はない。弓を引かせまいと1匹が飛び込んでくる

「・・・下がり打ち（ダウンストリング）」

ユメが後ろに飛びながら矢を放つ。放たれた矢はぶれることなくゴブリンの足に突き刺さる。足の踏ん張りが効かなくなったゴブリンは着地に失敗して倒れる。そこにクザクがトドメを刺す

「入口方面には何も無い」

「残りは1匹だ。俺が行く。ハルヒロとユメは2階に」

チヨコの報告でとりあえずここに近づくゴブリンはいない。クザクは剣についた血を振るいながら俺とユメに先に上がるように言ってゴブリンに突撃する。俺達は1階をクザク達に任せ2階に上がる。

2階ではモグゾーとホブゴブリン1匹にゴブリン2匹、ランタとゴブリン3匹、マナトがシホルを守りながらゴブリン2匹と戦っていた。そして奥に1匹ホブゴブリンとゴブリンとの中間の身長、普通のゴブリンより明らかにいい鎧兜を付け、手には槍、腰には剣を下げていている。そしてそいつは戦況を観察している

「あれが上位ゴブリン・・・」

「うちらで倒してしまおう?」

「いや、俺達2人じゃ無理だ。それよりみんなを」

上位ゴブリンを狙って倒してしまいさっさと逃げてしまおうのがいいがああ、自信を見るに相当腕がある。それよりマナト達を助けるのが先だ。モグゾーはオーク鎧の防御力のお陰でまだまだ余裕そうだ。ユメはマナトとシホル、俺はランタの援護に向かう

「ランタ!」

「ハルヒロ!俺は大丈夫だ。モグゾーやマナト達を助ける」

「そんなこと言ったって押されまくってるだろ」

「バカ言え、これから俺の華麗なる逆転劇が始まるんだよ」

「逆転劇って言ってる時点でヤバイだろ」

ランタと口喧嘩しながら後ろを向いているゴブリンに襲いかかる。しかし、声を出し

ながらなので気づかれて避けられる。ゴブリンは体をこちらに向けて反動を利用して剣を横に振るう。蠅叩(へスワット)では捌けないので大きく体を沈ませて避ける。ダガーを両手で固定し起き上がりながらゴブリンの着ている鎧の隙間に突き刺す

ガギン!

俺の一撃は体を反らした鎧に弾かれる

「排出系(ヘイグゾースト)！おっしやつ雑魚共(こい)！」

ランタはゴブリン2匹と距離をとり挑発する。しかしゴブリン2匹はランタではなく俺に向かって来た

「あれ？何でこねえ！」

「ミエミエなんだよ！それより早く助ける！」

「おう！……って、うわ！」

上位ゴブリンはランタに襲いかかって来た。今までずっと見てたのに……

「ははあ、パーティーの強者である俺に挑むとはお前もなかなかやるな」

ランタは上位ゴブリンに捕まりこっちに帰ってこれない。ゴブリンの攻撃を回避、またはスワットするが

「……きつこ」

……このままではやられる

「ハルくん！」「ハルヒロ！」

マナト達が来てくれた。そつちの方はどうにかなったようだ

「・・・ハルくん!?! どういうことだハルヒロ！」

上位ゴブリンの攻撃に押されまくって細かい切り傷を作ってしまったランタが俺の渾名に反応する

「バカ！集中しろ！」

「・・・後で教えろよ」

「その前にあれだけ傷があるといずれ攻撃に耐えられなくなる・・・光よ、ルミアリスの加護の元に・癒光へヒール」

マナトの手に浮かんだ魔方阵が集まりランタの方に向かう。ランタのキズが光るとみるみる塞がっていく

「おお、サンキュウ。マナト」

「グオオ」

上位ゴブリンが唸るとモグゾーと戦っていたゴブリンの一匹がこちらに向かって来た。モグゾーの負荷は減ったけどランタが依然としてヤバイ

「みんな！すまん！あの後ゴブリンが来て遅れた！」

クザクが来てくれた

「クザク、ランタの元に」

「おう」

クザクがランタの元に駆け寄る

「暗黒騎士がパラディンと一緒に戦うのは恥だがこの際仕方がない！」

また訳のわからんことを・・・

クザクの参加で戦況は一気にこちらに傾いた

「オーム・レル・エクト・ヴェル・ダーシユ」

シホルの影鳴りへシャドービートがゴブリンに命中する。ゴブリンは鈍い音と共に動きが止まる

「斜め十字！」

ユメの斜め十字をまともに受け倒れる。俺もゴブリンの攻撃をスワットで捌き隙を見つけて背面打突へバックスタブ。ゴブリンの鎧の隙間にダガーを突き刺す。急所ではないのでゴブリンは倒れないが、傷が深く動きが鈍る。そのまま突撃して首元にさらに突き刺しトドメを刺す

「・・・もう少した。もう少して勝てる！みんな後少した！」

マナトが大声でみんなを激励する。そうだ。あのとき俺達は逃げるだけだったけど今じゃ互角以上に戦えている！

「どうもー!」ドシン!

モグゾーのどうも斬と大きな音。目を向けるとモグゾーのグレートソードが床に突き刺さり、ゴブリンと素手の取っ組み合いをしている。ホブゴブリンは……いない。あるのは床に大きな穴。もしかしてどうも斬でホブゴブリンと床ごと斬った? モグゾーはゴブリンにマウントポジションを取り手甲を付けた手でゴブリンを殴打する

「ははは、そんな力では俺に勝てないぞ!」

モグゾーどうしちゃったの? 僕から俺になってるよ。そんなモグゾーを見ている内にこっちの方も終わった。後は上位ゴブリンだけ……みんな武器を握り直し上位ゴブリンの前に立つ。上位ゴブリンは雰囲気飲まれたか1歩後ろに下がる

「先手必勝! 忌避突へアヴォイド!」

ランタが1歩下がったことを隙と見てアヴォイドを放つ。ロングソードを前に突き出し上位ゴブリンに突撃する

「おわ!」

しかし、槍で上手くないなしランタを俺達の方向に蹴り飛ばす。

「グワイ!」

俺、クザク、ユメがランタを受け止めて動けない隙に槍を捨て剣を抜いて後ろのシホルに襲いかかる

「ヒッー」「シホル！」

マナトはシホルを抱き寄せると背中を向け剣を受ける

「ぐうー！」「……マナトくん？」

マナトの背中が深々と斬られる。飛び散る鮮血。背中が血で染まっていく。あの時の光景を思い出す

「やめろー！ー！ー！」

急いでマナトの元に駆け寄りたいたいがランタが邪魔だ。上位ゴブリンが追撃をしようとしたがモグゾーが剣で吹き飛ばす。ランタを押し退けるとシホルに抱き抱えられているマナトの元へ

「マナトくん！ー！」

「マナト！ー！」

上位ゴブリンはランタ、モグゾー、クザクによって倒される。しかし、マナトは返事をしない。嘘だろ!?!こんな……最後の最後で……

「……がはあ……ごめん……痛みで意識飛んでた」

「マナト……」「マナトくん！」

「光よ……ルミアリスの加護の元に……癒光へヒール」

今度は俺にはなくちゃんと自分に使ってくれた。みんなが集まってくる



「みんなごめん。最後の最後で気を抜いちやった」

「いや、俺が・・・すまん」

ランタが謝る。あいつ素直に謝れるじゃん

「ヒロ！みんなゴブリンがいつぱい来た！」

チヨコが階段をかけた上がって来た

「ヒロ？ハルヒロ・・・ヒロ。おい！ユメだけじゃなく他の女まで」

「ランタ後で今は急いで逃げないと」

「いや、間に合わない」

窓から外を確認しているクザク言う。外を見るときもう目の前だ

「なんかボロボロやし逃げてきたんたちやうん？」

「あいつらが頑張り過ぎたってことか、適度にやれよ。適度に」

「ランタ無茶言うな」

「きつとシオリさんもこっちに向かって来てくれるからそれまでの辛抱だ」

暫く籠城して戦っているとユート達が後ろから攻撃してなんとかゴブリン達を倒せた。シオリは無茶をして大きな怪我をおったがメリイが適切な治療をして今は眠っているらしい

「マナト・・・俺達やったね」

「・・・ああ」

ハルヒロside

end

## 26話

目を覚ました。目に入るのは外の景色でもテント内でもなく、木の天井だった。周りを見渡すと石材をきれいに並べた壁で囲まれた部屋。明かりは松明が等間隔で掲げられている。

私はダムローでメリイに休むことを言って寝たはずだ。もしかしてそのまま起きずにオルタナまで運ばれた？

「みんなは……いない。それにここルミアリス教会じゃ……ないですよね」

私知っている石でできている建物と比較するが明らかに違いすぎる。ルミアリス協会では患者は普通中央の台に寝かされるが、ここにはそんな台はないし、汚く、そして

「……臭い」

何だろう……何の臭いか分からないが臭い。ルミアリス協会は血の臭いはしてもこんな何の臭いか分からない臭いはしない。

「誰もいないし……」

部屋から顔を出す。廊下も部屋と同様薄暗くどっちの方向も奥は真っ暗だった。

暫く待ってみても誰も来る様子がなかったため意を決して廊下に出て歩き出した。長い廊下の割に部屋数は少ない。部屋の中を確認しようにも鍵がかかっているので確認はできなかつた。

暫く歩くと曲がり角が見え、曲がろうとしたとき人影と出くわした。その人影は鎧を着ていたが露出している肌は緑色だ。そのまま見上げ顔を見ると鼻が潰れ、耳が小さく尖っていて、口は大きく両端から大きな牙が生えている

「オ、オ、オーク!？」

何でこんなところに? えつ? 何で? まずいこんな至近距離じゃ・・・。

オークはあたふたしている私を通りすぎていく

「へっ?」

オークは私達人間族や同盟国家と対立している。さつきみたいに対面すれば問答無用で襲ってくるはずだ。

「と、とりあえず隠れないと」

曲がり角に身を隠し様子を伺う。オークはこちらをうかがうこともなく去って行く。

「みんなは見当たらないし、オークも出てくる。どういうことなの?」

考えられるのはオークに誘拐された可能性。じゃあ他のみんなは? わからない・・・

「先ずはこの建物から出よう」

私は歩き出す。あれから何度かオークと鉢合わせになったり、視界に入ったりしたが、どうもここにいるオーク達は私の姿が見えないようだ。それにここは何かの軍事拠点らしき施設だと私は感じた

「それよりも出口は……」

結構な距離を歩いたが出口らしきものは全く見当たらない

「姿が見えないからオークについていく?」

ただ闇雲に歩くよりはオークについていけば何か外に出るヒントがあるかもしれないと思ひ。すれ違ったオークの後ろを付いていった。オークは私に気づかぬまま歩きとある扉に入ろうとした、オークが入った後体を滑り混ませて部屋に入る。

その部屋は何かの儀式をするためか祭壇と床に魔方阵らしき物が描いてあり、その魔方阵の中心にはオークがこちらに背を向けて座っていた。

部屋を見渡していると後ろを付けていたオークはさつきと出ていってしまい、背を向けているオークと2人きりになってしまった。

「しまった。さすがに扉を開けちゃうと見つかるよね……」

ここから出るにはまたここにくるオークを待つかこのオークが出ていくまで待つしかない。私は扉の横で待つ……

「(? / # / 0 2 4 1 ! / 3 # / 0 …… # / 0 6 ! 5」

オークはよくわからない言葉を喋りながら座っている。プギヤとか片言の言葉しか聞いたことがないけどこの言葉はえらく悠長に聞こえる。オークは呟くのをやめ、後ろの扉を見る。顔にはあまり派手ではないイレズミ、牙には何かの紋様が彫つてある。そして首には何かの動物の骨で作った首飾りをしている。上位オークだ。ずいぶん長く見ているなあと思ひ私も扉を見る・・・何も無い・・・違う。もしかして私を見てる!?! 私はオークの方に振り向く。その時、オークと目が合った。目が合ったオークは笑った

「はっ!」

目が覚める。私の目に入るのはテントの天井。周りを見る焚き火と何人かが集まっている影が見える。

良かった戻つてこれた・・・

いや、目が覚めたから夢だったのだろう。ゴブリンと戦っていたのにオークの夢を見るのも不思議だ。それにあの臭い・・・夢なのに臭いつて感じるものなの? それに最後

のオーク・・・他のオークと違って私を見つけて笑った・・・  
「起きた？」

「・・・あ、うん」

「何か食べれる？」

メリイが様子を見にきてくれた。「食べる」と言うと「暖めてくるから」と言つて焚き火に戻つていく。入れ替わるようにマナトが声をかけてくる

「今、大丈夫？」

「大丈夫」と言うと「ちよつと入るよ」と言つてテントに入つてくる

「すごい無茶をしたつて聞いたけど大丈夫？」

「まだダルいですけど何とか」

「メリイが凄く怒つてたからちよつと心配したよ」

「ははは・・・」

そっぴいえば「終わつたら説教」つて言つてたなあ・・・

「そっぴいえばマナト達は大丈夫だった？」

「大丈夫だった・・・つて言いたかつたけど最後の最後でハマしちやつて俺が大怪我した」

「大怪我つて大丈夫だったの？」

「今度は自分で治療できましたよ」

メリイがパンとスープを持って戻ってきた。マナトは「それじゃ、また」と去って行く。

「ありがとうメリイ」

パンとスープを受け取ろうとてを伸ばすが、避けられる。

「あ、あれ？」

「何か言うことない？」

「……えつと、ごめんなさい」

「全く、何で私達に相談せずに行動するの……」

食事を食べながらメリイの説教（小言）を聞く。お腹がいつぱいになると眠気が襲ってくる。「メリイごめん。もう寝る」と言って食器を渡す。メリイは食器を受けとるとすぐに出ていき、「戻ってきて横になり抱きついてくる

「わ、私ももう寝るわ」

メリイは少し赤い顔で言ってきた。私はうなずいてそのまま目を閉じる。

「……ごめんね。メリイ」

「……うん」

これからは無茶はやめよう……

翌朝、一部メンバーを残し、倒したゴブリンの身ぐるみを運べなかつた分の回収作業



を行った。シユウの盾は倒したゴブリンが持っていて取り返せたことを喜んでいた。

ハルヒロside

オルタナに戻り、戦利品の換金をしたところ、かなりの大金になった。そのお陰かヒロト達新人も団章をかうみたいだ。

「あら、こんな大人数でどうしたの?」

所長は奥のカウンターに座っている

「団章を買いに来ました」

「やっと買いにきたの?」

「遅くなつてすみません」

「まあいいわ。そつちの子も?」

「あつ、はい」

20シルバーを出し団章を受けとる。みんな団章を受けとると所長は笑い

「おめでとう。あなたは義勇兵見習いから正式な義勇兵になつたわ。私達はあなたを歓迎するわ」

手に持った団章を見る。これを手にいれるのにすごい苦勞をした・・・やっと手にい

れることができたんだ。俺達はレッドムーン事務所を出る

「よし！俺達の新しい門出を祝おうじゃないか！」

ランタが俺達の前に出て言う

「いいね。シオリさん達も誘って盛大にいこう。場所はシェリーの酒場で」

「いや、俺達の宿舎でだ」

「何でまた？」

「ほらあれだ・・・せっかく俺達だけで祝ってるのにキツカワとか？他のやつに邪魔されたくないっていうか？」

何だか歯切れが悪いなあ

「とにかく！みんな色々持ち寄って騒ごうぜ！」

その後もランタが必死に抵抗をして、ランタの希望通り俺達が使用している義勇兵宿舎で行うことが決定した

ハルヒロside end

## 27話

マナトパーティー、ユートパーティー、そしてヒロトとアオイちゃんの団章購入祝いのため、マナト達が利用している義勇兵宿舎に集まった。各自屋台で色々なものを購入したり、台所で作ったりして料理の準備をする

「飲み物は回った?・・みんな!団章購入おめでとう!」

マナトの温度で皆グラスを掲げ祝いの言葉を掛け合う。みんなよく食べ、よく飲んだ。ランタの言う通り他に邪魔されずに騒げるのはいい。たまにランタはいいことを言う

「あく、食べた食べた」

沢山食べたから動くが辛い

「食べ過ぎよ。私達は帰らなきゃいけないのに」

「はく帰りたくないなあ」

本当に帰りたくない・・・

「シオリ、ほな。泊まってく?」

「でも部屋借りてないし」

「同じ部屋で寝るんなら大丈夫やろ」

「うん。なら大丈夫かな？」

「メリイちゃんやアデイさんはどう？」

「私は帰るって言っちゃってるから」

「私は・・・泊まつちゃうと多分思い出しちゃうから」

メリイが暗い顔をする。そうか・・・メリイも見習い時代は義勇兵宿舎を利用してたから・・・

「あ、ごめん。うちそんなつもりはなかったんや・・・」

「うん。私がちゃんと吹っ切れていないだけだから・・・」

メリイは前より明るくなつたけど所々で過去に引つ張られている。やっぱりちゃんと吹っ切れるには・・・

「あの・・・夜も遅いですから、お風呂使ってから帰ったらどうでしょう？」

シホルが話を強引に変える

「共用お風呂でもみんな入るには狭くない？」

「そんなことないでえ、さすがに浴槽に全員入るのは難しいけど沐浴室に入るのは問題ないかなあ？」

へ～そんなに広いんだあ。ちよつと気になる

「うくん。帰らないといけなしいねえ・・・」

「夜も更けてるし・・・」

「あ・・・ごめんなさい」

さすがにお風呂に入っちゃうと遅くなっちゃうし無理か・・・

「ごめんね。シホルさん私のために・・・」

「あ、いえ。私こそ・・・」

シホルとメリイが謝罪合戦を開始しちゃったのでみんなで止め、2人と別れる。私もちよつと休憩してタオルなどを借りて沐浴室に移動する。

「入る時はみんな一緒に入るの？」

「そやなあ。でもシホルは長風呂やから最後まで入ってることが多いなあ」

「私達もやつぱり一緒ですね。男達は1人で入ったりしてるみたいですけど」

「ふくん。寂しくないのかなあ」

脱衣場の扉を開ける。かなり広い。6人が一緒に脱いでも余裕がある。これは沐浴室も期待できる。服を脱ぎ、タオルを持ち沐浴室の扉を開ける

「わゝ。広いゝ」

「でしよゝ」

広いと聞いていたが、沐浴室の広さに驚く。私の所の借宿の共有お風呂より大きい

「宿舎に住んでる人が使うので複数人が入っても問題ない作りなんですよ」

「流石に作りは一緒か」

「・・・ん」

体を洗い浴槽に入る。だが言われていた通り6人入るスペースがない。ジャンケンの結果、私を除く5人が浴槽に入る。

「シオリさんって腰細いですよね・・・」

「そう？」

シホルが私の腰を見ながら言う。私は立ち上がり腰に手を当てる

「わあ、ホントに細い」

「・・・うん」

「私はシホルの方が羨ましい・・・」

シホルのその大きな胸・・・

「そんな・・・私は太ってるだけだし・・・」

「そんなことないって言ってるやん」

「そうですよ。シホルさんは出るとこは出て、締まっている部分は締まっていますよ」

「そんなこと・・・ひゃん。チョコさんどこ触って」

「・・・胸」

チヨコちゃんは胸を揉みながらさせながら言う。すごい……揉む度に指が沈む  
「や、チヨコさん……」

「……固くなってきた」

「はいはい、チヨコやめよう」

リンがチヨコを抱えてシホルから離す。もうちよつと見たかった……つて言うか私も揉んでみたい

「あの……シホル。今度揉ませてくれない？」

「えっ? やっ」

シホルは自分を抱く。大きい胸が強調される。すごい……それに比べて……自分のを見る

「……」

チヨコと目が合う。私達は無言で握手する。チヨコとは気が合いそうだ……

「そ、そんなことより、初めの方はそんな腰が細うなかつたよね?」

「ああ、それは多分ギルドのせいかな?」

「ギルド?」

「ネクロマンサーになるには魂を見る必要があるんですよ」

「魂?」

私はギルドで体験したことを皆に話す。

「それじゃあ。ネクロマンサーって私達魔法使いと同じようなものなんだあ」

シホルが感心する。そう言えば先生も魔法使いと同じようなものと言ってたなあ

「そんなことよりその薬を飲めば痩せられるんですか？」

「でもかなり苦しいよ」

「ムムム」

リンが悩む。

「リンは痩せなくても充分細いと思うなあ」

「え〜でも掴めますよ」

リンは腰の肉を摘まむ。

「私も摘まめるよ」

腰の肉を摘まむ

「そんなに細いのにな？」

「細さは関係ないよ・・・ヘックシ！」

体を冷やし過ぎちゃったかな？

「ああ、風邪引いてしまうやん。変わるわ」

「あ、ユメ、私長いから・・・」



「ええよ、うち早いから。シホルは長いし、1人やと寂しいやん」

ユメが浴槽から上がり、私が入れ替わる。はあ温かい」

「ひゃ、ちよつとチヨココちゃん」

「・・・何？」

「どこw揉んでるのwww」

「・・・腰」

チヨコは私の腰を揉む。かなりくすぐつたい。

「りんwww助けてwww」

「はいはい」

リンはチヨコを抱えて離す。かなりイタズラ好きだなあ。そんなことより・・・

「ていー!」

「えっ、やつん」

無防備なシホルの胸を狙う。おお、何だこれ?これが巨乳?めちやくちや気持ちいい

「シオリさん・・・やん・・・やめて」

いや、やめられませんよこれ?

「も〜シオリさんも〜」

リンが私の手をシホルの胸から引き剥がす。

「あくリンも触ってみてよやめられないから」

「・・・やりません」

ちよつと考えたな

「そろそろ私は上がりますね」

「・・・私も」

リンとチヨコは先の上がるみたいだ

ドタ！ガタツ！

窓の外で何かが暴れる音がする

「えっ！何？」

「もしかしてまたランタが覗きにきたん！」

「嘘！そんなことするやつパーティーにいるの？」

ユメの声で手元にあるタオルを手に取り体に纏わせる。ユメだけはタオルの位置が離れていたため、手を伸ばし取ろうとする

ガラガラッ！！

## 28話

ハルヒロside

宴会ももうほぼお開き状態、女性達は風呂に入るみたいで女子部屋に移動していった。マナト、ユート、クザクの3人はアデイとメリイを家に送りに行った。ぶっちゃけた話アデイさんがいれば問題はないと思う。

ランタ、シユウ、ヒロトの3人は酒を片手に談笑。モグゾーは空の皿を片付けようとしている。

「モグゾー、後片付け手伝うよ」

「ううん。空のお皿を水に浸けておくだけだからいいよ」

「そう?ごめんね」

俺は3人の方に向かう。4人と他愛ない話をする。

「・・・そろそろか」

「んっ、どうしたランタ」

ランタが宿舎の2階を見ながら呟く。そして「行くぞ」と言って歩き出した・・・その方向は沐浴室?

「ランタ！お前まさか！」

「ふっ、俺からのお前たちへのサプライズだ」

「？」

「危険な賭けだったがシホルに助けられたぜ」

「こ、こいつまさか義勇兵宿舎で祝おうって言ったのは・・・」

「俺達は団章を買い男になった・・・だがまだ子供の部分はある。そして！今女達は風呂に入っている・・・俺の言いたいことは分かるだろう」

「・・・!!」

シユウとヒロトの2人はランタのやろうとしていることに気がつく

「まさか覗き・・・」

「だ、ダメですよそれは」

「バカ野郎！俺達は普段どんだけ我慢して生きていると思ってる。ちよつと位還元してもらってもバチは当たらねえ」

訳のわからないことを言い出して2人を説得し始める

「ランタ俺は行かないぞ」

「ふん。前回失敗したから日よりやがったか」

「失敗したんですか!?!」

「チツ」

舌打ちって、まさか1人だとあれだから共犯者が欲しいとかじゃないだろうな

「確かに俺達は1度失敗した・・・だが俺達は解散せずやっていき団章を購入した・・・この事から！女というものは心の奥底では覗かれたがっているんだよ！」

「いや、それはない」

ランタの訳もわからない演説に手を振って否定する2人

「とにかく！俺は行く！俺と共に行ってくれるやつはいないか？今なら絶対にバレない方法もある」

「・・・俺は行く」

えっ!? シュウ行っちゃうの？今の何処にそんな要素あつたの？

「本当にバレない方法があるんだな」

「ああ、任せろ。お前こそ本当のパートナーだ。ありがとう」

「へへっそんなことないですよ」

シュウはランタの隣に並び2人でヒロトを見る。

「お前はどうかんだ？男になるのか？」

「・・・俺そんなことできませんよ」

そりやそうだ。ヒロトのパーティーはヒロト以外全員女性だ。覗きがバレてしまう

とヒロトの居場所はない。っていうか何でそんなにシンクロしてんだ・・・  
「何だよ。ヘタレが。シユウ行こうぜ」

ランタとシユウは沐浴室の方に消える。残されたのは俺とヒロトだけだ。

「ど、どうしましょう。ハルヒロさん。かなりまずいですよ」

「・・・はあ。止めに行ってくる。ヒロトはモグゾーと一緒に行動するか、部屋に戻るかして怪しい行動を取らないようにして」

「はい」

俺はヒロトと別れランタ達を追う。沐浴室の前まで行き、入口に入らずに横の草むらに入っていく。暫く進むとランタとシユウがうつ伏せで隠れているのが見えた。

「ランター・シユウ！」

「・・・ハルヒロ（さん）」鼻血ダラ〜

「!？」

こちらを振り向いた2人は鼻血を流していた。「どうしたんだよ？」と聞くと2人は沐浴室の方を指さす。

「うん・・・ひゃあ・・・あつ・・・」

「!？」

沐浴室の方に耳をすますとシホルのあえぎ声が聞こえてきた。

な、何が起こっているんだ？シホルもしかしてアレをしているんじゃないや．．．いや、女性達で沐浴室に行ったはずだ他のみんなは？頭の中ではシホルがアレしちやつてい姿が出ては否定することはいっぱいになり混乱する。

「や、チヨコさん．．．」

「．．．固くなつてきた」

どうやらチヨコがシホルの胸を触っていたみたいだ．．．でも、「．．．固くなつてきた」つてどこが？あそこだよね？あそこなんだよね！

「．．．ハルヒロ」

何だよ俺は忙しいんだ。俺は澁々ランタを見るとランタは鼻を指さす。鼻を拭うといつの間か鼻血を流していた．．．

「ふっ。やつぱり来てくれると思つていたぞ」

「俺は．．．」

「しー。こんな刺激的な話、無視できねえよなあ。やつぱりお前も男だ」

確かにこれは刺激がすぎすぎる。沐浴室ではシオリのウエストの細さの話になっている。

「えゝでも掴めますよ」

「私も摘まめるよ」

男達がいらないからなのかさつきからきわどい言葉が聞こえてくる。その言葉を聞くたびに俺の頭の中ではいけない想像図が出来上がっていく……。こんなの外で耳をすますだけで充分だ……。今回はマナトとモグゾーのような体の大きいやつはいないし、この中で一番大きいシユウが台になっても届かない。ランタ達も満足したら戻るだろう。それまで俺もこの……

「……よつと」　ゴトツ

ランタはどこからか台を持ってきてきて窓の下に置いた

「ランタ！お前いつの間にかそんな物を！」

「しー。へへっ、パルピロ興奮するなよ。順番だ」

「そんなことじゃ……」

「あ？ああ、モグゾーがよく廃材で人形作ってるだろ？それを少し貰って作ったんだよ。いや俺は何やらしても完璧だから」

モグゾー！何やってるんだよ。もうちよつと考えろよ！相手はランタだぞ！

「おし。一番は作成者の俺な」

「……ダメだ」

シユウがランタの肩を掴みながら言った

「んあ？俺が準備してやつ……。お前まさかあの中に好きなやつがいるとか？」



ランタ指摘にシユウの顔が赤くなる

「ははくん。凶星か」

「べ、別に・・・俺はチョコなんて・・・」

「あっ・・・」

俺の声で自分が口を滑らせてしまったことに気づいたシユウは耳まで真っ赤になる

「へへ、チョコかく、ふくん。俺はあんなチビツ子興味ねえから安心しろ」

ランタは台に足をかける

「それでも俺以外にチョコの裸を見せる訳には！」

「おま！別に付き合ってる訳じゃねえだろ！」

ランタとシユウが取っ組み合う。その音はかなり大きい。

「お、おい。そんな暴れると・・・」

「もしかしてまたランタが覗きにきたん！」

ヤバイ覗きがバレた！逃げないと

「おい！バレたぞ！今逃げたらまだ・・・」

「うるせえ」

「うるさい」

ダメだ。こちらの言うことを聞かない。2人は揉み合いながら壁にぶつかり・・・

ガラガラッ!!

「わぁー!」「うわ!」

壁を破壊してしまった。

沐浴室内では浴槽に入っている5人は体を何とかタオルで隠せてるけど・・・浴槽に入っていないユメはタオルに手を伸ばした状態で固まっている。

お湯で濡れた髪に体、胸の膨らみ。そしてピンクのアレに大切な人にしか見せないであろう場所。その全てが俺の目に入る。

サッ!

「あ、・・・ごめん」

ユメが顔を赤くしてタオルを手に取り隠す。その行動で我に帰りユメから視線を外す。

「イテテ・・・シユウ何やってんだよ」

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい」

ランタが肩を押さえながら立つ。シユウは謝罪を口にし、倒れた体勢のまま動かない。シオリは無言でランタを指差し。

「安寧を生きるものに死の告知を・死の宣告へモーターレイ」

シオリの指先から丸い輪が飛んでくる。ちよつと待つて、あれに当たるとランタ

が・・・

「どわつと！」

ランタ大きく避ける

「お前！いくら甦らせられると言つてもなあ。やつて良いことと悪いことがあんど！」

「安心してください。これを受けて死ぬと甦らせられません。完全に死ねます！」

「なおさら悪いわ！逃げるぞシユウ・・・チツ。ハルヒロ！」

「えつ、ちよ」

ランタは俺の手を取り走り出した

「アホー！バカ！もく、1度ならず2度もくもうゆるさんく！」

「これシユウ・・・よね？」

「・・・そうですね」

ユメの怒声が聞こえる。シユウは逃げずに女性達に捕まった。そう言えば俺2人を止めるためにここに来たんだよな。でも結局覗きに参加しちゃったし、今は逃げる・・・はあどうしよう・・・

## 29話

「はく何でこうなつちやたんだろ?」

俺は現在ランタと別れ、庭の隅で身を屈めて隠れている。前回は何とか許してもらえたけど今回ばかりは無理だ。その・・・ユメの大事な所を見てしまった。

ヒュン

目の前に何か横切る。横切った方を見ると木に矢が刺さっている

「うわ!」

「・・・何か言うことある?」

声のする方を向くと寝間着に弓矢と剣鉞を装備したユメが立っていた。

「どうして・・・」

「宿舎側からは見えなくても外から見たら丸見えやったで」

しまった。外からは考えてなかった。けれども・・・

「ちよつと待つて、それは洒落にならないぞ」

「シオリにお願ひすれば大丈夫やろ?」

殺るき満々だく当然だよね・・・だつてばつちり見ちやつたし。ユメは矢をつがえ、目

を瞑って開く。早目まで使って本気だぞ。

「……あっ」

弓を下げ体を屈めて小走りで近づいてくる。まさか劍鉞で!? あんなので切られたらメチャクチャ痛いぞ!?

「ユメ待って、劍鉞はやめて。せめて別の方法で……」

「違う。ちよつと黙ってて」

ユメはそのまま通り過ぎて矢の刺さった木の前で止まる。「ユメどうしたの?」と近づくと、小声で「しゃがんで!」と腰を引つ張られて屈まされる。ユメのやつ一体どうしたんだと目線を追うとマナトとシホルが向かい合つて立っていた。

「……でランタとハルヒロくんを探している」

「あく、全くあの2人は。俺の方からも言っておくからシホルはもう遅いから部屋に戻っている」

「あの……マナトくん!」

「ん?」

シホルは手を組んだり後ろに回したりして

「あの時はありがとうございます」

「あの時? ああ、俺も夢中だったから」

「私がつとちゃんとしていたら……」

「いや、俺の責任だよ」

「いえ、私が……」

「俺が……」

お互いが自分のせいと言い合ってる。マナトとシホルである時……上位ゴブリン相手に負傷したことが

「あはっ」「フフツ」

2人は笑いだす。空気がちよつと緩くなつた気がする

「んんっ、マナトくん」

「どうしたんだい？」

「……マナトくんのが好き」

「……」

えっ!? 告白した! シホルがマナトに! マナトどうなんだ!?

「……シホルが俺のことをどう思ってくれていたかは薄々気づいてた……でも俺はそんな資格はないと思つてた」

「……」

シホルが震える。そういえば前にマナトは自分のことを仲間扱いしてもらえよう

なやつじゃないって言つてた気がする……

「あ、そうじゃないんだ。最後まで聞いて欲しい。あの時、俺が助かった時、師匠に仲間を信用してないって怒られた。それでずっと仲間のことを自分なりに考えてきた。そしたらさ……みんなに対しての自分の気持ちに気づいた……みんなには恥ずかしくて伝えれてないけどシホルにだけは伝えたい……俺もシホルのこと……好きだ」

「……マナトくん」

マナトが1歩踏み出す。シホルも遅れて1歩。2人はゆっくりと近づいてゆき抱き合つた。それを呆けて見ているとユメの方から「はふう」と声が聞こえたのでユメの方を向いて静かにのジェスチャーをする。ユメはジェスチャーを見て急いで両手を口に当てる。顔を元に戻すと2人は抱き合つたまま見つめ合っている。シホルが目を閉じた！まさかこのまま……。俺の予想通り、2人の顔が近づいていき、マナトとシホルの唇が触……

「うわああああ。やめてくれ〜」

宿舎全体に響くランタの絶叫。2人はその絶叫に驚き離れ、辺りを見渡す。完全に雰囲気を壊されて居心地が悪そうに頭をかくマナトとモジモジしているシホル

「その……うん。部屋まで送るよ」

「う、うん。お願いします」

2人は並んで歩いていき、どちらかともなく手をつないで去っていった。ランタの邪魔がなかったら2人ともキ、キスしたよな？もくあいつはく

「良かったなくシホル」

「うわっ！」

ユメが抱きついてきた。ユメから香る風呂上がり特有の甘い香り……あの光景が思い出される。落ち着け俺！

「ユ、ユメ!?!は、離れて」

「あ、ごめんつい……」

いや、俺もあんなの見たら……

「あの……ユメ。ごめ、じゃなくて覗いてごめんなさい」

「あ、うん。別にええ……いや、あかんのやけど……その……見たやんなあ」

「あ……う、うん……」

ユメは赤い顔をさらに赤くする

「不可抗力というか……本当にごめんなさい」

俺は土下座する。暫く経っても何も反応がないので顔をあげるとユメは赤い顔をしてモジモジして

「……つに……裸……いい……って」



「へっ？なんだって？」

あまりにも小声で聞き取れなかった。ユメはプルプルと震えて

「も〜アホ！」

弓を大きく振りかぶり、俺の頭めがけて降り下ろす。土下座の体勢をしていた俺は回避できるわけでもなく

「イテ！」

まともに受ける。結構痛い

「反省し！」

踵を返し、去ってゆくユメ。一応これで終わりなの？暫く待っても何もなかったので部屋に戻って寝た

朝起きるとランタがいない。朝食の当番でもないし・・・もしかして戻ってきてない？そう考えながら外のテーブルまで出てくるとランタが土下座をしていた

「ラ、ランタどうしたの？」

「何か僕が来たときからずっとしてた」

食器を並べにきたモグゾーが答える

「おはよう」

「おはようございます」

ユメとシホルが出てきた。ユメにもう一度謝らないと・・・

「あのユメ昨日「覗きをして申し訳ありません！今後このようなことは一切行いません  
！」」

「ランタ？」

「おかしい。前覗いた時は最後まで謝らなかつたのに。でも何でこんな必死に？」

「ハルヒロ、おはよう」

後ろからシユウに声をかけられる。

「あれ？シユウはここに泊まったの？ってうわっ！」

シユウの両頬は真っ赤に腫れている。

「大丈夫？それ？」

「覗きの罰だ。ハルヒロは大丈夫そうだな」

「ああ・・・」

「どんな罰を・・・すまない」

シユウは話を中断して炊事場に走る。そこにチョコとリンがくる

「ハルヒロさんおはようございます」

「あ、おはよう」

「シユウから聞きました。2人でランタを止めようとしたんですよね？結果的には覗いたので罰を受けてもらったんですけど大丈夫ですか？」

「えっ、うん大丈夫」

シユウが両手に水が入ったコップを持ってきて2人に渡す。2人が礼を言うと「悪いことをしたから当然だ」と言つて離れる。離れる際、俺にだけ見えるようにサムズアップした。そうか・・・シユウありがとう。

「ふああああ。シオリさんとランタのお仕置きをしたので眠いです」

「さ、3人で？」

「いえ、5人で」

リンが指を指す。振り向くと眠そうなヒロトとアオイが扉から出てきたところだった

「あ、おはようございます」

「・・・おはようございます」

「私達が戻った後も続いてたの？」

「・・・はい。お陰で寝不足で」

会話の様子だとかかなり遅くまでやっていたみたいだ。ヒロトが近づき耳打ちしてくる。

「ハルヒロさん。覗きに参加しなくて正解でした……もし覗いてたら……」

「……ヒロトくんも覗きたかったの？」

アオイがいつも間にか後ろにいた。

「あ……いやそんなことは……」

「私……ヒロトくんにだったら」

アオイがヒロトに迫る。アオイって絶対ヒロトのこと好きだよな。ヒロトも嫌がっていないさそうだしさっさと告白すればいいのに

「何だよ！お前らも一緒に覗いてたのに……何で俺だけこんな！」

急にランタが立ち上がり、俺達の方を指さす。ランタは泣いていた。

「ランタ大丈夫か？」

「うるさい！裏切り者！俺は、俺は……」

「ふくん。俺は？」

声のする方を見るといつの間にか来ていたシオリがゴミを見るような目をして立っていた。ランタはシオリを見ると再び土下座をし

「いえ、何でもありません！覗きをしてすいませんでした！」

「まあいいです。ちゃんと一晩中していました？」

「はいー」

「嘘ですね。私、離れていても相手の様子が分かる魔法が使えるのですよ。昨日あれだけしたのに・・・まだ足りないようですね」

ランタはシオリの言葉を聞くと四つん這いでシオリの元に行き、すがりつく

「一晩中はかわいいそうだから疲れたら休んでいいって言ってたじゃないですかあ！休んでいる以外はちゃんとしてました！」

一晩中土下座させてたの!?!みんなちよつと引いてるよ

「嘘ですよ。そんな魔法使えませんよ。その様子だとずつとやってたみたいですね」

シオリの言葉を聞くと手を離し脱力するランタ。一体何されたの？

あのあとヒロトに聞いてもはぐらかされるだけで分かったことと言えばシオリを怒らせてはいけないうってことだけだ。ランタは暫くパーティーのヒエラルキー最下位で特に女子2人に使われていた・・・

ハルヒロ side end

o t h e r      s i d e

「[[[[乾杯]]]]」

俺達5人は仕事終わりの恒例行事。シエリーの酒場での酒盛りをいつもの通り始めた

「ングツ、ングツ、はあ〜」

あゝ仕事終わりのビールがうまい！

「そういえばあの噂どうなんだろうな？」

「あの噂？」

「ほら、あれだ。ソウマパーティーの」

「ああ・・・」

仲間の戦士が最近流れている噂について言ってきた。噂というのはソウマパーティーが克蘭を作るという噂だ。

意外なことにソウマパーティーはこの克蘭に属したことはない。ここオルタナ周辺で活動するならともかく、人間族や同盟国家の勢力圏を離れば離れるほど、モンスターや敵対種族は手強くなるし、1度に相手にする敵も多くなる。だから勢力圏外で成果を上げるには克蘭に入って活動するのが普通だ。

それなのにソウマパーティーは6人だけで成果をあげ続けている。

「ソウマパーティーがクランを作るっていう噂か・・・」

どこからか湧いた噂。あのソウマパーティーがクランを作るらしい。ソウマ位のネームバリューなら強い義勇兵が集まってきぞ強いクランができるだろうな。

それに噂は広く伝わっているらしく、ソウマパーティーがよく利用しているシェリーの酒場は満員で立ち飲みも発生している始末だ

「俺達には関係ない話だよ」

「だけだよ・・・」

俺達みたいな弱小パーティーが入ろうにも断られるに決まっている。ここに来たときにあまり者同士でパーティーを組んで、危険なことを避け続けて今まで誰も死なずに生き残ってきた俺達に・・・

「ソウマじゃねえか!」「ソウマ!」

噂をすれば何とやら、ソウマパーティーがシェリーの酒場に入ってきた。カウンター近くの目立つ場所のテーブルに座っていた義勇兵が「ソウマ!ここに座れよ!」と席を譲る。

「羨ましいねえ。俺達なら逆に「どけ!」とか言われちゃうぜ絶対に・・・」

その後、ソウマ達も飲み始める。周りの奴等はソウマの方をチラチラ見ている。そんなあからさまに見ちゃって、落ち着いて飲ませてやれよ。

「そう言うお前もチラチラ見てるだろう」

「うぐう」

「バカなことやってないで飲めよ」

仲間達に飲まされ、酔いも回っていい気分になってくるとソウマのことも忘れて仲間達との会話に花が咲く。そして・・・

「・・・俺たちは克蘭を結成することにした」

「えっ!?!」

その言葉が聞こえて酔いが覚めた。酒場全体もどよめいている。

「おい、あの噂ホントだったのかよ」

「けど俺達みたいなのはお呼びじゃねえよ」

仲間もバカな会話をやめ、ソウマの克蘭結成について話している。まあ確かに俺達には関係ない話だ・・・

「目的は、旧イシュマル王国領、不死の天領〈アンデットDC〉への侵入だ」

みんなソウマの言葉を聞くために黙る。ソウマは特に声を張り上げていないのにシエリーの酒場全体に響く

「俺達は、不死の王へノーライフキング〈復活の兆候ありとの情報を掴んでいる。その調査と、ノーライフキングが復活した場合は即座にこれを討ち滅ぼす。当然、容易くはな



いだろう。そのための手段を探り当てないとならない。力も必要だ。俺達6人だけじゃ足りない。みんなの力が必要だ」

すげえ……ノーマルフキングが復活するかも知れねえから調査して、いたら倒すつて……これが最強の義勇兵か……。

周りも割れんばかりの歓声や拍手をしてまるで祭りのようだ。ソウマは手を上げる。すると歓声や拍手はピタツと止まる。

「どうか俺達に力を貸してほしい！力がない者も、我こそはという者も、参加を申し出てくれ！」

わつとまた歓声が上がリ、パーティーリーダーらしき人がソウマに群がる。

「すげえなあ……もうあんなに集まってるぞ」

「……力がない者か……」

「おいおい、リーダーまさか参加するつもりじゃないだろうな？」

「今まで危険を避けて頑張ってたのよ」

「でも……」

「だけだよ。どこかで勝負しないとずっとこのままだぞ」

「現状維持でもいいじゃない！」

パーティーメンバーがケンカを始める。皆をなだめながら考える。俺達弱小パー

ティーじゃ対して役に立たねえと思うがタクトがそんな俺達でも必要って言ってくれている。パーティメンバーは賛成反対半々だが、俺は参加したい・・・。説得に時間がかかりそうだが頑張るしかない

o t h e r     s i d e     e n d

## 30話

「んっ」

急な意識の覚醒。まるで誰かに無理やり起こされたような感覚。意識があるのだけれど体が瞼が起きるのを拒否している。

「何〜?」

私は瞼を開ける。

「・・・えっ?」

目に入ってきたのは私の部屋ではなくどこかで見たことのある木の天井。これって夢に出てきた・・・

「えっ?ちよつと・・・」

体が勝手に動く。起き上がりその場に立つ。動く視界には夢で見た壁に等間隔で置かれた松明。前と違うのは床に何か魔方陣がかかっているくらい。

「これってホントに夢?」

私は自分の部屋のベットで就寝して目が覚めたら別の場所・・・普通なら夢だ。夢のはずだ

ガチャ

扉が開く音。誰かが入ってきた。足音が近づいてきて誰かが視界に入る。

「やっぱりオーク……」

髪を白く染め、顔には刺青、牙の模様はワンポイント程度、恐らくだが上位オーク。そいつは私の前で立つと恭しく礼をして壁際に。その後も上位オークが入ってくるが、皆視界に入った時に礼拝して壁際に並んでいく。そして最後に入ってきたオーク。顔にはあまり派手ではないイレズミ、牙には何かの紋様が彫っており、動物の骨で作った首飾りをしているオーク。あの時最後に出会ったオークだ。

「あなたが私を呼んだの？」

オークに問いかける。しかし無視。何度も問いかけるが無視。どうやら声を出しているのだけれど私の体が出していないみたいだ。

そのオークは私の前に立ち恭しく礼をすると懐から何かを取りだし私の顔全体に塗る。塗り終わると魔方阵の外に出て

「#9，2269?…2!#9，く#@—」

何かを唱え始めた。その瞬間頭痛と顔全体が熱くなる。身をよじろうとしても体が出ない。それを聞かない。それが終わるまで私は耐え耐えた。何かを唱え終わったオークは再び礼をするとか私の意識は急速に落ちてゆく……

トントン

「・・・んっ」

誰かが扉をノックする音で私の意識は覚醒した。

「・・・うわっすごい寝汗」

服だけではなくベツトにまでぐっしよりと汗の跡・・・多分じゃなくて確実にあの夢が原因だろう

「いったいなんだろう・・・」

「マナトだけど起きてる？」 トントン

えっ？ マナト？ 今日昼からレッドムーン事務所で依頼の確認をするんだった。私

は慌ててベットから降りドアを開けて・・・

危ない！今寝汗で全身ずぶ濡れだった。着替えないと

「あ、大丈夫。まだ朝だよ。今日の事なんだけど別の日にできないかなって」

「えっどうして？」

「実は俺やユートの連絡ミスでシユウやハルヒロが出かける準備をしちゃってて、悪いのだけれど約束をずらして欲しいなって」

服を脱ぐ手を止める。ああ、そういうゆう事ですか

「ごめんね。この埋め合わせはするよ」

「分かりました。戻ってきたら連絡ください」

「うん。風邪引かないように気をつけてね」

あ、寝汗かいたちやっただって言ってたっけ・・・恥ずかしい。でも予定が空いちやっただな。メリイにも連絡しないと

着替えを済ませ布団を干す。今日は天気もいいし乾くよね。私は外に出てメリイが住む借宿に向かう。メリイの借宿は1階部分がカフェテラスになっており、メリイはそこで本を読んでいた。私が近づくとメリイは顔をあげる

「どうしたの？今日はずいぶんと早起きじゃない」

「ちよつとね。何読んでるの？」

「恋愛小説」

メリイは本に葉を挟むと私に渡してきた。表紙には貸し本屋の判子。中身を流し見ると同姓同士の恋愛物

「メリイこういうの読んだ」

「結構人気だったから気になって」

「面白い？」

「読んでからのお楽しみ。何か用事だったんだじゃないの？」

私は本を返し、今日の予定はなくなった事を伝えた。

「どうしよっか？」

「メリイは何か用事ある？」

「特にない。シオリも特に用事がないし、しばらくここでゆっくりしたら？」

うん。メリイの言う通り予定はないし、ゆっくりしようかな？メリイを見ると何だか怪訝な顔をしている

「メリイ？どうしたの？」

「シオリ・・・あなた今どう「なあ？」」

声をかけられ振り向くとブレストアーマーを着た女性が立っていた。

「私は荒野天使隊へワイルドエンジェルズのユウゴ。あんたはオリオンのシオリでいいん

だよな?」

「オ里昂?」

「ん?そつちは神官のメリイ?だよな」

「ええ」

「あつれくメリイってやつといつも一緒にいるのがシオリって聞いてたんだけどなあ」

「オ里昂ってのはわからないですけど私はシオリです」

ユウコと名乗った女性は笑顔になり

「やつぱりそうだよな!シオリ、うちのリーダーが話をしたがっているんだ。ちよつと付き合ってくれよ」

荒野天使隊へワイルドエンジェルって確か女性だけのクランだったよね

「ああそうさ」

「あ、ごめんなさい」

何だろう。今日は思った事を口に出しちゃうなあ

「で、どうなんだい?」

私はメリイを見る。メリイは頷く

「いいですよ」

「よし!じゃあついてきてくれ。あ、今からマライカ、知ってるだろ?に行くから昼の心



配はしなくていいぜ」

ユウコはテーブルから勢いよく立ち上がるときさつきと出ていく。ああ、支払いがまだなのに。

「ああ、すまない。せつかちでさ」

ユウコは大きく笑い。私達を待つ

「シオリ、ちよつといい？」

「どうしたの？」

メリイは私の腕を掴むと店舗の隅の方に移動する

「あなたやっぱりおかしいわ」

「えっ？」

「喋ってもいないのにあなたの声が聞こえる」

「えっ、どういうこと？」

「その・・・何か考えていることが直接聞こえるような？」

考えていることが聞こえる？そんなことありえない・・・

「それ。今考えていることが聞こえる？そんなことありえないって聞こえた」

「・・・嘘」

「おい。まだか？」

「あ、ごめんなさい。私の部屋に荷物を取りに戻るからもうちよつと待っていて」  
「おう」

メリイは腕を取つて2階に上がり、私を部屋に連れ込む

「とにかく。聞いてる感じ相手に聞くような考えは相手に伝わってると思つて」  
「ええつ？」

相手に聞くようなかあ。そんなこと言われても……いったいどうやって？

「私もわからないのだけれど、聞こえたり聞こえなくなつたりしているから何か条件があるのよ」

「条件？」

「うん。聞こえる内容が相手に伝えたり、聞いたりする内容だからそれを考えないようになすれば多分大丈夫」

いきなりそんな事言われても……。メリイは「行くわよ」と言つて私を連れていく。  
カフェテラスの出口で待つていたユウコと合流し、マライカに向かう。

北門の大通りの1つ花園通りの近くに、マライカと呼ばれている料理屋がある。看板が出てゐるわけではなく、店長の名前がマライカさんだからそう呼ばれている。マライカを利用する客はほぼ100パーセント女性だ。別に男性お断りじゃないのだけれど女性だらけだから男性は入りづらいのだろう。だから女性も足を踏み入れやすく、居心

地がいい。こういう店は他にもあるのだが、値段も味もお手頃で美味しいので女性だけでの食事はマライカが第一候補になる。

無論、人気店なのでいつも混んでいる。私は人が多いのと外で待っている人に急かされている気分になるのが嫌で利用したことがない。

私達が入った時間はお昼前はかなり早い時間だったので空きテーブルがちらほらあった。

マライカの内装を見ながら2階に上がる階段を昇っていき、義勇兵らしき人達が集まっている場所に移動した。

「カジコ姐さん！連れてきたよー」

カジコと呼ばれた長身の女性がこちらを向く。メリイと同じくらいの美人だ。いや、メリイは綺麗な美人、カジコは格好いい美人。ちゃんと住み分けはできている。

「ははっ、ありがとよ。しかし喋らずに声が聞こえてくるなんてネクロマンサーのアビリティイカ？」

メリイが「もう」と言ってお尻を叩く。あ、いけないいけない。

席に座るように促されメリイと座る。ユウコはカジコの後ろのテーブルの席に座る。

「荒野天使隊へワイルドエンジェル」の頭をやっているカジコだ。えっと、そっちがシオリでそっちがメリイ。あつてるよね？」

「はい。ユウコさんから話があるって聞きました」

「ああ、話つてのは今いるクランオリオンから私達のクラン荒野天使隊へワイルドエンジェルにくら替えしてもらおうと思つてな」

「あの・・・私達別にオリオンに入つてません」

カジコは周りの人に声をかける。声をかけられた内の1人が席を立ち紙を持ってくる。それをカジコは受け取つて内容を見ながら

「オリオンの奴らと依頼を受けたり、オリオンの義勇兵見習いと行動したりしてるけど入つていないと言うのかい？」

「オリオンの義勇兵見習い・・・もしかしてマナト達のことですか？」

「ああ、確かそんな名前のやつだったな」

「マナト達はオリオンに入つていないし、オリオンの人達と依頼を受けたのはたまたまです」

カジコは受け取つた紙を丸めながら「そうなのか？」と聞いてきたので「そうです」と答えた。

「なら問題はないな。どうだ？入らないか？オリオンに負けない位有名なクランだと思つている。入つて損はないぞ」

クランにスカウトされるのは嬉しい・・・でも荒野天使隊へワイルドエンジェルは・・・

「もし入った場合、今私のパーティーにいる男性は？」

「抜けてもらう。代わりのメンバーか？必要ならこちらで用意する」

「やっぱり・・・荒野天使隊へワイルドエンジェル」は女性だけしか所属していないクラン。もし入ったらヒロトを追い出さないといけない。

「すみませんがお断りさせていただきます」

「どうして？」

カジコの横に座っていた女性が口を挟む。

「私達の所には男なんていないのよ。あんなやつら、どんなに取り繕っても一皮剥けば私達女性を性欲の捌け口にししか見てないのよ。メリイ、あなたもそういうのが嫌でその子と一緒にあったのでしょ？」

「ちよっ！それどういふことよー！」

メリイが顔を赤くして立ち上がる。メリイと一緒に？どういふこと？

「キクノ。その話は噂だ」

「あ、ごめん、カジコ。つい・・・」

「あの、噂って？」

「シオリ！」

「カジコさん知りたいです」

カジコは天井を見上げ「あゝ」と唸ってからこちらを向く

「メリイ。ちよつと気分が悪くなるかもだがすまない。シオリ、ちよつと前のメリイのこと知ってるだろ？ パーティーを抜けたり入ったり。理由を知ってるやつは何も言つて来なかつたが、心ないやつや、知らないやつはメリイの事について色々悪口を言つたんだ。その中に性悪メリイって渾名があつた」

私はメリイの手を握る。大丈夫

「性悪。パーティーを男と例えて取つ替え引つ替え。まあ男遊びだ。ところがシオリ、あんたのパーティーに入ったメリイはすぐに抜けずにずつといる。それにそんな風になが良すぎる。噂好きには2人はできてる風にしか見えん訳だ。性悪メリイはシオリの女に。シオリはノーマルをあつちにする魔性の女だつて」

ちよつとそんな噂が・・・私は一応ノーマルよ。顔が赤くなつてる気がする。メリイの方を見ると赤い・・・あの感じメリイはその噂知つてた？

「まあ、単なる与太話で信じてるやつは・・・ってホントかい？」

「違います！」

私とメリイは否定する。カジコは笑いながら

「まあ、信じてるやつもいねえから気にするな。因みに男厳禁のはあくまでも克蘭内だけだ。プライベートで付き合う分は一向に構わないよ。で、どうだい？」

「ヒロト・・・私のパーティーの男性は一緒に頑張ってきた大切な仲間です。そんな仲間と別れることなんてできません。この話は断らせてください」

カジコは頭をかきながら「・・・振られちゃったかく」と言った。

「まあいい。いつでも待つてるから気が変わったら言ってくれ。それと・・・」

カジコはテーブルの下から紙を取りだし私達に手渡す

「これはバイトの勧誘だ。どうだい？2人とも私達の店で働かないか？」

紙を見るとキャバクラのキャバ嬢募集のチラシだった。

「やりません」

「ちよつと待つてくれ！これはいかがわしくないキャバクラなんだ」

話を聞くとここオルタナには荒野天使隊（ワイルドエンジェル）が経営するキャバクラがあるらしい。そのキャバクラはただ、純粹に接待するのみでいかがわしいことは一切なし。もし手を出したら相当の報いを受けさせる。そんなことで儲かるのかと言うとかなり繁盛している。他の店のキャバ嬢よりも高レベルのキャバ嬢が在籍しているし、全員が義勇兵なのでスタイル維持も完璧だ。それに怪我とかで義勇兵を続けられなくなった女性の働き口でもあつたりする。

「気が向いたらでいいから」

私達に無理矢理チラシを持たせる。興味全然ないんですけど・・・

取り合えずお昼になったのでマライカで食事を取った。話で聞いていた通り安くて美味しい。これは評判になるのは当然だ。食事中、食事後にクランの人達と色々話をした。どうも勧誘は諦めて私達とのパイプ作りをしようとしている気がする。

そんなに頑張ってもバイトはしませんよ……しませんよ？



## 31話

早朝、私はレッドムーン事務所のカウンターの前で所長から受け取った依頼書を読んでいた。

「これを私達にですか？」

「そうよ」

依頼の内容は旧ナナンカ王国とオルタナの間にあるナナンカ防衛要塞線への警護。

オーク達が支配する旧ナナンカ王国領、その周辺にはいくつもの砦があり、オルタナに近い砦がデットヘッド監視砦とリバーサイド鉄骨要塞。デットヘッド監視砦は攻めたり守ったりする砦ではないのである程度無視はできるが、リバーサイド鉄骨要塞はかなり危険な砦でナナンカ防衛要塞線もこのために作られた。

「でもナナンカ防衛要塞線って辺境軍が常駐してたんじゃないかなかったですっけ？」

「そうよ。けどここしばらく両砦が活発に動いている。辺境軍は守ることはできてもこっちから攻撃する余裕はない。そこで私達義勇兵の出番よ。依頼主は辺境軍、内容はナナンカ防衛要塞線近くを徘徊するオークへの攻撃と調査。調査に関しては別のパーティーに回すつもりだからあんたのパーティーには攻撃側に回って欲しいの」

報酬は前金100シルバー、後金200シルバー、戦利品は全てこちらの物。ただ期間がない。

「あの・・・滞在期間は？」

「調査が完了するまで」

「長くて一週間位ですかね？」

「多分それぐらいかしら？寝床や食事は向こうが準備するらしいから体だけでいいわ」

報酬は安いけど必要な物は準備してくれるのかあ・・・。辺境軍は義勇兵のこと見下してそうだし信用できそうにないなあ。

「ああ、辺境軍と義勇兵の溝はないわよ。だって同じ人間族を守るってことで共通しているんだから」

「うーん。メンバーと相談でいいですか？」

「いいけどあたしとしては受けて欲しいわ」

「私達にまで声をかけるってことは結構大規模な作戦なんですか？」

所長はため息を吐き首を振る。

「ソウマがクランを作っちゃって使えるやつがごっそりと持って行かれたのよ」

そう言えばソウマがシェリーの酒場でクランのメンバーを大々的に募集したんだっけ？それで元々他のクランに入ってた人もソウマのクランに鞍替えしちゃったとか。

真面目な人が多いオリオンや女性だけの荒野天使隊（ワイルドエンジェル）のようなクランはそこまで問題になっていないようだけど

「多分抜けた穴を埋めるために勧誘が激しくなるからあなたも気を付けなさいよ」

「でも、ソウマさんならこういう依頼喜んで受けて貰えるんじゃないんですか？」

「なんかワンダーホールの方で活動していてこっちは戻っていいの」

ワンダーホールはデットヘッド監視砦を越えたところにある風早荒野をさらに進むとある巨大な地下洞窟だ。中は複雑で凶悪なモンスターが徘徊している。一説では異世界に繋がっていると言われている。

普通に行くとデットヘッド監視砦とかち合ってしまうため、通常大きく迂回して進む。

「戻るときにデットヘッド監視砦に攻撃してくれたらいいのに」

「いくらソウマ達でも無理よ。あたしとしては同じ北西のサイリン鉱山に攻めて欲しいわ。希少な素材より安価で大量な素材よ」

メリイがハヤシさん達とまだ一緒にいた頃はサイリン鉱山への道のりが開拓されたばかりの時だった。当時は競うように行われた内部の探査とその結果によって持ち帰られる素材でオルタナは大きく発展できたが、デットスポットの存在やそこまで素材が高くて売れないという理由で今ではほとんど内部を探查するパーティーはいない。

「あれさえどうにかできたら行ってくれそうなパーティーはいるのに」

所長は掲示板に貼られている手配書に目をやる。そこにはずっと貼られていたのか黄ばんでしまっている手配書がある。デットスポット討伐30ゴール。かなりの高額だ。やっぱりそれほどもでに強くて危険なのか・・・

「あなた達がやってくれる？」

「無理ですよ」

「ま、無理よね」

所長と別れレッドムーン事務所から出る。サイリン鉱山か・・・

翌日の夜、パーティーメンバー全員でシェリーの酒場へ、ソウマの一件があつて以来、常連客のほとんどが克蘭に参加してしまっているので見ない顔が多い。

「ヒロトとアオイちゃん訓練お疲れ様」

「お疲れ二人共」

「お疲れ様」

「ありがとうございます」

ジョッキをぶつけ合う。この休みの間2人はギルドにスキルを学びに行ったり装備を購入したりしていた。

ヒロトは先見（フオーサイト）、盾突（バッシュ）、アオイちゃん（アオイちゃん）は護法（プロテクション）、戒光（ブレイム）の2つのスキルと剣と盾を購入した。

ブレイムは相手を拘束する光魔法だ。回復しかできないアオイちゃんが前衛へのせめてへの援護として覚えた。プロテクションは私達の警護を担当してもらっているメリイの負担軽減のため、アオイちゃんもパーティーに貢献できると言って喜んでいて、「ギルドから戻ってきたばかりなだけに私達宛に依頼がきているの」

料理も飲み物もある程度進み、私はレッドムーン事務所を受け取った依頼書を出して内容の説明をした。

「ゴブリンじゃなくてオークですか・・・かなり強いのですよね？」

ヒロトが私達3人の方を向いて質問する。アデイが答える

「ああ、ただ他の義勇兵が一緒にいるから連戦になることはほぼないね」

「現在保留中でみんなはどうかなって。多数決でいきたいけどいい？」

みんなを見渡す。反対意見はない

「じゃ、賛成の人」

アオイちゃんを除く4人が手をあげる

「賛成多数決で参加で、アオイちゃんそれでいい？」

「・・・はい」

「アオイ大丈夫だよ。もしもの時はヒロトが守ってくれるよ」

アデイさんがビールを飲みながら言った。アオイちゃんはヒロトを見るとヒロトはアオイちゃんの顔を見ながら「大丈夫」と言った。

「そうよ。私と護身法の練習したじゃない」

「・・・あ」

「へえ。なら逆にヒロトを守ってあげなさいよ」

「そんな・・・私全然で・・・」

やっぱり何もできないのが気になって？メリイの方を向いてメリイだけに伝える。メリイは頷く。

ここ数日、メリイとの特訓で自由にON、OFFができるようになった。こうなるとこれもかなり便利だ。こうやって内緒話をしてもらえないのだから。

「よし。受諾の連絡はしておくからいつでも出られるように準備をお願い」

その後は依頼の受諾のためにレッドムーン事務所に行ったり、まだ戻っていないマナトやユート達にメッセージカードを届けたりした。

「あれがナンカ防衛要塞線ですか」

私達はナナンカ防衛要塞線を丘から見ている。大きな土囊？で作られたような城壁に後方には等間隔に配置された砦。城壁には人が巡回している姿が見える。そしてナナンカ防衛要塞線に到着した私達は辺境軍の人に案内されて大きめの部屋に案内された。期間中パーティー全員でこの部屋を利用する

「ヒロトにはちよつと肩身の狭い思いをさせちゃいますね」

「いえ、大丈夫ですよ」

「体を拭く用のお湯貰えるみたいよ」

「辺境軍と話ながら何処かに行っていたメリイが戻ってきた。

「やっぱりお風呂はないか」

「お湯を準備してもらえるだけでもありがたいですね」

「これで動いて汗をかいても安心だ。

「今日はゆつくりして明日から頑張りましょう」

## 3 2 話

朝、早朝準備を終えた私とメリイは部屋から出て辺境軍が待機している部屋に向かっている。ヒロト達3人はヒロトの準備を待っている。男女同時に準備できないしね。

待機室で食料と笛を受けとる。オークの勢力圏である城壁外で戦うことになったため、緊急時はこの笛を使い、他の義勇兵に助けを求めろ。

宿として使用していた砦を出るともうすでに数パーティーが城壁に向かって歩いているのが見える。私はその中にハヤシさんがいたのを見つけた

「ハヤシさん！」

ハヤシさんは私の声に気づくと仲間にも声をかけこちらに近づいてくる

「君もこの依頼に？」

「はい」

「ここ最近オークだけじゃなくゴブリンやコボルド、リザードマンの姿が確認されているから気をつけるんだ」

リザードマンは旧ナナンカ王国領とリバーサイド鉄骨要塞の間にある噴流大河〈ジェットリバー〉の上流に住んでいる人型種族だ。姿は蜥蜴がそのまま2本の足で立



ち上がった出で立ち。造船技術に優れ、主な武器は槍。中には氷魔法や呪いを使う個体がいるという話だ。

「体が鱗で覆われていて鎧の役割をしているから剣は効きづらいから気をつけるんだ。メイスなどの打撃武器か神官の護身法なら効率よくダメージを与えられる」

ハヤシさんはヒロトとアオイちゃんにリザードマン戦についての簡単なレクチャーをしてきている。一通り終わるとメリイに声をかける

「その……メ、メリイ。元気だったか？」

「……え、ええ」

2人共会話がぎこちない。メリイはハヤシさんを見るとパーティーメンバーのこと を思い出す。ハヤシさんはその事でメリイに負い目を感じている。見ていて歯痒い。

「あれ〜？シオリンも来てたんだ〜」

声と共に肩に重みを感じた。この声と遠慮のなさは。顔を横に向けるとキツカワがいた。

「どうしたのメリメリ？元カレと再開しちやっただ？」

「元カレと違います。元パーティーメンバーです」

「あ〜あの人が例の」

顔が広いキツカワはメリイの過去も当然知っている。

「ああゆうのは本人次第じゃないの？シオリンが心配してもどうにもできないよ？」

「それは分かっているのですが・・・」

「シオリン優しいよ。あ、レンジも来ているよ」

私達に声がかかったのだからレンジパーティーにも声がかかるのも当然か。

「レンジ探さないの？」

「友達でもないですし別にいいですよ」

「ふん。レンジはシオリンのこと話してたのに」

レンジが私のことを？ちよつと気になる

「そんなことより、前に言ってたパーティー紹介するよ」

キツカワが私の体を回す。回した先には5人のパーティーが手を挙げていた。

「いいですよ。私もパーティーを待っていますから」

「そお？残念。じゃあ先に行ってるね」

キツカワは手を挙げていたメンバーの元に走って行くと城壁の方に歩いて行つた

「シオリンお待たせ」

「あ、メリイ、話終わった？」

「うん」

顔を見る限り、ハヤシさんとの会話はあまりうまくいかなかったみたいだ。

「あのメリイ「シオリさん」

ヒロトの声に邪魔される。私は気にしないでと伝えて振り向きヒロト達3人を迎える。

「すみません。準備に手間取って」

「鎧ですから時間がかかるのは仕方がないですよ。じゃあみんな行きましようか」

私達は城壁まで移動し馬車に乗り込む。この馬車で要塞線の向こうに行く。その後はパーティー単位に別れそれぞれ仕事をすする。

「いつも私達から攻撃できるとは限らないから常にプロテクションをかけて行くよ」

「はい、光よ、ルミナリスの加護の元に、護法へプロテクション」

アオイちゃんがプロテクションを唱える。光が私達を包み。それと同時に暖かさと体が軽くなる感覚。

「いい、プロテクションを切らさないように気をつけて、戦闘中に切れたらその感覚だけでも隙になるから切れたらすぐに言って」

「はい」

プロテクションは他の魔法と違い回数ではなく継続時間での計算だ。ずっと効果が発生している分、気を抜いたり動揺したらプロテクションの効果が消えてしまう。

「よし。それじゃあ行きましようか」

私達は森の中に分け入って行った。

「光よ、ルミナリスの加護の元に、戒光へブレイム」

アオイちゃんの手から放たれた光はゴブリンに命中し、ゴブリンが激しく痙攣する。  
「はあー」

痙攣するゴブリンにヒロトが懲罰の一撃へパニツシユメントを放ち倒す。ヒロトは基本的にスキルを温存する戦い方をするが周りに敵がうじゃうじゃおり、長引けば敵の増援が来る可能性があるため温存せずどんどんスキルを使っている。

「こつちもさつさと始末するよ」

私の操作するリザードマンとアデイさんとでコボルドを始末する。アデイさんがタックで攻撃を受けてもらっている間にリザードマンの槍で攻撃する。剣よりリーチがあり突きの攻撃がやり易いためかなり調子がいい。だけどオークの勢力圏だからオークとその他の種族との戦いだと思っていたがオークの姿はまだ見ていない。私はアデイさん達前衛に近づくと、メリイが一緒に来ていないことに気づく。

「メリイどうしたの?」

メリイが耳に手を当てて「・・・何か足音がする」と音の聞こえる方向に指をさす。耳をすませると足音が確かに聞こえてくる。

「こつちに近づいてくる?」

「この足音・・・竜騎兵かもしれないね。隠れるよ。」

私達は近くの岩影に隠れる。足音はどんどん大きくなっていき、木々の影から大きいな蜥蜴が飛び出してきた。大きな体に大きな足と尻尾。顔は怖そうな目付きに口には鋭い牙が見える。そしてその背中にはオークとリザードマン2匹が乗っていた。アデイさんが言っていた通り竜騎兵だ。

「グルルル」

馬竜は私達が倒したコボルドの前で止まるとリザードマンが降りてコボルドを調べている。

「グル、グル」

「プギャ」

3匹は辺りを警戒し始めた。コボルドが死んでまだ間もないから近くにいると思ってる?でも、3匹と馬竜なら私達でも何とかなるかも。私はアデイさんに心の声で問いかける。アデイさんは首を振り地面に指で竜と書く。馬竜が相手だと私達じゃあ荷が

重いか……。かといって逃げるにしても私達の足では追いつかれてしまう。私は笛を手に取りいつでも吹けるようにスタンバイした。

ピユイイイイー

遠くの方から笛の音が響く。リザードマン達は笛の音を聞くと急いで馬竜に乗る。リザードマンが乗ると同時に馬竜は音のする方に向かって走り去っていった

「何とか見つからずにすんだけど誰か捕まったようね」

アデイさんはコボルドの方まで歩いて行きタリスマンをもぎ取る。

「あれが馬竜ですか……。想像以上に大きかったですね。さつきシオリさんと話してたのは戦えるかですか？」

「ええ、見た通り力も強いから近接戦じゃあ分が悪いわ。せめて弓か魔法が欲しいところね」

「……。足音が聞こえなくなりました」

馬竜が去った方向に耳をすませながらアオイちゃんが言った。取り敢えずこちらの安全は確保できたみたいですね。

「笛が鳴ったとなれば乱戦になりますからかさばる物は捨てて私達も行きましょう」

「竜騎兵のこともあるから大きく迂回して行くよ。シオリ味方が混乱するからそのリザードマンは置いていきなさい」

「わかりました」

私はリザードマンの操作を切る。そして槍を拾う。剣などで戦わせるより槍で突いた方がやり易い。向こうに着いてから操作したのを持たせて戦おう。私達は戦利品として持っている剣や鎧といった動きに障害になるものを捨て音の発信元に向けて駆け出した

## 3 3 話

私達が戦場に到着した時にはすでに大規模な戦いに発展していた。至るところで戦いが起こっているがやはり竜騎兵と戦っているパーティーは苦戦を強いられている。

「馬竜ではなく操作しているオークを狙うんだ。もしくは電磁魔法でオークを振り落とすんだ」

シノハラさんが戦闘の指揮を取っているのが見える。ハヤシさんがいたから当然か  
「馬竜にモーターレイを使ってみるので援護お願いできますか？」

私のお願いでアデイさんとヒロトが近くの馬竜に向かう。既に馬竜と戦っているメンバーには神官がいない!?

「メリイあのパーティー神官がいないからプロテクションを」

「大丈夫。神官は後ろに下がってる」

馬竜が暴れると軽装の防具じや役に立たないので神官や魔法使いは大きく後退している。2人が参加したことにより馬竜の動きが鈍る。

「安寧を生きるものに死の告知を・死の宣告へモーターレイ」

モーターレイは馬竜に向かって飛ぶが避けられる。当てるにはもっと近づかなけれ



ばならないが危険だ。モーターレイが無理なら・・・

「死して我に従う玩具となれ・死体操作（ゾンビクリエイト）」

その辺に転がっているコボルドの死体を操作して持ってきた槍を持たせて竜騎兵の元に行き槍で突いて援護する。

ブオン！

馬竜の尻尾の一撃でコボルドが吹き飛ばされる。立ち上がらせようとするが身体中の骨が折れていて動かせない。

「たった一撃で!？」

なんて力・・・こんな受けたら2人は・・・

「・・・大丈夫」

無意識に震えていたのかメリイが支えてくれた。私はメリイとアオイちゃんと一緒に後方に下がる。2人は馬竜の攻撃を上手く避けている。大丈夫なの・・・

「2人はちゃんと近接の戦いを学んでいるわ。信じて」

心配する私にメリイが答えてくれる。前衛が抑えて矢と魔法でダメージを蓄積させる。馬竜が倒れるのにはそう時間はかからなかった。

「ヒロト。次行くよ」

「はい」

「待ってください!」

次の獲物に行こうとした2人をアオイちゃんが止める。

「プロテクションがもう切れます」

その声からちよつとしてから体が重くなる感覚。アオイちゃんのプロテクションが切れた。

「光よ、ルミナリスの加護よ、護法へプロテクション」

2人が戻ってきてメリイがプロテクションをかけ直す。

「ありがとうございます」

「ヒロト行くよ」

2人は前衛に戻る。入れ替わるようにシノハラさんが私達の元に走ってくる。

「シオリさん。神官2人を負傷者の治療に」

「はい。メリイ、アオイちゃんお願い。アオイちゃんは大丈夫?」

「瞑想すれば・・・」

メリイは負傷者の元に走る。アオイちゃんは他の人に守られながら瞑想している。

「シオリさんが来てくれて助かったよ」

「みんなが強いだけで私は何もできませんよ」

「リーダーなのだからそんなことは言っではいけないよ。パーティーの力もまたリー

ダーの力だ」

竜騎兵には苦戦を強いられているけどその他は優勢だ。手が空いた義勇兵は馬竜の方に加勢する。

「このまま行けば何とか・・・」

このまま行けば敵は竜騎兵だけになる。全員でかかれば竜騎兵も問題なく倒せる。

「まずい。竜騎兵が近づいてきてる。数6」

木の上に登り、弓を射っていた狩人がこちらに近づく竜騎兵を見つけて私達に知らせてきた。

「ここにきて更なる増援か・・・このまま戦うのはまずい。撤退するぞ」

撤退の報せが伝わり戦線が下がり始めるが・・・

「一部パーティーが撤退できてない？」

報せが届いていないかできないのか撤退せずに戦っているパーティーがいくつかいる。  
る。

「早く下がらせるんだ！」

シノハラさんの怒号が飛ぶ。しかし、うまく伝わらないのか撤退する様子がない。このままじゃ囲まれてしまう。ここは・・・使うしかない。

「シノハラさん。私が」

「シオリさんが？君は後衛じゃないか。何をするつもりだ」

早く撤退してください！このままじゃ囲まれます！

「これは・・・声が・・・」

何も隠さずにみんなに伝える。撤退していないパーティーは辺りを見渡すと少しづつ後退していく。

「まさか直接？それより各パーティーは周りを助けながら後退。城壁まで逃げれば何とかなる！」

シノハラさんの号令で皆下がりは始める。敵増援として竜騎兵とそれに乗ってきている敵をいなしながら撤退を行うが竜騎兵がいるので完全には逃げられない。しかし、パーティー間のフォローや地形を頼りに被害を最小限にしながら逃げる。そして城壁まで逃げる事ができた。城壁の上にいる辺境軍が私達を見つけると後ろにいる敵に向かつて矢を射かけてくれる。

「何とか逃げ切れましたね」

城壁で矢を射つてくれるお陰で竜騎兵も追撃を諦めてくれたようだ。

「戦いに参加していないパーティーが襲われるかもしれないから城壁から離れすぎないように巡回だ」

追撃を諦めたと言ってもそのままバースайд鉄骨要塞に戻るのではなく。逃げ切

れなかった仲間やそもそもこの戦いを知らない仲間を襲うために周囲するのでそれから守る必要がある。

私達は今、5人パーティーに他のパーティーから魔法使いを入れた6人パーティーでまだ森の中にいるパーティーの救助を行っている。

「ジェス・イーン・サルク・カルト・フラム・ダルト！」

一緒にきた魔法使いが電磁魔法を放つ。凄まじい閃光と轟音が鳴り響き竜騎兵に命中。あんな一撃を食らっても馬竜は怯む程度だが、搭乗しているオークは馬竜から落馬する。一時的に命令が切れて馬竜の動きが鈍った。

「うおおお」

相對していた戦士が憤怒斬りへレイジブローで馬竜の顔に攻撃する。

「グオオオ」

馬竜を倒すまでにはいかなかったが大きな裂傷を追い馬竜がその場から逃げる。搭乗者もいないからあの馬竜はもうこっちに来ないだろう。落馬したオークはアディさんと相對していたが電磁魔法と落馬で怪我しているのか動きが悪く何の苦勞もなくアディさんが倒してしまった。

「あぐっ！」

声の方を向くとリザードマンと戦っていたパラディンが槍で腹部を貫かれている。リザードマンは槍を引き抜き膝をついたパラディンにとどめを刺そうと構える。

「グアー！」

狩人の矢がリザードマン肩に刺さる。しかし、リザードマンは構わずパラディンに向け槍を降り下ろす。

「ぐっ」

間一髪コボルドと戦っていたヒロトがいつの間にか間に入り盾で防御して助ける。槍は盾で反らされ地面に突き刺さり大きな隙ができる。ヒロトはその隙を見逃さずヒロト剣をリザードマンに向かって突く。

「ああっ！」

しかし、リザードマンの腹部の鱗に邪魔され剣が反れる。リザードマンはそのまま倒れこむようにヒロトに覆い被さり首を締める。

「んっ！」

アオイちゃんが杖を打ち上げるようにして強打へスマッシュを放ちリザードマンを吹き飛ばした。

「安寧を生きるものに死の告知を・死の宣告へモーターレイ」

リザードマンの着地に合わせモーターレイを放つ。リザードマンは回避できずに受けてそのまま動かなくなる。

「あ、ありがとうアオイさん」

起き上がったヒロトの首にはリザードマンの爪で傷つき血が流れているが戦闘に支障はないようだ。

「アオイさんはパラディンの治療を」

「うん」

ヒロトはそのまま傷ついたパラディンとアオイちゃんの前に立つ。アオイちゃんはパラディンの治療を開始する。残りのゴブリン、コボルドは形勢が不利とみたのか一匹、また一匹と逃げていく。

「ほっ、引いてくれた。あの大丈夫ですか？」

「ああ何とかな。しかし・・・」

助けた戦士がある一点を見る。そこには無惨に切り裂かれてしまった神官の死体が

ある。私達が到着する前に馬竜の一撃をくらい死んでしまったのだ。

「せめて一撃で逝ったのが救いだな・・・」

神官から団章を取り魔法使いが炎熱魔法で灰にしてできるだけかき集める。オルタナに戻った時に共有墓地で埋葬するためだ。

「助けてくれた上にこんなことまでしてくれてありがとう」

助けたパーティーの人達がお礼を言ってくれる。綺麗な状態なら蘇生できたかもしれないがネクロマンサーの蘇生魔法は万能ではないから仕方がない・・・割りきるしかない。パラデインの治療が完了し、私達は周囲を警戒しながら城壁に戻った。聞いたところによるといくつか戻ってこなかったパーティーがあつたみたいだ。

「シオリさんちよつといいかい？」

部屋に戻ろうとした私をシノハラさんが呼び止める。私はみんなに先に行ってもらうように言つてシノハラさんと向かい合う。

「あの時のことなんだが、頭の中に響いたというかあれは何だね？」

「あれはネクロマンサーのアビリティで自分の思っていることを伝えたりできるんです」

「そんな話は聞いたことないのだが？」

「考えが漏れてしまうのであまり言わないですよ」



荒野天使隊（ワイルドエンジョル）のカジコさんがアビリティって勘違いしていたから行けると思っただけでシノハラさんには通じなかった。

「・・・確かにそうだな。疑ってすまない」

次の言い訳を考えている私にシノハラさんが頭を下げる。よかつた信じてくれたみたいだ。シノハラさんと別れ部屋に戻り明日に備えて休んだ。竜騎兵の巡回は明日以降もあつて、私達を含む全パーティーは城壁近くの森から出るのが難しくなつてしまい行動範囲がかなり狭まつてしまった。

深夜、みんな部屋で眠りにつき明日に備えていた。

ユサユサ

誰かに揺り起こされる。

「ん、どうか・・・した？」

私は眠い目を擦りながら起きる。メリイが起こしたみたいだ。奥の方ではアディさんがアオイちゃんを起こしている

「城壁の方が騒がしい」

耳をすますと微かに城壁の方から音がする。

「もしかしたら夜襲をかけられているかも知れないから準備して」

ヒロトが寝ている横で私達4人は素早く着替える。全員着替えたらヒロトを起こした。ヒロトは薄く目を開き私達を見て大きく目を開くと飛び起きる。

「わっ！ すいません。寝坊しましたってあれ？」

「大丈夫。何かおかしいから部屋の外に出て様子を見てからヒロトも準備が終わったら出てきて」

「あつ、はい」

私達はヒロトを残し部屋から出る。部屋の外には他の部屋で休んでいたであろう義勇兵が着の身着のまま周りの様子を伺ったりしている。

「ねえ、どうなってるの？」

「わからねえ。どうも襲撃されているみたいだ」

通路の窓を見ると辺境軍が馬でこちらに駆けてくるのが見えた。

「どうやらそうみたいです。ヒロトが来たら私達は先に行きましょう」

ヒロトが部屋から出てきた位に辺境軍の人がこちらに走ってきて夜襲をかけられ城壁内に侵入されていることを伝えられる。既に準備ができている私達は急いで城壁に向かった。

## 3 4 話

砦から城壁まで約15分、馬車なら約5分。私達は全力で走る。城壁に近づくとつれ怒号、金属のぶつかる音、血の匂いがしてくる。

「最悪」

「・・・ええ」

城壁までもう目と鼻の先にまで差しかかった所でアデイさんが眩く。メリイも何かを見つけたようだ。「えっ?」っと私が2人に聞くとメリイが城壁の上に指をさす。私達が向かっている城壁の上の櫓には辺境軍の旗ではなく別の旗が風で翻っていた。

「城壁がオークに取られたの?」

「いや、あそこら一帯だけだ。他はまだ大丈夫」

両側の城壁上の櫓にはまだ辺境軍の旗が立っている。私の見える範囲では辺境軍は両側とオークの手に落ちた櫓への階段の3方向から攻撃し、櫓を奪還しようと奮闘している。

「見えないけど櫓から城壁内に入れるからそこでも戦いが起こってる」

私達の力が十分に発揮できるとしたらある程度自由に動ける場所・・・両櫓からか城

壁内。今は急いで戦いに参加しないといけないから……

「私達は城壁内から……」

ドン！

私達義勇兵が城壁外に出るために使用していた門から大きな音。見ると内門を開き辺境軍が外門を必死にを押さえているのが見えた。

「攻城兵器……」

私達が活動範囲外に準備していたの？城壁から攻撃しようとも門は櫓から近い位置にあるためたいたした抵抗もできなさそうだ。

「あのままじゃ、門も……」

「大丈夫。あつちはなんとかなる」

馬とガナー口に引かれて大きな岩が運ばれてくるのが見える。そして門を押さえている兵士と岩を入れ替え、岩が入らなくなると外門を閉めてまた岩を置いていく。門を破壊されても岩、そしてまた門と岩で突破されにくくする。これなら大丈夫そうだ。

「私達も急ぎましょう」

城壁内に入るために階段に昇る。階段には城壁内に入る者、階段から櫓に攻撃する者が一緒になってすし詰め状態だ。私達の移動速度はかなり遅い。

階段上部ではオークと兵士が戦っているが回避が上手くできずオークの力に押され

て苦戦ぞみだ。あの場では鎧と盾で固めたヒロトは大丈夫だけど攻撃を捌いたり回避するアデイさんじゃやっぱり不利だ。

「ピュ!?!」

侵攻が遅いのに腹が立ったのか突然後ろにいたオークは前で戦っていたオークの背中を押し始めた。押されたオークはそれに必死に耐え、後ろに話しかけているがオークは押すのを止めない。

「プユギユ・・・」

意識が後ろに向かったため、剣や槍を捌けずに体に突き刺さる。そしてたいした抵抗もできずオークは死んでいく。

「いったい何を・・・」

「・・・チツ、みんな飛び降りて距離を取って!」

「えっ、どうして?」

「早く!」

アデイさんは階段から飛び降りる。私も続いて飛び降りるが高さがあったため尻餅をつく。

「いったゝ」

「ふつと」

「ありがとう」

私の横にヒロトとヒロトに抱きついたアオイちゃんが飛び降りてくる。2人はさつさと城壁から離れていく。私は……

「何座り込んでるのよ」

メリイが私の手を取って城壁から離れる。

「おい！何処に行くんだよ！」

後ろから他のパーティーの声が聞こえてくるが私達は足を止めない。

「アデイさんいったい……」

「階段が突破される。シオリ急いで援護要請」

アデイさんは続々到着してくる義勇兵を呼び止めて城壁に近づかないように言っ  
回っている。どういうこと？私は階段に目を向ける。

前のオークが死んでも押すのを止めないオーク達。そして辺境軍にぶつかる。辺境軍は死体を押しているオークに攻撃しようとするがオークの死体が邪魔で上手く攻撃できない。

「おい！押し返せ！」

「無、無理だ」

人間とオーク、力が強いのはもちろんオーク。そしてここは城壁の上にするための階

段。無論手すりなどの落下防止対策なんて優しいものなんてない。そして徐々に押されて行き。

「うわああああ」

「おい、倒れるな」

「そんなこと言ったって」

階段から落ちる人、その場で倒れて周りの人を巻き込んで将棋倒しになってしまう人。将棋倒しになった人達を踏みながら階段を下りていくオーク達。私達より体重が重く、あんな数に踏まれたら・・・

「みんな、行くよ！敵を門に近づけさせないようにね！」

プロテクションを受けたアデイさんとヒロトは呼び止めた義勇兵達を率いて階段を降りてきたオーク達に向かってゆく。私は階段に敵が降りてきていること辺境軍の方はほぼ全滅して義勇兵のみで対応していることを伝え、援軍を求めた。私達にできること・・・

「2人は階段から落ちた人の治療を！」

階段から落ちた人は落ち方が悪く怪我をしている者が大半だが治療すればまだ・・・。「ダメよ」メリイが手で私とアオイちゃんを制す。「矢の射程に入ってる」階段でオークやりザードマンが弓を構えている姿見える。弓や魔法を扱える者が応射しているが地



の利を取られていたため上手くできていない。

「こっちはもうひっくり返せないから向こう頼りですね・・・」

戦いで傷ついた者は後方に控えた神官達で治療する。前衛の空いた穴は弓や魔法で牽制をする。砦から義勇兵が続々到着しているので数の心配は大丈夫そうだ。

「1匹飛び降りてきた!」

階段を攻撃していた人が叫ぶ。リザードマンが1匹こっちに向かって来ている。かなり早い。

そいつは止めようとした狩人や盗賊をあっさり突破して神官の集団を素通りして・・・こっち!?!

「シオリ!」

メリイが私の前に立つ。リザードマンはメリイに向かって槍を突き出す。メリイは体をひねり回避する。

「くっ」

リザードマンは飛ぶとメリイを踏み台にして私に飛びかかる。咄嗟のことで回避できな!

「あっ、ぐう」

お腹の空気が一気に吐き出される感覚と両足の接地感がなくなる。リザードマンは

私を担ぐとそのままきた道を走り戻る。メリイが私に向かって何かを叫んでいる。

「た、助け……」

助けを言いきるまえにリザードマンは垂直の壁を気にせず階段まで登る。そして櫓に向かって走る。

「安寧を生きるものに……ぐう！」

リザードマンの拘束を解こうとモーターレイを唱えるが途中で投げられ壁にぶつけられる。痛みに耐えながら周りを見るとオークやリザードマン、コボルドやゴブリンの姿も見える。兵士や義勇兵は結構近くで戦っている。

「オゴツ！ プギユ！」

「ガウ、グウ」

私を連れてきたリザードマンとオークが言い争っている。オークは黒い鎧に毛皮のマント、牙は何も彫っておらず綺麗だが顔に刺青をびっしりとしている。立ち振舞いからこの指揮官のようだ。恐らく私を連れてきたことを……でも、注意が逸れているなら！

「死して我に従う玩具となれ・死体操作へゾンビクリエイト〜！」

近くにあったオークの死体を操り上位オークに襲わせる。こいつをどうにかしてその混乱中に逃げる！

「フン」

上位オークは向かってくるオークの死体を腰に身に付けていた剣で一刀両断にする。そしてこちらを見る。

「やばっ、つて、やっ、ちよつと……ムグ、シー！」

すぐに近くにいたオークが私を拘束すると縄で縛り、猿ぐつわをする。

「タワムレガスギルゾ」

上位オークが剣に着いた血を払いながら近づく。

「テアラナマネヲシタノハアヤマロウ。オマエヲツレテユク」

は？謝ってきたのはびっくりだが連れていく？どういうこと？わからない？

「シー、シー（離せ、離して）」

「アバレルナ」

上位オークは私を抱え胸の所で縛ると城壁から降りようとす。えっ？ちよつと本当に連れていく気？

上位オークは侵入するのに使ったであろう長梯子に手をかける

「おい」

上位オークの手が止まる。体ごと振り向いたので私にも声の主が見えた。

「んー！（レンジー！）」

レンジが立っていた。離れた所ではロン達が戦っている姿が見える。レンジは私の姿を見て一瞬びつくりした顔になるがすぐにいつもの顔になる。

「そいつは一応俺の知り合いだ。置いていけ」

## 35話

「そいつは二応俺の知り合いだ。置いていけ」

私が上位オークに連れ去られようとした時、レンジが助けに来てくれた。振り向いた上位オークは周りに一声かけるとオーク達がレンジに群がる。

「オーム・レル・エクト・ネムン・ダーシユ」

奥にいたアダチが魔法の詠唱と共に杖を地面に突き立てる。するとオークの足元から黒いエレメントが伸び絡みつき拘束する。オークが足の拘束を解こうともがいている隙に2匹。黒いエレメントの拘束を引きちぎりレンジと罅迫り合いをするが上手く剣を絡めて体勢を崩してからの攻撃で3匹。合計5匹のオークを一瞬で倒してしまつた。

「ムー、ンツ（凄い・・・きや）」

レンジってこんなに強かったの？私が感心していると私と上位オークとを固定しているロープが切られる。急な落下に身構えるが大きな腕に抱き止められる。そして私をゆつくりと地面に置いてレンジの前に出る

「ニンゲンヤルナ。オレハイシユ・ドグラン」

「・・・レンジ」

「ワズカナテゼイデコンナトコロニ。シニニキタカ？」

「貴様が死ねば終わりだろう？」

レンジパーティーは突出して敵指揮官を倒して混乱させるために出てきたんだ。イシュ・ドグランはレンジの言葉を聞いて大きく破顔して笑う。

「オモシロイ。オンガシユラドウ」

周りのオーク達がイシュ・ドグランの言葉に次々と答える。そしてオーク達は2人を囲う。囲んだオークは武器を構えるのではなく下に下ろしていたり、鞘に戻したりしている。短い時間で2人の闘技場が完成した。私？私は闘技場を形作るオークの1匹に抱かれて2人を観戦している。

「スグニオワルナヨ」

「こっちの台詞だ」

開始の合図もなく2人は打ち合う。2人が剣をぶつける度に大きな音が響く。イシュ・ドグランはオークを一撃で両断するだけの力を持っているので当然だとしてもそれに負けないレンジも凄い。鏝迫り合いでは流石に人間とオークの差があつて押されるが力を上手く流して体勢を崩そうとする。

「フフ・・・イイゾレンジ」

「・・・」

一進一退の戦いが展開される。周りのオークは固唾を飲んで見守って私のことは蚊帳の外だ。

意識が外れている内にか逃げないと・・・。周りを見渡すと嫌なものを見つけってしまった。櫓の屋根に1匹のゴブリンがいる。そいつはボウガンを構えて・・・レンジを狙ってる!? 2人はもちろん、オーク達もレンジとイシュ・ドグランの戦いに集中していてゴブリンの存在に気づいていない。

「シー・シー・シー・・・（レンジ！ 後ろ！ 狙われてる！）」

猿ぐつわをされているので声が届かない。オークは私が急に暴れだしたので腕の拘束を強くする。どうにかして伝えないと。あ、私には便利な能力があったんだ。私が伝えるのと周りをオークが驚く。これオークにも伝わるんだ・・・

「!!」

私が伝えたのとほぼ同時にゴブリンはボウガンを放つ。レンジは大きく体をひねり矢を避ける。しかし、その隙をイシュ・ドグランは見逃すわけもなく剣を降り下ろす。

「・・・チツ」

レンジはイシュ・ドグランの攻撃も避けようとするが矢を避けた後では上手く避けられない。レンジは左腕を大きく切り裂かれた。

「・・・グッ」

レンジは大きく下がりを構え直そうとするが左腕が動かせない！私が気を反らしてしまったから・・・

「シユルグア！」

イシュ・ドグランが怒りに満ちた声で叫ぶ。周りのオークは辺りを見渡し屋根にいるゴブリンを見つける。ゴブリンはそのまま捕らえられイシュ・ドグランの前に連れ出される。

「グルフドウ！」

イシュ・ドグランはゴブリンに剣を降り下ろして殺してしまうとレンジの方を向く。

「ドレイガジャマヲシタ」

「教育のなっていないやつだな」

「フン・・・イノチハオイテオイテヤル」

そのまま身を翻す。私を掴んだオークもその後が続こうとする。

「まだ勝負も決まっていないのに景品を勝手に持つていくのは反則じゃないの？」

「うらっ！」

サツサとロンの声。それと同時にオークの拘束が解けて私は地べたに倒れる。周囲が離れる足音がするから2人が威嚇してくれてる？



「全く、縛るなんて大層な趣味をしてるじゃないの?」

サツサはそう言いながら私の前でしゃがみこんで首筋にダガーを当てた。

「フグ? (えっ?)」

えっ? (こ)は縄を切つて助けてくれる流れじゃ?

「動くんじやないよ! 変なことをしたらこいつの命はないよ!」

サツサはロンに背中を守ってもらいなが周りを威嚇する。

「ドウイウツモリダ?」

イシユ・ドグランが私達の方を睨む。

「不思議に思っていたのですよ。攻城の割には攻撃がぬるいと」

声の主はアダチだ。チビに守られたアダチが前に出てきてレンジの横に立つ。

「本来ならあるはずの投石やバリスタ等の城壁外から城壁内の味方に対する援護がない

ことを。」

辺りを見渡す。周りで死んでいる人には矢がほとんど刺さっていないかった。

「先程のあなたの姿を見て確信しました。この攻撃はついでで本当は彼女を拐うためだ

と」

「キベンダナ。ソイツヲサラウノハタマタマダ」

「サツサ」

アダチの声と同時にダガーに入る力が強くなるのと同時に首から血が流れる感覚がした。オークからの殺気が濃くなった。

「イミガワカラナ。ソイツヲコロセバオマエタチガツミニトワレルダロウ」

「嘘なのはバレバレです。今は戦いで兵の死なんて当たり前です。それにここは私達以外は敵であるあなた達しかいません。彼女が死んでもあなた達が殺したと思うでしょう……もし、引いてくれるのでしたら僕らが、いえ、レンジが責任を持って守りますよ」

「……」

「もちろん迎えに来たときにはレンジと決着をつければよいでしょう。邪魔のない所で」

沈黙し目をつむるイシュ・ドグランに対してアダチはさらに言葉を続ける。

「……イイダロウ。レンジシヨウブハアズケタ。オマエ、ココノオサヲヨベ」

目を見開いたイシュ・ドグランの決定にオーク以外の種族から不満の声が上がるがイシュ・ドグランの一喝でその声は止んだ。侵攻する敵の勢いが止まる。そして何匹かのオークが前に出て停戦を申し入れた。事態を聞きつけた辺境軍が集まりだし、人間族とオークとの停戦のための交渉が始まった。

「緊急とは言えこんな目にあわせてしまつてすいません」

「結果的に助かつたのでいいですよ」

チビに首のケガを治療してもらつていた私にアダチが謝罪してきた。

「でもすごいですね。あの状況から休戦を引つ張りこむなんて」

「状況がよかつたからですよ。不確定要素が多くてかなり危険な賭けでした」

「シオリ！」

メリイの声。振り向くとメリイが走ってくるのが見えた。奥にはみんなもいる。

「よかつた……リザードマンに連れ去られた時はもう……」

メリイはそのままの勢いで抱きつく。そして身体中を触りながら

「ケガは？ 体は？ 何もされてない？」

「ちよつとケガしただけ、チビが治してくれたから大丈夫だよ」

「急にメリイが敵を押し退けて階段に登ろうとしたときは驚いたよ」

アデイさん達3人が遅れてやつて来た。私がいなくなつてメリイがかなり無茶をしてみた。

「あの……再会を喜び合うのはよいのですが少し質問があります。」

再会を分かち合おうとする私達にアダチが割つて入る。

「そもそも何でシオリさんは拐われたのですか？見た感じオーク達と何か関係がありそうなのですが……」

その疑問はもつともだろう。オークとの接点……あの不思議な夢しかない。だとするとこの力もオークから？時期が合っているから辻褄は合うことは合う。

「一応考えられることは1つありますがここではちよつと言えないので戻つてからにしてくださいませんか？」

「……わかりました」

オルタナに戻つてから集まつて話すこととなり、レンジ達と別れた。

「私には聞かされてないんだけど？」

「私達がいけない時に何かあったのかい？」

碧の部屋に戻り、メリイ達に問い詰められる。みんなには先に説明しないと「あくうん。かなり頭のおかしい話なんですけど」

夢でオークがいる建物に2回行ったことと謎の儀式、そして謎の儀式以降不思議な力に目覚めていることを伝えた。

「関係ありそうんだけど夢か」

「シオリもつと何かないの？ほらリザードマンと前に会つてたりとか」

オークについてあるとすればサイリン鉱山での調査のことぐらいだ。リザードマンに関してはここに来て初めて見たレベルだ。

「でもこの話をあの人達に話すのですか？」

ヒロトの言葉にみんなが苦い顔をする。当然か……

「ま、まあ、とにかくシオリがそう言うのだから信じるしかない。現にオークに狙われているから外に出るときは私達で守ること」

「それにオークとの交渉がどうなるか気になります。」

私達はオークとの交渉が終わるまでここに足止めされている。理由は交渉が決裂した場合の兵力確保のため、既に補充兵の手配等の陳情はされているので少なくともそれが来るまではここで待機だ。

オークの圧倒的優位な状態で突然の休戦の申し入れ。その意図が読めないことと長年敵対していたこともあり人間側の意見は割れていた。だが日が経つごとに大きくなる敵陣地と反比例するように反対意見は小さくなっていき、ついに人間族とオークの休戦協定が結ばれた。

## 36話

鐘が鳴り終わったシエリーの酒場。ソウマ克蘭に常連客を取られたとはいえ新規の客を開拓し、前の活気を取り戻したのだが今日は様子が違った。1日の疲れを癒そうと酒場に入ってきた人はある席を見るとUターンしていつてしまう。

ある席には2つのパーティーがいた。1つは新人義勇兵の中ではトップクラスの實力を持つレンジパーティー。もう1つは新人義勇兵の中ではそれなりに名が売れているシオリパーティー。2つパーティーは以前に組んで依頼を受けていたので再開して酒を酌み交わしているのではなく……

「……………」

レンジパーティーは他のパーティーと基本的にあまり関わらない。こうして他パーティーとこうして同じ席に着くことが珍しい。しかし、レンジパーティーからかなり不機嫌なオーラが漏れている。まるでレンジパーティーがシオリパーティーを攻めているように……。

周りに座っていた人も私達のただならぬ雰囲気を感じてかそそくさと食事を済ませるか途中で席を立ち去ってしまった。

今酒場にいるのは私達以外には噂好きの人達。ナナンカ防衛要塞線崩壊の危機を救ったパーティーを人目見ようと訪れた人達だ。

「お前……なめてんのか？」

ロンはテーブルに足を投げ出し腕を組んで不機嫌な顔を隠さずに私を睨んで言った。もちろんレンジ達も目線でロンの言葉に同意している。

「ほ、本当ですよ……」

「はあー、なら夢でオークに変なことされてそれが原因で狙われてると……」

ロンがため息をつきながら疑いの目を向けてくる。

「サイリン鉾山の時にオークに恨みを買ったとか？」

周りの雰囲気気づいたサツサが助け船を出してくれる。

サイリン鉾山の時……調査の時と拠点攻撃の時……別に何も恨みを買うようなことはしていない

「それはないでしょう」

私の言葉を代弁するようにアダチが言った。

「むしろそれならレンジや我々レンジパーティーの方が恨まれていると思います。それに恨まれているならその場で殺すはずです。しかし拐おうとしていた……」

アダチはそう言って手を顎に持っていき思考の海に入ってしまった。

調査の時は上位オークをレンジが倒した。拠点攻撃の時はレンジ達のパーティーが正面からの攻撃班に参加していた。私達の班も上位オークと遭遇したが倒したのはオリオンの人達で私達のパーティーではない。

「オークはシオリを拐おうとしてたけど他のはどうなの？リザードマンとか」

「あ、オークに比べると私の扱いがぞんざいだったような・・・」

リザードマンに城壁上に運ばれ投げ捨てられた時はモーターレイを唱えるのを中断させるためだと思っていたがリザードマンはこちらの言葉を喋っていなかったから理解できないと思う。それにサツサが私の首に押し当てたダガーを強くした時はオークだけ殺気が強くなった・・・

「オークはシオリさんを拐おうとしていたがリザードマンなどの種族はどうでもいいと・・・」

「私もシオリとずっといるけどオークに関わったことのあるのはそれだけのはずよ」

メリイが私が攻められるのが気に食わなそうにレンジパーティーに言う。

「どちらにせよ情報が足りなすぎます」

「あくーいたいた〜」

重い空気を気にしないほど陽気でそして甲高い声が酒場全体に響いた。酒場中の視線が入り口に集まる。ロンから「あの野郎・・・」と怒りの声が聞こえる。



「みんなくひつきしぶりく。ひよむーだよ。レンジパーティー、シオリパーティーはく今すぐレッドムーン事務所に集合く。ブリちゃんが呼んでるよく」

「あなた達に緊急の依頼を受けて欲しいの。受けないなら兵団指令へオーダーく扱いにするから」

兵団指令へオーダーくというのは言葉の通り、オルタナ辺境軍義勇兵団所属の義勇兵に下される指令だ。ただし、指令ではあるが強制ではない。受諾するかどうかは自由だ。もつとも、適任者が特段の理由もなく受諾しない場合は、信用を失うらしい。拒否したら兵団指令へオーダーく扱いにする。これは絶対に受けなさいということか。

「依頼の内容を教えてもらえませんか？」

「依頼は2つ。ソウマのクラン暁連隊へDAY BREAKERSくへの言付けとセントール族への書状の送付」

アダチの質問に所長が答える。

セントール族は半人半馬の種族だ。誇り高く半身が馬なので機動性がかなり高い。ここオルタナ周辺では風早荒野に集落を築いていると聞いた。ソウマは前に風早荒野をさらに越えたところにあるワンダーホールにいる。

「風早荒野のセントール族に辺境軍からの書状を渡してソウマクランと合流して言付けを伝えるってことですか？」

「ソウマクランへの合流を先にして」

現在ナナンカ防衛要塞線はオークと休戦中だ。休戦と言っても双方分かりましたと言つて各砦に戻る訳ではない。

片方が武装解除する降伏ではなく、双方が力を保持したまま一時的に戦闘行為を中断した状態だ。ここでどちらかが手を出すと休戦は破られて戦闘状態になる。オーク側は城壁外に大きな陣地を築いていたが私達の側は城壁の修復、失ってしまった人員の補充や治療とやることはいっぱいある。準備が整っていない時にソウマクランがオークと戦闘行為を行つてしまうと休戦協定に違反したといちやもんをつけられて再開してしまうと目も当てられない。

「本国から兵士を呼ぶのは？」

「ダメよ」

所長曰く、本国の兵士は使えない。本国は周りに敵はいない。敵らしい敵、蛮族がい

るのだが基本的に蛮族同士で争っていて仲裁のために派兵する程度だ。だから兵の練度が恐ろしく低く、士気も低い。そんなのが最前線、しかも最大の敵対国家オークと戦おうものならオークへのボーナスタイム。ナナンカ防衛要塞線の崩壊だ。

「だから辺境軍との協議の結果、周辺地域の兵の召集と同盟国家との共同戦線で乗り切ることになったわ」

同盟国家最大派閥の影森のエルフ族、黒金連山のドワーフ族、セントール族はナナンカ防衛要塞線から離れすぎているので風早荒野からそして少数種族だが噴流大河〈ジェットリバー〉に住むマーフオークとセファリッド。

噴流大河〈ジェットリバー〉は他の同盟国家と面していないが2つの種族は水中で生活するのでオーク達は手が出せないでいる。

「マーフオークとセファリッドはセントール族がどうかしてくるから気にしないで。1番優先するのはソウマ克蘭とオークがかち合う前に合流してこの事態を伝えることいい?」

所長に依頼を受諾することを伝えてそのままシェリーの酒場に戻る。入ってきた瞬間店員の責めるような目線を受けつつさつきと同じ席に座る。料理が並びきってからアダチが口を開く。

「依頼に関してですがシオリさんの力は使うのは厳禁です」

「えっ？別にいいですけど」

別に言われなくても本当の緊急時位しか使わないし・・・

「本当にオークの儀式で手に入れたのなら使った場合相手に気取られる恐れがあります」

リバーサイド鉄骨要塞とデットヘッド監視塔がどれくらい離れているかわからないけどオークには竜騎兵がいる。私が城壁外にいることが分かればすぐにでも拐いに来るだろう。

「大丈夫。今度こそ守って見せる」

メリイが真剣な顔で私を見る。リザードマンに不覚を取ってしまったのを気にしている。しかし、あのリザードマン他のと比べてかなり早かった。イシュ・ドグランに対しても一歩も引かなかったことからかなり力を持っていると思う。

「メリイ、ありがとう。でも・・・」

私はレンジを見る。私がいると分かればイシュ・ドグランが出てくる。そしてレンジ

と死闘をする。

「大丈夫だ」

私の思いに気づいて左腕を上げて答える。チビに治療してもらってそれほど日数はたっていないが動きには問題無さそうだ。

「我々がちんたらしている内にソウマ達がオークと戦ってしまうとアウトです。準備ができ次第ここを立ちます」

## 37話

「通常、風早荒野に行く場合、ナナンカ防衛要塞線からデットヘッド監視砦を避けるように大きく迂回して行きます」

ナナンカ防衛要塞線に向かう馬車の中で地図を中心に円陣を組んだ私達にアダチが言った。レンジ達は1度風早荒野に訪れたことがあると聞いた。

私のパーティーはオルタナ周辺から出たことはないので1度でも風早荒野に行ったことのあるレンジ達の存在は心強い。

「もちろんオーク達もそれは折り込み済みで警戒はされています」

ナナンカ防衛要塞線から風早荒野に向かう道を指で指し示しながら幾つかの場所を円を描く。おそらくその円周辺で戦闘または遭遇の危険があるということだろう。

「風早荒野でならいざ知らず、道中で戦闘を行えば休戦状態は解除されるのは明白なので一部ルートを変更します」

もう1度風早荒野への道順をなぞる。しかし、先程と違い円を描いた部分を避けるようになぞっている。

「その情報は確かか？」

レンジがアダチの言葉を遮るように言った。

「地図を受けとる際にブリちゃんを教えてくれたのでかなり固いかと」

「あの。今はオークも厳戒体制なのであまり情報が役に立たない可能性が」

城壁前に形成されている敵陣地。もう拡大はしていないだろうけど物資のやり取りや奇襲対策のための巡回は頻繁にやっているはずだ。

「移動の時はサツサが先行して索敵しながら行くのでその心配は大丈夫です」

サツサが緊張した面持ちで頷く。サツサのミスで取り返しのつかないことになるのでプレッシャーを感じているのだろう。

しまったな。こういうのは十分想定できたし、ダイさんかステラさんに一時的にパーティーに入ってもらうことを思いついておくべきだった。そう思うが2人はフリーで色々なパーティーを渡り歩いているのでこの急な依頼に反応してもらえるか微妙だが……

馬車での作戦会議が終わった位にナンンカ防衛要塞線に到着する。最後に見たときより人が多いし、ちらほらとエルフやドワーフの姿が見える。同盟国家の協力が決定して先見部隊として派遣されたのだろう。

警備の責任者に依頼内容を告げて通してもらおう。迂回の道は完全に壁となっていて梯子を下ろしてもらって移動する。降りた直後からつけられて見えない所に行った瞬間

間襲われる危険があるのでサツサはこの時点でせわしなく動き辺りを警戒してくれている。

風早荒野への道は私達が警戒していたよりもオークの警備は緩かった。これはデックトヘッド監視塔がそこまで大きな砦ではないことが理由だと思う。出世できるオークはリバーサイド鉄骨要塞に赴任するようになっていいのか遠目から見えたオークはやる気がないのか座り込み欠伸をしている。

「この様子なら問題なく行けそうですね。ソウマ克蘭もワンダーホールからこちらに戻ってきている様子もないですし」

休憩中にアダチが普通の声の大きさで言った。隠密行動中なのでみんな話す時は小声だ。ロンでさえ一言も喋らない。そんな中で普通のトーンで喋ったアダチを何人が責めるような目で見た。

「そういうのがフラグって言うのよ」

メリイがアダチに注意する。もちろん小声で。アダチは自分が気を抜いてしまったことに気づいたことに謝罪をするがロンの視線がかなり厳しい。ロンも自分の声が大きいと自覚しているし、自分が頑張っているのに何で一番守りそうなお前が破るんだと非難しているのだろう。

そういったアダチのフラグ発言は折れてくれたみたいで私達は一度も接敵しないで



風早荒野に到着した。

ナナンカ防衛要塞線から続いていた鬱蒼とした森は風早荒野に踏みいると開けた。荒野と言われているが草原でちゃんと背の高い木々があちらこちらで見える。そして風が強いこれのおかげで風早なんだと思う。

「すごいわね。地平の向こうまでずっと草原？」

アデイさんが額に手を当て遠くの方を見渡している。草原は見渡す限り切れ目はなく。視界はかなり良好だ。

「これだけ解放感があると寝転ぶと気持ち良さそうですね」

「ここは危険なモンスターがいますから寝転ぶと危険ですよ」

辺りを見渡しながら言ったヒロトにアダチが注釈する。オルタナ周辺は辺境軍が危険なモンスターを駆逐しているので穴熊や狼犬がいる程度だが人間族や同盟国家の影響が届かない場所は危険なモンスターが徘徊している。

「でもこれだけ視界が開けているのならすれ違っても気づけますね」

「ええ、まずはセントール族の集落に行きましょう。おそらくソウマ達はそこでキャン

プをしています」

アダチの号令で移動を始める。途中狼の群れが木の影で休んでいたり、大きな鶏がこちらの様子を伺っているのが見えた。大きな鶏はこちらの数が多いので諦めたのかさっさと移動していった。狼はオルタナでも狼犬がいるからそうでもないけどあの大きな鶏はモンスターだろう。オルタナ周辺とは違った環境。その珍しさに辺りを見渡している内にセントール族の集落に到着した。

ぼつんと小さな塔が見えてしばらく歩くと坂が見えた。この周辺は大きな盆地になつており、下には幾つかの泉を中心にした村が、全体を合計すると十分街として言い張れるまでの規模の街があつた。普通にこの規模の街を作ると周りから丸見えだから盆地に作つたのだろう。だとしたら最初に見た塔は見張り台ということか。

盆地の坂を下つて街に近づく。街はかなり防御力が高く、2メートル位の水掘り、モグゾーより高い土壁、そして土壁の上には柵がある。危険なモンスターが相手には過剰だがおそらくオーク等の襲撃もあるのだろう。

水掘りに沿つて歩くと橋が見えてきた。そして橋の先にセントール族がいた。セントール族は私達を見ると身構えたが団章を見せて義勇兵ということを知らせると片手を街の方に向け出迎えてくれた。

「ようこそ。ビンセントへ」

このセントール族の街はビンセントという街なのか。

「すみません。お尋ねしたいことが・・・」

アダチが門番のセントール族にソウマ克蘭がまだここにいるか聞く。今ビンセントにいる義勇兵はソウマ克蘭しかおらず所在はすぐにわかった。ソウマ達はビンセントに少しの人員を残してワンダーホールに向かっているらしい。

私達は門番に礼を言つてビンセントの中に入る。ビンセントの中は当然というかセントール族がたくさんいた。上半分は人間なのに下半身が馬。こんなにたくさんいると自分が別世界に来てしまったかと錯覚する。

「セントール族つて下半身馬ですよね？ 私達乗れません？」

「失礼よ」

メリイにたしなめられる。セントール族は誇り高い種族。ただの馬扱いは失礼に当たる。幸い周りのセントール族には聞かれていないので助かった。

そうこう言っている内にソウマ克蘭が滞在しているという建物の前に到着した。ビンセントにくる人はほほいさないため宿屋はない。外から来た人は希望すると規模によつてこういった建物を貸してくれるのだ。私達が建物の中に入ると何人かが集まつて酒を飲んでいた。私達を見つけるとジロジロ見てきた。

レッドムーン事務所からの使いであることと現在の状況を説明するとソウマ達はつ

い数日前にワンダーホールに向かつて戻ってくるまでしばらくかかると言われた。

滞在して待つかワンダーホールに向かうにしても今日の寝る場所を確保しなければならぬので私達が泊まる用の宿を借りた。風呂はない。お湯で体を拭けるだけありがたいか。

「やはり急ぎの内容ですし、ソウマ達に会いに行く班とセントール族に書状を渡す班に別れましょう」

「その方が良さそうですね」

宿を借りる際、書状を渡そうとしたが、後日代表の元に渡しに行くように言われたのでアポイントメントを取って引き下がった。

「セントール族とのやり取りは私がやりましょう」

アダチがやってくれるのなら安心だ。相談の結果、街に残るのはアダチとアオイちゃんになった。アダチは1人でも大丈夫と言ったが助手が1人でも必要だろうということとでアオイちゃんが残ることになった。簡単な掃除のあとセントール族が経営する酒場で食事を行い、明日に備えて休む。

「行きましようか」

早朝、準備も終わらせワンダーホールへの道順も教えてもらい私達はワンダーホールに出発する

## 38話

ピンセントの人達にワンダーホールへの道のりを聞いて出発する。風早荒野は視界がよくサツサに索敵を任せずともモンスターを見つけて回避しながら移動する。天気もよく風が少し肌寒いが快適だ。

「あそこの丘がそうみたいだね」

サツサがワンダーホールを見つけたみたいだ。大きな丘の斜面にぼつかりと開いた穴。聞いていた通りあれがワンダーホールだ。横幅は少なくとも百メートル位ある。

「こんなところパーティー単独で入る場所じゃないですね・・・」

ワンダーホールには危険なモンスターがいると聞いていたが入口付近にはいない。穴の中は斜面になっている。穴を覗くと風早荒野で見かけた鶏がいた。遠目で大きいと思ったがやっぱり大きい。2、3メートルはあるんじゃないだろうか。そしてよく見ると首を跳ねられたりして死んでいる鶏もいる。

「どうやらワンダーホールに入るにはあの鶏をどうにかしないとイケないようですね」

あの鶏達はワンダーホール入口を住みかにして中に入るには倒さなければいけないみたいだ。

「クエツ?」

「一匹私達に気づいて近づいてくる。鶏冠があるから雄だ。」

「うわ〜」

「鶏つて近くで見ると怖い顔してますね」

「・・・グロツ」

鋭いくちばしに血走った目。鶏冠には太い血管が浮き出ている。それがどんどん近づいてくる。はつきり言うど気持ち悪い。鶏はちよつと離れたところで止まると体を揺すったり羽を広げて威嚇しだした。

「ここにいるのもまずそうですね。離れましょう」

ワンダーホールから距離を取る。鶏は私達が離れても穴の中に戻らずにじつとこちらを見ていた。しばらく様子をうかがっていると急に走りだしこちらに近づいてきた

「クエエエエ」

威嚇して離れたが一向に消えないから痺れを切らせたんだろう。巨大鶏は飛び上がったて足を私達に向けてきた。

レンジが前に出てグレートソードを盾にして受ける。私達はその間に陣形を整えた。

「ギャギャア。グエー!」

巨大鶏は足を左右に出して連続で蹴ったりジャンプして体重を乗せた両足で踏み潰

そうとする。

「ーッ！」

連続攻撃の隙をつき、グレートソードでの回転斬りを巨大鶏の脚にぶつける。血が飛び散るが両断にいたっていない。

「ウラァー！」

巨大鶏の後ろに回ったロンが剣を深々と突き刺す。脚に比べて体は柔らかいようだ。

「グゲーー！」

ロンに刺された痛みか巨大鶏はひとときは大きな声で鳴くと標的をロンに切り替える。

「うおっ!？」

巨大鶏は大きく振りかぶると鋭いくちばしをロンに向けて降り下ろす。ロンは盾で防御せずに大きく飛び退いて回避した。

「グエツ！グエツ！」

巨大鶏はくちばしで執拗にロンを追いかける。

「ロンさん！」

ヒロトが巨大鶏を攻撃すると今度はヒロトを標的に……って姿の通り鳥頭だこいつ。

「こっちだ！」

「は、はい」

巨大鶏のくちばし攻撃、脚の連続攻撃を避けながらヒロトはレンジの元に移動する。  
「はああああー!」

!?巨大鶏のくちばし攻撃に合わせてレンジがグレートソードを叩きつけた。

「?!?!」

!?レンジの攻撃が巨大鶏の首に命中して巨大鶏の頭が吹き飛ぶ。頭を失った巨大鶏は首から血を吹きながらあさつての方向に走り出した。頭がないから死ぬのは時間の問題だろう。穴の方に視線を移し、追加の巨大鶏が来ないことを確認して私達は集まった。

「入口付近で待ち構える予定でしたけど予定が狂いましたね」

周りには開けた原っぱで身を隠す場所はない。かといって入口に戻って巨大鶏を倒して待つのもダメだろう。さっきの戦いで巨大鶏はかなり耐久力があることがわかった。

「入口付近じゃなくとも中に入って待つのはどうだ?」

考える私にレンジが提案する。レンジやアディさん、それにロンがいればあの巨大鶏の巣を抜けるのは簡単なんだろうけどワンダーホールの入口は広かった。多分入口の時点で複数個あると思う。

「多分入口が広いのですぐに分かれ道に行き当たると思いますがし巨大鶏と奥にいるモンスターで挟み撃ちになるのが怖いので却下で。それにソウマ達が戻ってくるまで戦い



続けるのは現実的じゃありません」

簡単な情報収集でワンダーホール奥にはオークやこの周辺の勢力争いに敗れた異種族や危険なモンスターがいるとの話を聞いた。もし私達の手に終えない敵と出会った場合、入口付近で陣取る巨大鶏がかなり厄介だ。

「・・・」

レンジは黙っている。納得してくれただろう？

「ワンダーホールでソウマ達を待つのは諦めましょう」

情けないがここはピンセントへ戻るしかない。ピンセントへ戻った私達がソウマに出会えたのは1週間後だった。

「なるほど・・・今そっちの方はかなり大変な状況みたいだね」

ソウマは椅子に座って腕を組んでそう言った。ワンダーホールから戻ってきてもらって疲れているだろうが無理を言っただけで会ってもらっている。ソウマ以外にはエルフのリーリヤが同じ席に座っていて奥にはピンゴとゼンマイが背中合わせで座っているのが見える。私達の方は大人数で押し掛けたら悪いのでメリイ、レンジ、アダチの4人

だ。

所長の言付けはオルタナに戻ってくるかセントール族の集落ビンセントの警護。オルタナに戻る場合は戦闘行為の禁止だ。

「ビンセントへの滞在か・・・もしかしたらデットヘッド監視塔に攻撃することを考えるかもな」

オーク側はナナンカ防衛要塞線の城壁が邪魔で攻撃できない。こちら側は城壁の利点を捨ててまで戦いたくない。かといって引こうにもお互いの戦力が大きくなつてしまい引くに引けない。そのための打開策としてデットヘッド監視塔への攻撃。

「効果あるんでしょうか？」

「どうだろう？こんな大人数ここで遊ばせることなんてしないだろうし何か策でもあるんだろう。それにどのみち全員でオルタナまで戻ることはできないしな」

大人数で移動したら見つかってしまうから2、3パーティーに別れて移動するしかないが時間がかかる。それならば戻らずにここにいた方がいいというわけか。

「ではここままだることでしょうか？」

「ああ。ブリちゃんにそう伝えといてくれ」

ソウマクランはビンセントの滞在、セントール族は数十人がナナンカ防衛要塞線に派兵される。これで後はオルタナに戻って所長に結果を報告すれば依頼は達成だ。

「君たち俺達のクランに入らないか？」

席を立てて去ろうとした私達にソウマが言った。

「オルタナに戻ったらすぐにこつちに戻つて来なくてもいい。この件が終わったら君たちもここにきてワンダーホール攻略を手伝つて欲しい。」

「どうしてですか？」

「行ったことはないだろうけどワンダーホールはかなり広大だ。この大人数で何度もアタックをしているが未だに全容はわかっていない」

前々から複数のパーティーやクランがアタックして地図を作成する試みがされてきてソウマクランが参加してからは作成スピードも早くなった。しかし、まだ全容解明までいたっていない。それに私達も参加して欲しいらしい。

「すみませんがお断りします」

「断る」

レンジも断った。まあ群れる人じゃないですしね。

「そちらの2人は？」

ソウマの視線はメリイとアダチに移る。パーティーの引き抜きを狙うなんてそんなに数が欲しいの？

「嫌よ」

「抜ける気はありません」

当然メリイも断る。レンジパーティーの頭脳担当のアダチも断った。ソウマは「気が変わったらいつでも言ってくれ」とあっさりとは帰してくれた。宿に戻ると3人にも別の人からクランに入らないか?と勧誘されていたらしい。この分だとレンジの方も同じだろう。

「何だか感じが悪いような・・・」

噂では義勇兵の中の義勇兵とか人柄がいいと聞いていたがそうでもないような気が。これならオリオンの方が礼儀正しくていい。まあ接する時間が少ないからかもしれないし、近くにいればそうでもないだろう。

とにかく依頼は達成した。さっさとオルタナに戻ろう。

## 39 話

「お帰り。ちゃんとできたみたいね」

ビンセントからナンナ防衛要塞線に戻った私達を出迎えたのは鎧を着た所長だった。よそ行きだからだろうか全体的にメイクが濃い。

「えっ？所長どうして？それにその格好・・・」

「戦力が予想以上に集まったからね。この膠着状態を打破するためにこつちから仕掛けることになったのよ」

所長はそのまま私達を連れて砦に案内してくれる。通された部屋は広く中央に大きな机があつて机には地図や何かの情報が記された紙が乱雑に置かれている。

「風早荒野に行つていた子が帰ってきたわ」

所長の言葉に部屋にいた人の視線がこちらに向く。辺境軍の軍服を着た人、シノハラさんやカジカさん、ホーネンさんもいる。後の人はクランのリーダーかギルドの人だろう。

「偵察で得た情報と君達の情報を加味すると陣地外の状態はかなり緩いみたいだな」

兵団指令（ヘオーダー）成功の報告とナンナ防衛要塞線と風早荒野間の状態を報告す

ると髭を蓄えた辺境軍の人が嬉しそうにそう言った。

「質問があるのだが……」

主にナナンカ防衛要塞線周辺での状況について質問が出る。これにはサツサが主に答えたが、重箱の隅をつつくような質問に晒されかなり可哀想な状態になっていた。

「もしかしたらまた呼ぶかもしれないから横の部屋で休んでおいてくれたまえ」

扉の前で待機していた兵士に隣の部屋へ案内される。兵士は「何か飲み物を持ってくる」と言つて部屋を出ていつてしまった。

「これつて俺達も参加することになるんでしようか？」

「まだ分かりませんが後で正式な依頼か兵団指令〈オーダー〉は来るでしょうね」

ヒロトの疑問にアダチが答える。オーク達の陣地は実際には見ていないが待ち構えている所に攻撃をすることになるから勝つても負けても被害が大きくなると思う。

「やるにしても真つ正面からはやらないよ。奇襲か何かで相手の体勢を崩してからだよ」

椅子に座つたアデイさんが手で獲物に食らいつく仕草をする。

「でも奇襲つて上手くいくのですか？」

「それを考えるのが上の仕事。人を集めてるんだ、それなりに現実的な手があるからこうして集まっているんだ」

そもその発端が奇襲からだったから今度はこっちからって訳か。それにこの膠着状態をずっと続ける訳に行かないだろうし。ソウマさん達もオルタナに帰れなくなっちゃう。

「あなた達もういいわよ」

扉を開けて入って来たのは水を持った兵士ではなく所長だった。

「あなた達の持ち帰った情報が良かったからすんなり決まったわ。後は煮詰めるだけだからゆっくり休んでなさい」

「所長は一緒にいないのですか？」

「後は役割分担と配置だからいいの。美味しいところは功績が欲しい人達の好きにさせればいいわ。あ、辺境軍のことよ。本当に……どんな功績上げても本国に行けないに」

所長は笑いながら肩をすくめる。

「あの、やはり私達は参加ということですか？」

「ああ、ごめんなさい。兵団指令へオーダーを出しているのよ」

オルタナに戻って確認して急いで戻っても参加できないってことか。みんなの顔を見渡す。みんな仕方がないって顔をしている。

「数日で作戦が開始されるからゆっくり休んでちょうだい。ああ、それとあなたのパー

「ティーは残りなさい」

レンジ達は兵士に連れられて部屋から出る。部屋にいるのは私達パーティーと所長だけだ。所長は私達を見てニコニコしている。

「あの、私達が残された理由は？」

「この作戦中あなたのパーティーに入ってあげる」

「はあ・・・えええ!?!」

「そんなに驚くことないじゃない。私やギルド局員は克蘭に属していないパーティーを指揮するんだからどこかのパーティーに入るのは当然じゃない」

「言っていることはわかるけどどうして？」

「あなたを押さえるとレンジの様子もわかる。あの子無茶苦茶するから大変なのよ。報告によるとあなた達の6人だけで突っ込んで行ったのでしょうか？いくら何でも無茶しすぎよ」

オークに拐われそうになり、レンジに助けられたがそのまま報告する訳にいかなかったので当時、私はレンジパーティーに臨時で入っていたことになっている。すごい混乱していたので今のところバレていない。

「あなたがレンジに首輪をしてくれたらいいのに」

「そんなの無理ですよ」



「あら？アプローチ受けてないの？あの子意外にシャイなのね」

所長の中ではレンジは私に気があると思っっているらしい。私がパーティーと離れてレンジパーティーに入っていた弊害がこんなことになっているとは・・・

「とりあえず作戦中は一緒に行動するからそのつもりでいて」

「そうなるかと必然的に所長の護衛ってことですか？」

「そういうこと。あとパーティーメンバーなんだから所長じゃなくてブリちゃんと呼びなさい」

「はい・・・ブリちゃん」

「はあい♪」

「なかなか鍛えているみたいだけどまだまだだね。もっと頑張りなさい」

「はい」

休息中のある日、ブリちゃんが私達の力を見たいと言ってきた。それでついさつきヒロトとの戦いが終わったところだ。ブリちゃんのクラスはヒロトと同じパラダインで

アタツカー。片手剣なのにヒロトを吹き飛ばす位の力強さだ。

「お疲れさま」

「あ、はい。負けちゃいました。もうちょっとやれると思つてたんですけど」

今ブリちゃんはアデイさんと戦っている。お互い一進一退の戦いをしてる。アデイさんは鎧で全身を守つていても間接の隙間に突き刺したりする。現に今もそうやってるがブリちゃんは剣や盾で巧みに防御している。

「出来るかは別としてあの動きは参考になります」

ヒロトは2人の戦いをじつと見ている。私の知る限りヒロトの周りのパラディンはクザクとロンだけで、クザクは技量に差があるし、ロンは野性味がありすぎてヒロトには合わない。その点ブリちゃんの動きはヒロトにとってかなりいいお手本になっているようだ。

「ここまでにしましょう」

「ええ」

「はあく。ちよつと休息して次にしましょう」

アデイさんとブリちゃんの戦いは決着がつかないまま終わった。この時点でブリちゃんはアデイさん並の強さを持っている。あれっ？これって私達必要なくない？

「ブリちゃんは指揮官なんだから戦いに集中したらダメじゃない」

メリイからの突っ込み。そっか大人数の指揮をするからまともに戦えないか。次はアオイちゃんが前に出てくる。

「よろしくお願いします」

「神官は後衛を守ったり、緊急時に前に出たりするぐらいだけどちやんと力量を確認したいの。だから結果は気にしないで」

アオイちゃんが緊張した面持ちで杖を構える。ブリちゃんは構えたと思ったたら一瞬で距離を詰めて剣を首筋に剣を当てる。

「あっ、えっ!？」

「仕方がないけど経験不足ね。もっと隙を……って言ってもまだわからないか」

アオイちゃんの番はすぐに終わりメリイが入れ替わる。メリイはアオイちゃんのようにすぐには終わらなかったが結果は似たようなものだった。さすがに経験不足とは言われなかった。

「よし!最後はあなたよ」

ブリちゃんが笑顔で手招きする。

「あの〜私戦士職でも神官でもないんですけれど〜」

「知ってるわ。いつでも神官に守ってもらえるわけないでしょ」

確かにそうだけどそうだった時点でパーティーがほぼ全滅していると思うのですけ

ど・・・。ブリちゃんは私が出てくるのを待っている。諦めてブリちゃんの前に立つ。「そんなのあり得ないって顔してるけどリーダーは常に最悪の状況を想定しなきゃダメよ」

私とブリちゃんはお互い構える。結果は・・・言わなくてもわかるだろうけど一瞬で終わった。アオイちゃんより酷いって言われた。

「シオリは私が守るから大丈夫よ」

そうだ。私にはメリイがいるし、こんな状況には持つていかないように心がけよう

## 40話

## 奇襲攻撃

オークが1匹無警戒に歩いている。周りからの情報では近くに敵はいない。

『前方のオークの始末お願いします』

オークの始末をお願いしてすぐに近くにいた盗賊が背後から組み付いて無防備にさらけ出された首筋にダガーを突き刺す。

「ツッ！」

オークは声を出し暴れようとする。しかし、口は手で押さえられ、体は関節が決まっ  
ていてまともに動かせない。まるで蜘蛛に絡め取られた獲物のように。盗賊のスキル  
の蜘蛛殺しへスパイダーだ。

首筋。致命傷を受けたオークは徐々に動きが鈍くなっていく。倒れそうになったと  
ころで盗賊が所属しているパーティーメンバーがオークの体、身に付けている防具を受  
け止め、できるだけ音を出さないように倒す。近くに敵はいなくともコボルドの聴力に  
は十分注意すべきだ。

『草葉の影などの見つけにくい場所に隠してください』

オークの体を支えていた人が片手を上げ、了承の意を伝えてくる。

『前方のオークの処理は完了しました。引き続きゆっくりと前進お願いします』

オーク発見により、待機してもらっていた後方の部隊に連絡する。無駄な声や人の行き来がないため、私達の耳には木々の声や鳥の声などの自然音しかない。

今、私達はナンナ力防衛要塞線から出てオークが築いた陣地に向かって移動している最中だ。

本来なら隊長であるブリちゃんが指揮すべきなのだが今私が指揮を取っている。

「あなたなかなかいいの持っているそうじゃない」

朝早くにブリちゃんに呼び出されての第一声はそんなセリフだった。

「はい？」

ほぼ寝起きだったため、ブリちゃんの言っている意味が理解できない。

「ネクロマンサーが持つ固有のアビリティのことだよ」

ブリちゃんの後ろに立っていたオリオンのシノハラさんが教えてくれる。

「あ、あー」

思い出した。最近色々ありすぎてどうでもいいことはすぐに忘れてしまう。

「その様子じゃ、確かなようね」

そして始まる質問の嵐。

「どれくらいの距離まで使えるの？」

「試したことないからわかりません」

「何人まで伝えられるの？」

「全体に伝えることはできませんが個別は試したことないです」

etc

「どういうこと!?!何で調べないのよ!」

ブリちゃんがテーブルに拳を叩きつける。まあ質問ほぼ全部に「試してないです」と

か「わかりません」って言われたら怒るか。

「ちよつと来なさい!」

そこから私への実験が始まった。壁を介した連絡。どこまでの距離まで伝えられるか。最大何人まで個別に伝えられるか・・・

そしてその実験が終了した次の日からブリちゃんとホーネンさんのツーマンセルからの兵法や指揮についての勉強。かなりの詰め込みで朝早くから日が落ちるまで続く。

「次の作戦私の代わりにあなたが指揮を取りなさい」

連日続く指導でくたくたの私にブリちゃんはそう言った。

「えっ?!無理ですよ」

「指導している私とホーネンかオツケーを出すのよ。それに0から立案するのじゃなくて大筋の作戦があるからあなたはそれに沿って指示を出すだけ。大丈夫。横に私がいるから」

そんなこんなで私がブリちゃんに代わり指揮を取ることになった。

大筋があると聞いていたが大まかな進行表で誰を抜擢するかとかそこに至るまでの方法はないのでこちらが考える必要があり、2人の指導の合間に必死で考えた。そのお陰でかなり寝不足だ。

ユサユサ

肩を揺すられて意識が戻る。振り向くとメリイが肩を揺すっていたようだ。意識が飛んでいたみたいだ。問題ないことを伝え移動を再開する。

夜の11時、月の明かりは……まあ明るい方。天候は少し相手に味方したみたいだ。周りを見渡す。私の姿が見える人は皆私をじっと見ている。深呼吸。こんなに注目されるのは初めてなので顔が赤くなるのを感じる。私の一言でみんな行動し、死ぬ。ブ



りちゃんやホーネンさんには叱られてばかりだったから自分に才能があると思えない。が、やるしかない。皆私の言葉を待っている。

『それでは作戦を開始します。盗賊の方お願いします』

作戦開始：0分経過

作戦開始と同時にあらかじめ選抜されていた盗賊が闇夜に紛れ敵陣地に浸入する。目的は兵糧庫かそれに準ずる施設への放火。まずは重要施設への攻撃で相手の意識を反らしてこちらの奇襲を成功させる。ゆつくり数えて5分位。煙が登ってゆくのが見えた。

「騒がしくなってきた」

地面に耳を当て音を聞いていた盗賊からの報告がくる。少し気づかれるのが早い？しかし、もう止められない。

『火矢お願いします』

作戦開始：10分経過

狩人や弓を扱える人達が順次焚き火に矢を入れ火をつけてゆく。隠れているのに堂々と焚き火ができるには理由がある。まず縦穴を掘り、焚き火ができるスペースを作る。次にその横に穴を掘って横穴で繋げトンネルを作る。最後に穴の中で焚き火を作れば完成だ。焚き火から出る明かりは穴の中なので見えない。またトンネルを通して

風が通るので効率よく火を燃やすこともできる。

『じゃんじゃんお願ひします』

放たれた火矢は大きな弧を描いて敵陣の中に消えてゆく。

『突撃隊の皆さんそろそろです』

火をつけるのだつたら魔法使いの炎熱魔法も加えるべきだが、魔法は術者から直線に飛ぶのがほとんどだ。まだこちらの位置を把握できていない内にこちらの位置を教えるような行為はできない。位置をがわからないからこそ突撃の成功率が高まる。

火矢の効果が出てきてそこから中から煙が上がり、オーク達の声がこちらにも聞こえてきた。いい感じに混乱してきている。

『突撃ー！』

私の号令を待っていたのかのように大きな掛け声を上げ、突撃する。ここで行う指示は全て終わった。私達も行こう。

作戦開始：20分経過

「じゃあ。行くわよ」

ブリちゃんやんが剣を抜きながら立ち上がる。その顔には笑みがこぼれている。

「いい、あなた達は私とこの子を守ること。でも、私とこの子両方が危険な状態になればこの子を優先させなさい」

ブリちゃんは護衛についた人に優先事項を伝える。名目上の隊長なのだから自分より私を守れと言ってくれている。

「光よ、ルミナリスの加護の元に・護法へプロテクション」

光が体を包み込む。他のパーティーも準備ができたみたいだ。

「行くわよー」

ブリちゃんの掛け声で私達も敵陣に突撃する。

私達が到着したときにはもうすでにいたる所で乱戦が始まっていた。見た感じ、やはり数で劣っているので少し押されぎみだ。突撃は成功している。なら単純に敵の対応能力がこちらの予想よりもいいことだ。

『今は耐えて敵の目を釘付けにしてください！』

これくらいで焦るな。自分に言い聞かせながら指示を出す。声は震えていないだろうか？指揮官の同様は隊全体に伝わる。こんなことで味方の士気を下げる訳にいかない。

「プギューー」

乱戦の合間を縫ってこちらにも敵がなだれ混んでくる。が、護衛のパーティーが間に入る。敵とのぶつかり合う瞬間、横から盗賊が敵の1体に組み付き攻撃する。敵の足並みが一瞬崩れた。そのスキを見逃さず逆にこっちから討って出る。不意を打たれた敵

は建て直せずに剣の餌食となった。

「すいません。遅くなりました」

作戦開始と共に敵陣に侵入した盗賊達が合流してきてくれた。彼らは遊撃隊の動きで苦しい戦いをしているパーティーを助けてくれている。よし、持ち直した。

ガラガラ

目の前の掘った建て小屋が崩れる。まだ火の手が上がって少し。崩れるのにはまだ早い。視線を向けると2つの影が戦っている。レンジとイシュ・ドグラン！2人は激しく剣を打ち付け合っている。

「レンジ！そいつは危険よ。数で囲みなさい！」

ブリちゃんの言葉を無視するレンジ。見かねた何人がレンジの元に駆け寄る。

「・・・邪魔するな！」

レンジは1歩引き、寄ってきた人を制する。あくまで俺とこいつの戦いなのだと思いがそう言っている。イシュ・ドグランはレンジのその姿を見て嬉しそうだ。

「レンジ。決着がつかなかったら次に持ち越しですから！」

「はあ？あなた何してるの？」

レンジは無言でイシュ・ドグランに突撃する。返事がないのは了承したことだろう。

「レンジは大丈夫です。むしろイシュ・ドグランを1人で抑えてくれています」

「チツ、レンジ！死んだらタダじゃおかないからね！」

次のフェイズまで約20分。それまでに決着はつくのだろうか・・・

作戦開始：30分経過

地面が揺れる。ここに突撃して早く時間がくるよう祈っていたがやつときた。それは雄叫びを上げながら姿を表す。義勇兵と辺境軍の混成隊。本隊だ。

私達の目的。それは本隊の突撃を成功させるための罠だ。放火と突撃の奇襲で敵の目をこちらに集中させる。その間に本隊は正面から突撃する。

正面にはもちろん柵や堀が作られており、侵入者を阻む。阻まれていた間に矢を射かけられれば本隊は大きな被害がでる。しかし、こつちに意識を集中させれば正面への対応が疎かになる。おそらく司令官であるイシュ・ドグランがレンジにかかりきりになったことで対応がさらに遅れたのだろう。

本隊は私達より少し離れたところで戦っている。同行している魔法使いは炎熱魔法を集中して使っているのか爆発音が断続的に聞こえる。

『本隊の近くに移動します。本隊との間にいる敵は本隊と挟み撃ちにするように倒してください』

敵陣は完全に私達の侵入を許してしまい、大混乱なのは確定だ。そしてこれを忘れてはいけない。

『アダチさん。いくつかのパーティーを連れてレンジの退路を確保させてあげてください』

戦線が少し広がった感覚。レンジはそれほど遠くに行っていないようだ。

「本隊と合流してしまうのも手よ」

ブリちゃんが助言をくれる。確かに隊の安全は高まるけど

「いえ、この作戦は敵陣を使い物にならないようにするのが目的です。このまま2つの隊で破壊活動を広範囲に行います」

ブリちゃんは納得してくれたのか何も言わない。

作戦開始：50分経過

本隊が参加してから約20分。突撃してからの10分と比べるとほぼ同じか早い位の感覚だと感じる。作戦開始から50分。私はブリちゃんから借りている懐中時計で時間を確認する。

地理的にこことテットヘッド鉄骨要塞は竜騎兵で1時間ちよつとかかる。このままここに留まるとテッドヘッドからの援軍まで相手することになる。私達の目的はここを陣地として使用できなくすることだ。決してここにいる敵を全滅させるためではない。

『時間です。ナンンカ防衛要塞線まで後退です』

まず最初は私達の隊に続いて本隊に伝える。よし、まずは本隊と合流だ。

『本隊と合流します。前衛は切り開いてください』

本隊との間にいる敵を蹴散らす。挟み撃ちしながら戦っていたので他と比べ敵の密度が低く、突破は容易だった。

はっ！レンジは!? 辺りを見渡す。アダチがいた。アダチは私が見つけたことに気づくと人影に紛れて見えなくなつた。アダチがここにいるということはレンジもこつちに来ているってことだ。イシユ・ドグランとの決着は!?

「シオリ！次は？」

メリイの声。しまった。今はみんなの命を預かっているんだ。気になるがレンジのことは二の次だ。

『退却します。殿へのフォローを忘れずにいきましょう』

作戦は次のフェイズに移行する。どれだけ消耗少なく撤退できるかが勝負だ。

## 4 1 話

## 撤退じゃなくて撤収

そして・・・

『退却します。殿へのフォローを忘れずにいきましょう』

「勘違いしない。逃げるんじゃないんで撤収」

「あ・・・はい、すいません」

ブリちゃんがギロリと睨む。司令部が逃げると言ってしまうえば、その瞬間、部隊が瓦解してしまう。今回は城壁まで撤収することは折り込み済みなので問題がないのだが。

「突撃！」

そこかしこで剣を掲げて敵の一団に突撃していくのが見える。

「フフ・・・私達も続くわよ」

ブリちゃんはあまり熱のない様子で剣を掲げ

「突撃」

降り下ろした。

護衛として2つのパーティーの前衛が露払いとして前に出る。そしてそのまま私達18人は突撃する。

本隊と奇襲隊との敵は挟み撃ちの形で攻撃していたので壁は薄いがこちらの人数以



上の敵がいるが倒す必要はない。

「足を止めない！敵を倒す必要はないの。駆け抜ける！駆け抜ける！」

いつの間にかブリちゃんが先頭に縦陣となつて目の前の敵を切つて駆ける。ブリちゃんの気迫のお陰か私達の前に立つ敵はいない。もつとも立ち塞がらずとも横切る際に刺したりして倒しているのだが。

「敵を倒す必要はないと言つておきながら倒して行くんですね」

「色々溜まつてるのよ」

私の横を走るメリイが苦笑しながら答えた。そんなメリイも手が届きそうな敵がいると杖で突き飛ばしたり、叩き倒したりしている。

ともかく、各所で突撃が行われ、敵の塊は大きく割られてしまつてもう統制がとれなくなつてしまつている。そうなつてくると我こそはと立ち塞がる者がいなくなり、自ら道を譲つたりと無茶苦茶な状態だ。

突撃した私達18人はあつさりと敵陣を突破して本隊の前へと駆け抜けた。

本隊はもう撤収をほぼ完了しており、奇襲隊の撤収の援護のため数パーティーが残つている程度だ。そのパーティーもこの状況下でやることがないと判断し、さつさと去つていった。

最後尾にいた狩人が後方で散発的に矢を射つてきている敵を打ち返して倒すと周り

にはもう私達を狙う敵はいなかった。

あんなにも目の上のたんこぶ状態だった敵陣は散り散りのバラバラになり、部隊としての機能を失ったのだ。

「みんな！一時停止。周りを警戒」

返り血で鎧を染めたブリちゃん片手を頭にかざして印を結びながらみんなに声をかける。すると護衛の2パーティーは私達を中心にして周囲の警戒をする。

ブリちゃんは私達より後に突破していくパーティーを確認していく。みんな疲労の色は濃いがまだ大丈夫そうだ。

「このまま城壁まで駆けるわよ」

追撃が来ないことをいいことにたつぷり時間をかけて撤収する仲間達を確認した私達は城壁に向かって駆ける。悠長にしすぎていたためかなり後方になったが敵の追撃は一切なく私達は速度を緩めることもなくナンカ防衛要塞線まで戻ることができた。

「お疲れ様です。ブリトニー殿」

城壁内に入ってすぐに兵士が近づいてきてブリちゃんに声をかけてくる。

「そちらも苦労様。どう？」

「今のところ一人も」

「そう。こつちも見てた限り大丈夫そうよ」

ブリちゃんの言葉に兵士は笑顔になる。その後、「指令部へ」と伝えるとそそくさと離れていった。

「あの・・・私達は？」

「呼ばれたのは私だからあなた達は戻ってなさい。多分すぐに帰れると思うから帰る準備でもしておきなさい」

「え？でもまだ何も・・・」

「あんた達は功労者。一番に帰すことなんて造作もないわ」

ブリちゃんはさっさと指令部の方へ歩いて行ってしまった。

その後の発表で攻撃は大成功。重傷者、死者はなし。軽傷者は出ているがこれは撤収の際に手間を惜しんだためのもので実質的には負傷者なしだ。敵陣も再構築されている様子もなく。襲撃される前の状況に戻りつつある。

私達は作戦終了の翌日に帰ることを許された。その時はまだ、敵陣の再構築がないか偵察を送っている最中で大丈夫なのか？と思ったが指令部とブリちゃんとのやり取りには参加していないため、どういった展望を描いているかわからない。

まあ、大量の報酬を貰い、帰っていいと言われたら私達の役目は終わったということなので素直に従おう。

オルタナに帰って約3週間位過ぎた早朝、1回目の鐘が鳴ってしばらくたった時間にはレッドムーン事務所に入る。事務所に入って奥のカウンターにはブリちゃんはいない。

「シオリンおはよー。待つてたよー」

「ひよむーおはようございます」

ブリちゃんの代わりにひよむーが座っている。ブリちゃんはナンカ防衛要塞線から帰って来たと思つたらこうして事務所を空ける時が増えた。そういう時はひよむーが代理としてカウンターに座る。

私はひよむーに挨拶をしてカウンターの中に入り、そのまま奥の部屋に入った。

その部屋には小さい窓が1個だけで薄暗い。私はドア近くに置かれたランプに火をつけて中心の引っかけに吊るす。ランプの光に照らされた部屋は壁1面に書棚。書棚には分厚い紙が隙間なく詰まっている。それだけではなく書棚に入りきらなかつた紙が床に置かれたりしている。そして部屋の奥に小さい机がある。私はその机まで歩く。

机の上には書類の束が大量に積まれており、それを確認して私はため息を吐いた。

「たった2日でこんなに溜まつてる」

本来ならひよむーの仕事なのだけど最近私ができるようになって書類仕事をしなくなつた。

「ブリちゃんに言いつけてやろうか・・・」

ブリちゃんに言つても「適当にやるひよむーより、あんたにしてもらつた方がいいわ。なんなら毎日来てもいいわよ」つて言われる気がしてまたため息を吐いた。

大量の報酬を貰つたから長期休養と決めていたが、ある日ブリちゃんが私の部屋に入つてきてレツドムーン事務所まで連行された。そして教えられる庶務としての仕事。パーティーとして活動しているので毎日来なくてもいいが来なかつたら怒られる。暗くなつてきた気分を頭を振ることで切り替えた私は椅子に座る。

今日はメリイの手伝いがなければ夕方までかかるな。そんなことを考えながら目の前の書類を手に取り内容を確認する。

「まあ、今までが頑張り過ぎましたし少し休憩つてことで・・・」

そんな独り言を呟いて私は目の前の仕事に取りかかった。

自分だけうまくいっても失敗する時もある

## 4 2 話 プロローグ

—アラバキア王国首都—

王宮内にある、豪華な調度品に囲まれた評定の間にこの国の権力者が集まっていた。

大きな卓の上座には他の椅子と比べても明らかに豪華な椅子が設置されている。そこに腰掛けるのはギユスタープス・ベルナップ・アラバキア。アラバキア王国を統べる王だ。身に纏う物は豪華絢爛でその顔は尊大な面構え。ノーライフキングとの戦争に唯一生き残ることのできた人間族の王族であることに絶対の自信を体中から滲ませ周囲を圧している。卓の左右に着席しているのはアラバキア王国の重鎮たち。先王の時代からその権力を支えていた老臣がほとんどだ。

「リバーサイド鉄骨要塞を先に落とすべきでは？」

「前哨戦としてデットヘッド監視塔を先に落としてその勢いでリバーサイド鉄骨要塞を攻略するのがよいのでは？」

「デットヘッドからリバーサイドの間には噴流大河ジェットリバーがある。船もないのに大量の兵をどうやって渡らせる」

卓上に広げられた巨大な地図をはさんで次々と意見が出され議論は白熱している。

事の発端はナナンカ防衛要塞線での一件。ナナンカ王国領を支配するオークに奇襲攻撃を受け防衛戦を行い停戦。その後、膠着状況に陥ったが人間族主導の奇襲攻撃によりこれを撃破。生き残ったオークはナナンカ王国領に撤退した。

過去に散々オークに苦渋を舐めさせられていた所に無傷での勝利。このままの勢いでオークの支配している地域を取り戻したいという意気込みが重臣たちの目から感じられた。

「デットヘッド監視塔を落とせはリバーサイド鉄骨要塞とそれ以降の侵攻がやりやすくなる」

「デットヘッド監視塔程度の防備ではオークの攻撃は防ぎきれん。リバーサイド鉄骨要塞ほどの規模であれば攻撃も容易に防げる堅牢な拠点になる」

「堅牢な拠点になるということは同時に落とすににくいということであろう。攻めあぐねている隙に増援に襲われたらどうする？」

デットヘッド監視塔とリバーサイド鉄骨要塞どっちを先に攻めるかは一長一短で難しい問題だ。やがて居並ぶ重鎮の意見がおおよそ一巡した。意見は割れた。どちらの意見も優勢というわけでもない。そうなった場合、王の意思を聞くしかない。重鎮たちは王に視線を集中させた。

重臣たちの視線を意に返さぬように王ギユスターブスは口を開いた。

「お前たちの意見はどちらも利にかなっている。だが私はお前たちに第3の提案をした  
ら」

重鎮たちがざわめく。そのざわめきを楽しむかのように聞き入り、そして提案した。

「どちらを先にするか決めかねるほど、どちらも大事。ならば両方すればよいだろう」

「ですが王よ、両方と・・・なりますと、かなりの兵力を準備しなくてはなりません」

すぐに1人の重鎮から発言があつた。ギユスターブスはふんつと鼻を鳴らして居並ぶ重鎮たちを見渡す。

「こんなときのためにごくつぶし共を生かしていたのだろうか？」

「あのような者達を信用するのはどうかと」

「そうですね王よ。それに王の威厳を意に反さぬ蛮族共もいます。下手に兵を動かすと楯突く可能性もありますぞ」

ギユスターブスは「ふむ」と納得し意見を取り下げる。その様子を見て重鎮たちは安心した。しかし、「王よ」と呼ぶ声がして皆その声を発した末席に座る若い臣に注目する。

「ここであえて警戒を解く振りをするのはどうでしょうか？」

「どうゆうことだ？警戒を解く・・・振りをする？」



「ええ、しかし、本当に警戒を解くわけではありません。わが国は比較的友好的な蛮族共に対しても他の蛮族と同等の扱いをしております。それを解いたと見せれば、相手を信用したと内外に示せます。そうすれば我が国が信頼に厚い国だと訴えることができます」

ここで言う内外というのはエルフなどの同盟国家のことだ。人の姿を真似た下等な種族共は王宮を信用しておらず、王宮よりも要塞都市オルタナを治める辺境伯ガーラ・ヴェドイーの方を信用している始末だ。

「蛮族ならまだしも下等な種族共にそんなことができるか！」  
「むしろ先に落として吸収してしまえばいい」

長くから仕えている老臣たちが声を荒げ、若い重鎮の意見に反対する。

ギユスターブスは「なるほどな」とうなずき重鎮たちをもう一度見渡した。

「どうだ？」

「若さゆえ、荒さは伺えますがよいのではないのでしょうか」

「アラバキア王国の権威を自ら貶めることはないかと思えます」

「やってみる価値はあるかと」

「成功すればオーク共から領地を取り戻すことができ、下等国家の信頼を得られるかと」  
老臣からは否定的。しかし、多数を占めている中堅以降から出てくる意見は肯定的

だった。数の上では肯定。その様子を見てギユスターブスはうなずいた。

「ではどちらが先というわけではなく両方ともという方針でよいな」

ギユスターブス・ベルナップ・アラバキアが決定した時点で、デットヘッド監視塔とリバーサイド鉄骨要塞の同時攻略という方針が決まった。

「思いつきで言ってみたものの私の案が採用されるとはな」

「王は聡明です。王が方針を言ってくだされれば細かい部分は我々が詰めさせていただきます」

「ふふ。お前たちにそういつてもらえると嬉しいぞ。して、指揮官は誰にする？」

「グラハム・ラセントラ將軍が適任かと」

グラハム・ラセントラ將軍は要塞都市オルタナに駐留する軍の総指揮を長く任されている。確かにデットヘッド監視塔とリバーサイド鉄骨要塞の同時攻略を任せるにはその辺の地理が明るい將軍に任せるのが適任だろう。

「お待ちください。グラハム・ラセントラ將軍は先日オーク共に出し抜かれ失態を演じています。贖罪もすんでいないのそのような大役を任せるのはどうかと思います」

先ほどの若い重鎮が声をはさんできた。ギユスターブスは若い重鎮の方に向いた。

「では誰が適任か」

グラハム・ラセントラ將軍に並ぶ將軍は本土にはいるが地理に明るいというアドバン

テージを覆させるほどの力を持つ將軍はいないはずだ。

「ウォーター家の者が」

名門貴族のウォーター家。確かに忠誠心が厚く。仕える者の能力が高いと聞くが：「ウォーター家？リチャード・ウォーター將軍は最近病で本家に療養中で將軍職もその際に一時返納したのではないのか」

「実は隠し玉がありました．．．」

「隠し玉？」「そんなもの聞いたことがないぞ」周りからささやき声が聞こえる。忠誠心が高いウォーター家が王宮に対して出し惜しみするようなものではないはずだが、あの自信は．．．まあどちらにせよ今はそのようなことを説いただすときではない。

「ふむ。それは大筋が決まっただけから聞くとするか。楽しみにしているぞ」

ギユスターブスは警護の兵と共に評定の間を出て行った。

「．．．よしー」

若い重鎮はギユスターブスを見送った後小さくガツポーズをした。

「これで俺も計画に一役嘯める。後は俺の息のかかった者を出世させれば．．．」

自分の息がかかった者を重要な役につかせるには大量の玉金が必要だろう。しかし、成功させればそれ以上の物がペイできる。先ほどから妬みの視線がチクチクと刺さっているが気にならない。

「これが俺のスタートだ」

若い重鎮は一人声を押し殺して笑う。自分の描いた未来を想像して

要塞都市オルタナ辺境伯ガーラン・ヴェドイー邸

高が天井高く、広々とした部屋の執務机にガーラン・ヴェドイー辺境伯が座っており、執務机に直面して置かれている応接机にはグラハム・ラセントラ將軍。そして、オルタナ辺境軍義勇兵団レッドムーン所長ブリトニーはいた。

「急に呼びたててしまつてすまないな。すぐに家の者が飲み物を持つてくる」  
「お気になさらずに」

しばらくして使用人がテーセットを載せたワゴンを持ってきて3人に配る。ブリトニーが優雅にカップに入ったカウヒューを一口のみ終わった後にガーランは口を開いた。

「王都で少し動きがあつてね」

「動きというと先日的一件でしようか？」

ブリトニーの顔がこわばる。あの一件でガーラン・ヴェドイー辺境伯やグラハム・ラセントラ將軍に何か制裁があつたのだろうか？ 最悪どちらかが解任され別の者。王都暮らしのボンボンが就いたらいろいろとまずい。

「いや、ブリトニーの思っていることは起こっていないと断言できる」

「そう」とブリトニーは安堵した。だが、將軍と私が呼ばれた理由は想像できない。

「向こうにいる私の友人からの知らせでオークの支配地域に侵攻する作戦を企てているらしい」

「なるほどだから私やグラハム將軍を呼んだということですか」

おそらく先の戦いで人的被害なしでオークに被害を与え、その傷が癒えぬうちに領土を取り戻そうという算段か。ガーラン辺境伯はブリトニーの思惑に気づいた。本当なら「そうだ」といいたいのだが少し違う表情を暗くしたガーラン辺境伯に怪訝な表情を見せているブリトニーにグラハム將軍は口を開いた。

「此度の侵攻指揮を取るのには私ではない」

「えっ？」

ブリトニーは驚愕した。將軍はここの総司令になって長くナンカ防衛要塞線を

守ってきたのでナナンカ王国領周辺の地理に詳しい。その將軍に指揮を頼まないなんてどうかしている。驚愕するブリトニーにガラン辺境伯は説明する。

「向こうはどうもグラハム將軍の指揮に疑問を感じている一派がいるみたいだ」

「みたいだ……ってグラハム將軍は長くここオルタナとナナンカ防衛要塞線を守っていたじゃないの」

「ブリトニーの言っていることは当然だ。おそらくだがこの一件、権力増強のダシにされている可能性がある」

怒りを覚える。こっちは命がけで守っているのに向こうは当然として受け止めている。いや、別に指示するなというわけではないが私たちの命をそんな軽々しく扱わないでほしい。

「ナナンカ王国領に侵攻することはほぼ決定だろう。そうなるここオルタナの兵も動かさなければならぬ。なので、そちら助けてもらうことになる。その時は頼んだ」

「判っておりませうとも」

内心は不機嫌そのものだがブリトニーはそんなことを一切出さずに2人につこりと笑いかけた。

「お声をかけていただければすぐに駆けつけます」

「頼りにしている」

ガーラン辺境伯の言葉に続いてグラハム将軍が頭を下げた。

「して、ブリトニー殿。あの戦いの時不思議な能力を持った者が指揮を取っていたようだが？」

「はい。最近うちに入ってきた子です」

「言葉使いは指揮を取るものとしては全然だがかなりよかったと評判だったぞ」

「つたない状態でお披露目してしまい申し訳なく思っていますわ」

「いや、責めているつもりはない。して、次も出るのかね？」

「はい。必要な時に留守にしないように確保しております」

話は最近入った義勇兵の話題になった。今度は心のそこからやりと笑った。

「義勇兵にもブリトニーやホーネンのような者が入ってくれるのはうれしい。その才が正しく成長してくれることを願おう」

「それはもう。2人で鍛えていく予定なので」

「それは頼もしい」

ガーラン辺境伯とグラハム将軍が笑う。

ガーラン・ヴェドイー邸の帰り道。馬車に揺られてブリトニーは考える。

あの力、あの子は死ネクロマンサー霊術師のアピリティって言ってたけどウソね。そんなの聞いたこともないわ。団章を購入する際、ロジエと一緒にいた・・・あのジジイが一目で見抜く

とは思えない。なら最初から持っていた？

「考えてもしかたがないか」

現状わからないことだらけだ。肝心の死霊術師ネクロマンサーもあまり言いたがらない。特にマイナスにならないことを考えるのもアレなので思考を切り替える。

ナナンカ王国領への侵攻。どこまでやるか判らないがデッドヘッド監視塔とリバーサイド鉄骨要塞は確実に落とすにきる。デットヘッド監視塔ならともかくリバーサイド鉄骨要塞は被害が大きくなりそうだ。

「準備を入念にしなくちゃね」

ひよむーが庶務を取り仕切っていた時は書類が適当で大掛かりな作戦が取りづらかったが大型新人のおかげでその辺も解消できそうだ。このまま順当に育てれば副所長も夢ではないだろう。

「でもあの子そんなに強くないのに何で外に出たがるの？」

庶務の仕事を始めてから少ないが給料は出している。しかし、パーティーを組んで外に出たがることに頭を捻る。実際はシオリがネクロマンサーギルドに多額の借金を作らされて日々資金調達のために外に出ていることを知らないのだ。

「まあ、よく外に出ることがなければ庶務に引つ張ってこなかったし、よく外に出てくれるおかげでこんなにも使えることが分かったのよね」



結果オーライか・・・

「あ、ふう・・・まあ明日のことは明日に考えましょう」

欠伸をしながら窓を見る。馬車から見える風景はもうすぐ自分の家だと思っかけている。ブリトニーは考えるのをやめて窓の風景を眺めていた。

## 43話 休日

「傷によく効く塗り薬だよ」

朝、開け放たれた窓から行商人の声が響く。早朝から出発するパーティー向けに巡回しているのだ。

「う……うるさい」

必要以上の大声で目が覚めてしまった私はベットの途中でモゾモゾと蠢いた。低血圧気味のせいでボーっとする頭にガンガン響くのが非常に不快だった。早く窓を閉めて、早く夢の世界にダイブしたい。が、そのためにベットから起きるのが本当に億劫だった。

「……無視しよう」

決めた。うるさいとは言え布団を頭からかぶれば耐えられる。だから寝る。こんなに負けない！決意と共に布団をガバツと頭までかぶった。

「何やってるのよ。起きなさい」

布団をかぶった瞬間。あきれかえった声が私の耳に届いた。そして、同時に頭までかぶっていた布団がガバツと捲くられる。

「ふえ!？」

突然の出来事に思わずまぶたを開ける。

「おはよう。シオリ」

ベットの脇には1人の女性が立っていた。

青い髪に女の私が見てもドキッとするくらいのきれいな顔。しかし、表情は目をすばめてジッと私の方を見ていた。

「もう朝よ。今日は朝から外に行く予定でしょ」

「えっ?」

確かにそんな約束をしていたような・・・

「忘れてた?」

「もつと日が昇ってからだと思ってた」

「起こしにこなかったらお昼ぐらいまで寝てるくせに何言ってるのよ」

横になっている私の腕を引っ張って起こされる。二度寝を諦めた私はベットから起き上がった。

手鏡で簡単に身だしなみを整えメリイの方を向くとテーブルに何かを広げている姿が見えた。

「何それ?」

「ここで朝ごはんっていったら硬パンに水でしょ？サンドイッチとミルクを持ってきたからこつちを食べなさい」

席に座り袋を広げる。そこには手作りのサンドイッチが入っていた。

「店で買ってきたんじゃないんだ」

「崩れてた？」

「ううん。朝早くから起きて作ってくれたんだなって」

「普通でしょ」

サンドイッチにかぶりつく。レタスに卵にトマトそしてチーズ、オーソドックスなサンドイッチだ。私には朝からこんなのを作ることはできない。コップに注がれたミルクを飲んで一息ついたところでメリイが口を開いた。

「そういうえば引越し、するつもりない？」

「えっ？」

「料理作らなきや上達しないでしょ。今の内に引越しするのもいいのかなって」

料理かあ、外で当番の時ぐらいいしか包丁を握らないからなあ。女の子だったら料理ができないとダメっていうしなあ。

「・・・前向きに検討します」

「ホントよ」

引越しするならメリイの部屋の近くがいいかも。そうすれば起こしに来てもらうのも楽だろうし、料理も作ってもらえそう。何なら一緒に……

「……だらけさせるために提案したわけじゃないのよ」

「ナンノコトカナ」

メリイはまたジトーとした目で私を見てきた。本当にメリイは鋭い。私はメリイの追及を避けるようにサンドイッチにかぶりついた。

それからゆつくりと着替えて2人で商店街に移動した。

「朝から人がいっぱいだよ」

通りに出た瞬間に人、人、人。これからこの中に入ると思うとげんなりする。

「その気持ちわかるわ」

メリイもちよつと嫌そうな顔をしている。今日は何か特別な日だっけ？それとも旅商人が一気に北側に来ちやつたとか。

「まあ、こんなに混むってことはいいのがあるってことよね」

「そ、そうよ。きつといいのがあるわ」

主に北門で活動する私たちはここ以外の商店街は知らない。いや、場所は知っているが今日は冒険をする気はない。でもここに入るのかあ

「……帰ろう」

やっぱりやめておこう。私はメリイにそう告げるとくるっと方向転換して歩き出した。

「行くわよ！」

「ぐえ!?!」

逃げられない。首元を掴まれた。そして悶える私を引き連れて人ごみの中に入っていく

「中に入れば多少ましね」

みんな目的の店に入って買い物を楽しんでいるのか人口密度が減る。混んでいたのは時間が早すぎただけのようだ。

「今日はどうするの?」

「どうするのって、もちろん服よ」

「服ってメリイ結構持つてるじゃない」

「私のじゃなくてあなたのよ」

メリイは私を引き連れて歩く。歩く姿に迷いはなく事前に下調べしていたか行きつけの店に行くようだ。

「まず(は)ハハよ」

最初に案内された店は大衆向けの服屋ではなくもつと高級な店。置いてある服はど

ことなく初めて私たちがここにきた時に着ていた服っぽい。

「メリイこの服……」

「この店は私たちが着ていた服を参考にしたのを置いてるの」

近くにあるブラウスを見てみる。普段私を利用してあるのは一種類だけなのだがここにあるのはビーズや刺繍、レースで装飾され、袖や襟の有無、形状で色々なバリエーションがある。値段は……う、高い。

「種類が多いんだけど基本的に現品限り、高いのがネックだけど欲しくなってくるでしょ?」

「……うん」

確かに。それにどこか懐かしい気持ちになってくる。

「まずはこれね」

メリイはあらかじめ目星をつけていたのか衣服をいくつか私に手渡すと押してきた。

「あそこで試着するの」

「試着って外で着替えるの!?!」

「外じゃなくて店の中よ」

そのまま個室に押し込められる。個室は一人が入ってやっと位の広さ、目の前には大きな鏡が置いてある。着替えないと出してもらえないのよね。

しゆるしゆる

ドアの向こうは外。そんな無防備な場所で下着だけになる。意識をしちやいけないのはわかつているが恥ずかしくなってくる。なるべく意識しないように急いで着替える。

着替えが終わって目の前の鏡にはワンピースにブラウスを合わせてカーデイガンを羽織った姿が映し出される。ちよつとスカート短くない？スカートの裾を引つ張るがそれ以上下がない。諦めた私はその場で体を捻って他におかしいところがないか確認する。他におかしいところないよね？

「ど、ど、ど？」

ドアを開き、メリイに自分の姿を見せる。

「うん、いいよ。似合ってる。えっと・・・次はこれね」

メリイは次々と新しい服を選び、渡していった。

「本当にいいのお金？」

服の代金はメリイと割り勘した。結構買ったのに。

「いいの。感謝するならその分大切に着てよね」

「うん。もちろん大切に着る」

お昼も食べ、午後も色々な店を回った。それはとても楽しい時間だった。



「ブリちゃん。お客さんだよ」

レットムーン事務所所長ブリトニーはいつもの定位置であるカウンター奥ではなく、所長室にいた。

「わかったわ。ひよむーお茶お願いね」

「はーい」

ひよむーにお茶を入れてくるように指示をしてゆつくりと応接室に移動する。

応接室に入ると見知った顔、要塞都市オルタナに存在する各ギルドの代表が椅子に座ってブリトニーを待っていた。

「待たせちゃった?」

「今来たところだ」

デートの待ち合わせのようなやり取りをしつつ席に着く。席に着いたところでひよ

むーがお茶を持って入ってくる。そして、そそくさとお茶を置いて出て行ってしまった。

「本土からガーラン辺境伯へ早馬がきたわ」

それは召集する際に伝えたことなので7人は無言でうなづく。

ただ、早馬の内容はガーラン辺境伯に呼び出されたブリトニーしか知らない。アラバキア王国や辺境軍の対応はブリトニーが窓口となっていて。ガーラン辺境伯との会話のあとにこうして各ギルドの代表を集めたのだから会話の内容があまりよくないものだというのは容易に想像できた。

「・・・大きく2つ」

ブリトニーは人差し指と中指を立てて顔の高さまで掲げた。

「ナナンカ王国領の侵攻が決まったわ」

過去何度もナナンカ王国領に侵攻したことはある。7人の表情は「・・・またか」といった表情が浮かんでいる。

「して、今回はどっちを先に攻略するだ？」

「両方よ」

ホーネンの言葉にブリトニーが即答する。その言葉に残りの代表は顔を見合わせる。過去ナナンカ王国領に侵攻した時はデットヘッド監視塔かりバーサイド鉄骨要塞の

どちらかを攻略していた。それを同時攻略となると

「うまく両方攻略できればよいがリバーサイド鉄骨要塞の攻略が遅れたり失敗すれば  
デットヘッド監視塔が自動的に失敗することになるぞ」

両方砦という扱いとなつているが規模が全然違う。リバーサイド鉄骨要塞の攻撃の  
遅れでデットヘッド監視塔に援軍が送られてしまえばデットヘッド監視塔の攻撃は失  
敗してしまう。それにリザードマンの噴流ジェットリバー大河上の制海権、オークの竜騎兵いるために  
取った後の維持も侵攻もかなり難しい。そんな状態なのにわざわざ兵を分けて攻略す  
るのは確かに難しいことだ。

「そうは言つても本土の兵は準備が出来次第こちらに来るらしいわ」

すでに作戦は承認され動いている。義勇兵団は基本的に自由だが所属は辺境軍、アラ  
バキア王国軍の正規兵だ。この場で話されている時点で義勇兵にも参戦命令は出てい  
るのだろう。

「もう一つは？」

ため息をつきながらブリトニーに聞く。ブリトニーは苦い顔をしながら口を開いた。

「デットヘッド監視塔を義勇兵団で攻略することのお達しを受けたわ」

「なっ!?!」

思わず席から腰を浮かすほど驚愕する内容だった。代表達は互いの顔を見合わせる。

「すでに他の街に点在するギルドに親書は送ってあるわ」

他の街の義勇兵をかき集めても限度がある。総数は2千を下回るだろう。砦を攻めるには少なすぎる。ギチギチとした動きでブリトニーの方を向く

「ガーラン辺境伯から兵を借りてかろうじて2千これでデットヘッド監視塔を攻略する」

部屋にいる全員が嘆きたい気分だろう。しかし、拒否権はない。

「本土は義勇兵団をつぶす気か」

ギルド代表の1人が言った。普段から活動実績が悪く、辺境軍に迷惑をかけているなら「適当に使いつぶしてしまえ」という判断がでもおかしくはないがそういった問題は起こした記憶はない。

「多分だけど作戦行動中の食料は向こうが用意してくれる……させるから心配しないで」  
何を心配しなくていいのだろうか。ブリトニーに文句を言ってもしょうがないので誰も何も言わない。

「そういうことだから具体的なものは後日連絡するから……解散」

解散の宣言が出されても誰も動こうとはしなかった。やがて1人が退室するとまた1人と退室していった。1人残されたブリトニーはため息をついて部屋から出て行った。

## 44話

## 私ってどんなタイプ？

夕方、レッドムーン事務所から帰ってきたブリちゃんは所長室に私を呼び出した。

「そこ、座って」

ブリちゃんが執務室の前のテーブルに着席させ、自分も対面に着席すると上半身を乗り出してきた。ブリちゃんは両の肘を机の上に乗せ、握った左の拳を右の手の平で包むようにしてから右手の指の背に顎を乗せたいつもカウンターで見慣れているの体勢になった。

ブリちゃんの顔から笑みが消えている。刺すような鋭い視線で射抜かれ、私は思わず身構えた。

「困ったことが起こったわ」

なんの前置きもなく、ブリちゃんは唐突にそう言った。

呼び出して「困ったこと」とは私の仕事のことだろうか。ブリちゃんの口から出る叱責の言葉を想像して血の気が引く。

しかし、よくよく考えると私は失敗らしい失敗をしていない。出した資料や報告書は全てブリちゃんが確認しているし、指摘や訂正があるものはちゃんとやっている。むしろ

ろひよむーの方が怒られる筈だ。

何より叱責するならまっすぐ私のいる部屋に入ってくるはずだ。となると、私のことじゃない？

いったいなんだろうと頭を捻った。ブリちゃんはそんな私を冷めた目で見てから、少し低い声で言った。

「ゲットヘッド監視塔を義勇兵団だけで攻撃することになった。あなたはこれからその準備に従事してもらおうわ」

「・・・はっ？」

ぽかんと口を開け、何を言っているんだという顔で見つめる。ブリちゃんは右の人差し指を小さく左右に振って

「女の子がしていい顔じゃないわよ」

「はっ!？」

私は素早く手を動かして顎を持ち上げ、大きく開いた口を閉じた。

「んっ、ん。どういうことでしょうか？」

思わず出してしまったアホ面を取り作るようにブリちゃんに聞いた。ブリちゃんはくすりと笑って応じる。

「まあ、そうでしょうね。今から詳しい話をするから、よく聞いて」

「デットヘッド監視塔を攻撃するっていう重大なことに対して「よく聞いて」と念押しするのだから本当に大事な話に違いはなかった。

とはいえ。デットヘッド監視塔を辺境軍の力を借りずに義勇兵だけで攻撃するといふのは、それは重大なことだ。しかし、そのことと私が庶務として活動することが感覚として上手く結びつかなかった。

「今回の作戦はそれぞれリバーサイド鉄骨要塞を辺境軍、デットヘッド監視塔を私たち義勇兵団がそれぞれ受け持つ。リバーサイド鉄骨要塞に関しては置いておいて、デットヘッド監視塔は大体1千人規模の砦よ。戦時にはそれ以上の人数が入ることはあるけど多くて1千5百程度とと思ってちょうだい」

ブリちゃんはいったん言葉を切って、すぐに続けた。険しい表情で

「敵も黙って私たちが砦まで行くのを見ていないわ。移動中に野戦が入るはずよ。準備はここオルタナで行うから感づかれることはまずないからそうね、8百ぐらいで遅滞攻撃をしてこちらの足を止めて援軍を待つとかかしら」

「ここまでで1千5百と8百。8百は1千5百から捻出されるだろうからある程度は無視できるが、こちらが困むのが遅れたらさらに増える。

「そして義勇兵団は2千に届かない程度。オルタナを治めているガーラン辺境伯から私兵を借りて2千。それに周辺貴族から借りれそうだからもうちょっと増えるわね」

1千5百の砦を2千弱で？

城や砦を攻める場合、攻める側は少なくとも3倍の兵力が必要という兵法の常法に照らせば陥とすことなんて無理だ。ブリちゃんは私の考えていることを見透かしたように口を開いた。

「もちろん2千で1千5百の砦を普通のやり方ではまず無理ね。だからスピード勝負、準備もそこそこで強攻を敢行するわ」

消耗も覚悟の上で「強攻」するの？

強攻は城壁をよじ登る。梯子、雲梯をかけたりなんかして内部に入り込み、守備塔を占拠したり門を開いたりする攻め方だ。攻める側が内部に侵入できても敵の錬度や指揮が高い場合や、内部が迷路のような構造だと被害がどんどん大きくなる。なので普通は包围をし、攻城兵器や火矢を使って破壊工作や内部の兵に攻撃を行う。そして、施設の破壊度、兵糧・物資の困窮度、士気の低下を確認し、頃合を見て総攻撃である強攻をかけるのだ。

「あなたにやって欲しいのは今回のに必要な兵糧・物資の準備。何か質問はある？」

「準備と言っても何を準備すればいいかわからないのですけど」

私の質問にブリちゃんは部屋の隅にある分厚い書類の束をドスンと机の上に乗せた。

「うつつ」



「前回の攻撃の際に作成した資料よ。これを見て」

書類の分厚さに思わず仰け反る私を無視してブリちゃんは説明を続ける。書類に目を落とすと小さなマスの中に、びっしりと細かな数字が書き込んであった。

「・・・はい」

「何か判らないことがあったら、聞いてね」

と言ってブリちゃんは部屋から出て行った。

今ごろ他のみんなは休日を満喫しているんだなと思うと自分の境遇に嘆きたくなる。こんなことをしているより、外で体を動かしていたほうが何倍もいいと思った。

とはいえ、考えていても何も始まらない。決まってしまったことは覆らない。大きなため息をついた私は書類の束を持って部屋から出た。

朝から夕方まで書類と格闘する日が3日続き今日で4日目の朝となった。

その間、判らないことを聞いたり、ミスを何度も何度も指摘されたりして嫌気が差していた。このまま部屋の隅で書類仕事を続けていると体の先から腐敗が始まって全身腐ってしまうのじゃないか。そんなよくわからない恐怖に襲われた。

「鍛冶屋から破城槌の図面もらってきました」

そろそろ限界だから半日ぐらい休もうか？と思っているとドアを開けてヒロトが筒状に丸めた紙の束を持って入ってきた。はつきり言ってこれだけの仕事1人で処理す

るのは無理な話だ。書類を見るだけで1日が終了した時点で私はみんなに救援要請をした。みんな快く快諾してくれてそれぞれ関係各所に赴いて仕事をしてもらっている。できれば私もこんな所で仕事をするより陽の光浴びれる外での仕事をしたかった。

「破城槌のパーツですけどちよつと遅れそうです」

「どうして?」

「辺境軍の方でも製作の依頼が出て鉄が不足きみみたいですよ」

被っちゃったか。製鉄関係は製作に時間がかかるからできるだけ急いだのに。まあ余裕を持って発注できたからちよつと位大丈夫か。んーと伸びをして分厚い書類の山を睨んだ私は気を取り直して書類の山の掘削作業を再開した。

ナナンカ防衛要塞線での戦いの後、レッドムーン事務所庶務の手伝いを始めた以外に変わったことがある。それは私が1人で外にいる時によく起こる。そして今回はシェリーの酒場で夕食を取っている時に起こった。

「どうだいこの筋肉」

私の対面に座った男が両手を腰に当て上半身を強調させている。服の上からでもわかる分厚い胸板を時折ピクピクつと動かして私に猛烈にアピールをしている。私はその様子を焦点の合っていない目で見ていた。

「嬢ちゃんのパーティーは女性ばかりだから俺のような力持ちは必要だろう。少しの間でもいいんだ、入れてくれないか」

「その・・・ちよつと無理」

クランへのお誘いと私のパーティーに入りたい人が私に声をかけてくる。少し前の私だったらとつても嬉しいことだったのだが私に向けられるいやらしい視線に気づいたり、何故かやたらとパーティーの交遊関係を聞いてくるということが多かつたため、嬉しいという感情はもうほとんどない。さっきの男はそういうのがないから、まだでまじな方で再考の余地は・・・ないわね。だって筋肉しかアピールしてなかつたもの。

男は自分の席に戻ったのか周りの男連中に「お前にハーレムは早ええ」やら「筋肉見せたときの顔見たか」と私の顔マネをしてからかつて酒の肴にしている。せめてそういうのは私の見えない所でやって欲しい。

「はあ」とため息をついて自分の食事に目を落とす。今日のメインは鳥のから揚げ。大きめの鶏肉がカラッと揚げられていて食欲がそそる。そそるはずだった。

「何か・・・うん」

大きめのから揚げを見ているとあの筋肉を思い出してしまう。これだと決めたのにあれを見てしまったから揚げの気分じゃなくなった。むしろ少し気持ち悪い。私は隣の席で飲んでいた集団にから揚げをパスをした。パスの際、「筋肉が・・・」と言うと爆笑された。

誰でもいいから入れたらなくなるのだろうけどもうすぐデットヘッド監視塔の攻撃が始まる。チームワークが欠けている状態ではメンバーに危険な目に合わせてしまうかもしれない。不完全な6人よりも完全な5人。6人目はこれが終わってからだ。

「じゃあ、どうすんだよ！このままでいいのかわよ！」

サラダを齧りつつ代わりのメインを選びなおしていると懐かしい声が聞こえてきた。かなりの大声だったので何人かが声の方を向いている。

声の主はランタ、席にはマナト達がいる。ユート達はいない。

ランタはマナトと言い合って1人で出て行ってしまった。マナト達はランタを視線で追う。その過程でユメが私を見つけて手を振ってきた。私は食べ物を持って席へ移動した。

「久しぶり」

「元氣やった〜？」

マナト達も元気そうだ。だけどランタの様子おかしかった。どうしたんだろう。

「ランタどうしたの？」

「あ、うん。ちよつとね」

言葉を濁される。喧嘩別れみたいなのを見られてどうしたのと聞かれたら言いづら  
いのは当然だ。久しぶりの再開なのにギクシヤクして上手く会話が噛み合わなかった。

後日、デットヘッド監視塔の攻撃の参加リストにランタの名前だけ見つけた。そして  
その翌日、マナト達の名前が追加された。おそらく、今回のに参加するかどうかについ  
て口論をしていたようだ。一緒の場所に名前が書かれたということは仲直りはでき  
みたいだ。

そういえば私たちのパーティーで、口論や喧嘩ってしたことないなあ。

「私たちのパーティーって上手くやってるのかなあ」

「どうしたの急に」

「前にマナト達と会ったんだけど・・・」

一緒にの部屋で仕事をしていたメリイが作業の手を止めて私の話を聞く。そして口を  
開いた。

「パーティーの雰囲気はリーダーによって決まると思う。それと私が見た範囲ではリー  
ダーには大きく分けて2つのタイプがいると思う」

「2つ？」

「独裁者タイプと、議長タイプ。名前は適当だから、あまり気にしないで」

メリイは口を止めて少し考えるそぶりをする。

「独裁者タイプはレンジみたいな感じで、有無を言わず他人を従えさせる実力がある。そういうパーティーはその人の思い通りに動くから喧嘩なんてまず起きない。起きたとしても起こした人が制裁されたりしてパーティーからいられなくなる」

レンジが独裁者かあ、確かにそうかも。あのロンでさえレンジに付き従ってるし。マナトはレンジと違うから議長タイプ？

「議長タイプは意見を取りまとめるのが上手い人。シオリの近くにいる人だとマナトがわかりやすいわね。このパーティーはメンバーが好き勝手してもリーダーが丸く治める。今回はランタが参加したいと駄々をこねて、マナトが他のみんなを説得して参加したんじゃないのかしら」

なるほど、議長タイプのパーティーは喧嘩が起きたりするってことか。んっ？でもそれって

「私たちのパーティーって喧嘩起きたことがないよね。私って独裁者タイプ？」

「あなたが勝手に危険な所に突っ込んでいって大怪我して、怒られる以外は何もないから独裁者タイプじゃないかしら」

「うっ」とたじろぐ。大怪我したのは2回ぐらいだから・・・

「大きく分けてだからレンジやマナトみたいな典型的なタイプもいれば、独裁者タイプと議長タイプの両方の要素を持っているリーダーもいる。状況次第で使い分けたりとか」

色々なタイプがあるんだなあ。

「メリイは私のパーティーどう?」

「どうって聞かなくても判るでしょ。他のみんなもちゃんとついてきてくれてるし、気にする必要もないわ。シオリはシオリのままできて」

取りあえずは満足してくれていてうれしい。でも、面と言われてちよつと恥ずかしい。メリイも少し恥ずかしそうだ。恥ずかしさを取り払うようにお互い何も言わずに作業を再開した。